

建築と社会

Architecture and Society



特集 大阪ベイエリアの再生

2020 vol.101
01 No.1174
日本建築協会

若き創造者たちへ

「第67回青年技術者顕彰」のご案内

日本建築協会では、昭和29年（1954年）から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。

今年も、青年技術者選考委員会を設けて、これまでどおり、計画・設計・構造・設備・施工およびその他の分野について青年技術者を表彰します。

選考は有職者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

応募提出規定

1. 応募できる人は満35歳（2020年3月30日現在）以下の青年技術者であって、**本会個人会員**に限る。
2. 原則として、すいせん者を併記する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司が上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。
3. 応募分野は特定しない（建築に関するあらゆる分野を対象とする）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。
4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考する。
5. 「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第67回青年技術者特集号」（2020年7月号予定）に掲載する。
6. 提出資料

■応募用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードしてください。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

A：業績資料（A、BあわせてA3版6枚以内／書式は任意）

- ① 設計の場合——鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料
- ② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）——上に準じた資料
- ③ 上記以外の分野の場合——それぞれの分野にふさわしい資料

B：青年技術者の思い

業績資料に記載した業績において、本人が特に貢献した、力量が活かされた、と思われる部分を説明してください。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢や将来展望等についてまとめてください。文字だけでなく必要に応じて図表、写真等も用いてもかまいません。ただし、応募者本人の執筆に限ります。業績資料の中に内容を含めても良いです。（**応募者の考え方を知る上で大変重要と考えていますので、十分配慮をしてください。**）

7. 提出期限 2020年3月30日（月）

8. 提出先 （一社）日本建築協会「青年技術者選考委員会」

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31

大阪マーチャンダイズ・マート7階

電話 06-6946-6981 FAX. 06-6946-6984

E-mail : jigyoka@aaj.or.jp

9. 提出方法 郵送（当日消印有効）または持参

10. 青年技術者選考委員会（予定）

委員長 勝山 太郎／(株)日建設計設計部門理事
グループマネージャー

委員 岸田 文夫／(株)竹中工務店開発計画本部長（西日本担当）

長尾 健／長尾健建築研究所代表

橋本 修／(株)昭和設計執行役員

松原 茂樹／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻
准教授

北尾 聡子／大阪電気通信大学工学部建築学科准教授

古久保 真／清水建設(株)関西支店設備設計部副部長

小倉 良友／(株)日建設計エンジニアリング部門
設備設計グループシニアダイレクター

山口 善史／(株)大林組大阪本店建築事業部生産技術部長

青木 康造／大成建設(株)関西支店建築部品品質管理室長

他1名

2020年を迎えて

一般社団法人 日本建築協会 会長 設楽貞樹

2020年の新春を迎え、謹んで年始のご挨拶を申し上げます。いよいよオリンピックイヤーの幕開けです。本年が皆様にとって活力溢れる年になりますようお願いしております。昨年は一昨年に続き、台風や連続的豪雨といった自然災害が多発し日本列島各地で甚大な被害が発生しました。心よりお見舞い申し上げるとともに一日も早い復旧、復興を願ってやみません。

さて、日本建築協会ではかねてより会員のための活動と交流のプラットフォームを提供してまいりました。従来の歴史ある編集・事業・出版・教育の各委員会活動に加え、3年前の100周年を機に「新しい地平へ」の名のもとに複数の新企画を立ち上げました。自由な発想の論考を募る「片岡安賞」論考コンクール、若い世代を中心とした未来創生プロジェクト、元気なシニアの知恵を授かるエルダー委員会（仮称）企画などのほか、東京で初めての企画「トークセッションと懇親の夕べ」の開催、さらに長年の懸案であった「建築と社会」誌のバックナンバー閲覧システム、いわゆるアーカイブの整備など、活動の間口を広げ、会員のサービス向上を図る試みを多岐にわたり続けてきました。とりわけアーカイブについては、まもなくシステムが立ち上がり会員の皆様全員に会員番号とパスワードを交付しますので、「建築と社会」に収められた100年間の貴重な資料をホームページからアクセスして閲覧いただき、資料検索や研究活動などのお役に立てていただきたいと思います。

一方、他団体との連携にも積極的に取り組んでおります。昨年関西建築4団体共同で策定した「ARCHI-4 KANSAI提言書」の実現に向け、本年も4会協力していくとともに、当協会でも一翼を担う事業を協会活動の中で検討・実施してまいります。また、当協会も参画する「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪（イケフェス大阪）」が建築公開イベントの国際ネットワークOpen House Worldwideに加盟し、世界のオープンハウスイベントのひとつに認定されました。昨年秋にその「イケフェス大阪」と連携したスペシャルツアー「日本建築協会Presents! 天王寺の近代遺産と下寺町の台地を歩く」を開催したところ、建築以外の多くの人の参加を得てとても好評でした。今年も昨年に負けず参加いただきやすい企画に挑戦してまいります。

今年は子年、ねずみの年です。実際のねずみは電線をかじって火事を起こすなど、人間に害をもたらす動物であることは否めませんが、古くは子だくさんの生き物であることから子孫繁栄の象徴として、あるいは五穀豊穡の神である大黒天の遣いとして、むしろ人々に親しまれてきた歴史があります。当協会もねずみ年の子孫繁栄・五穀豊穡にあやかり、会勢の拡大を実現する年にしたいものです。

とは申せ、会勢拡大のためには、会員の確保をはじめ協会の柱である「建築と社会」の活性化や新事業の企画などなど、必須課題や重要案件が山積しているのも事実です。新年を迎え、新たな気持ちでそれら一つ一つに積極的に取り組んでまいりますので皆様の一層のご支援、ご協力をお願いし、年頭のあいさつといたします。

編集委員会

より魅力ある会誌創りに向けて、 具体策を打ち出す1年に

編集委員長
勝山太郎

協会設立当初から発行され、今月で1174号を数える非常に長い歴史を持つ会誌「建築と社会」は、会員の方々の企画・言論・作品の発表の場、会員相互の交流の場として発展してきました。また青年技術者顕彰者、片岡安賞論考コンクール入賞論考の掲載を行い、会員の成果を顕彰する重要なステージの役割も担っています。ただ、今年は本誌のこの先のあり方を決める重要な年と考えています。現在、会誌の改革を目指すプロジェクトチーム

が立ち上り議論を始めています。会誌の収支が非常に厳しい状況にあり、その改善を目指すことがきっかけの一つですが、本当に会員の方々のニーズに合った内容になっているのかという検証も行い、その上でこれまでの良いところをしっかりと引継ぎながら、新しい風を感じる誌面とすべく、魅力的な次代の会誌創りに向けた提言と具体的な案を立案したいと思います。今年もご支援・ご協力をお願いいたします。

事業委員会

令和になぞらえて

事業委員長
中尾勝悦

情報見学小委員会は昨年3名の入れ替りがあり、新しく高松建設／下田委員・日建設計／田村委員・鹿島建設／岡田委員と共に18名の委員で7回の委員会を開きました。毎回半数以上が参加くださっています。見学会は、6月に『追手門学院大学茨木総持寺キャンパス』を行い、10月には史料研究会と合同でイケフェス大阪『天王寺の近代遺産と下寺町の台地を歩く』に参画しました。12月にはJR西日本の第二弾講演会を開催出来ました。

本年は在阪建築15団体合同新年交礼会の当番会に始まり、1月28日には『京都スタジアム』の見学会を予定しています。また「史料研究会」と合同での阪神間の近代建築見学会も模索しています。今年は早目に見学会の候補を挙げ、例年通り3～4回は行いたいと考えています。加えてイケフェス2020への参画と講演会の開催。今年も各委員が美しく心を寄せ合い、建築文化が育まれることを望みます。

出版委員会

庚子 新たな挑戦

出版委員長
西 博康

出版委員会は、1949年から、161冊の作品を創出し、多岐にわたる分野で建築と社会をつないで参りました。昨年も、「建築の本」の著者による建築セミナーを企画し、当委員会で発刊した「建築と設備の接点トラブル予防のツボ」「図解 間取りの処方箋」の2回を実施しました。セミナーには、幅広い層の方が参加され、講演後の質問や意見交換には、皆さまでに満足を頂いたことと存じます。

出版書籍は国内はもとより、海外からも関心を集め、中国・台湾・韓国などで翻訳本が扱われております。令和2年の干支は「庚子」です。新たに陽気が動きはじめる年とも言われています。メンバー全員で新しい発想に挑戦し、セミナーや書籍出版を行います。今年も、出版委員会の書籍や建築セミナーを是非ご活用下さい。

教育委員会

継続事業の推進と、 新たな展開

教育委員長
山形政昭

本委員会は、高工生デザインコンクールを担当する「高工生教育小委員会」、建築実務講習会を担当する「講習会小委員会」、そして「史料研究会」の活動を中心に動いている。前二者は、半世紀を優に越える歴史をもつ継続事業で、担当する委員諸氏、審査及び講義に当たられる委員の皆様のご尽力を頂いている。デザインコンクールでは毎年度のタイムリーな課題への応答、そして制作条件である手書き鉛筆仕上げの見事な作品に驚されることも

多い。また、実務講習会は「すぐに役立つ建築現場技術者へのガイド」となる新鮮な内容に毎回リメイクされており好評を得ている。史料研究会では昨年度、さらに気鋭の若手委員3名が加わり「再読関西の建築」での建築発掘もワイドレンジに取り組んでいる。そして歴史的ストックをもつ本協会の特性を生かした「街あるき、建築探訪」の新企画も探っている。今年もご協力をよろしくお願い致します。

未来創生 プロジェクト

交流の輪のさらなる 拡大を目指して

未来創生プロジェクト委員長
中村文紀

未来創生プロジェクトは、建築、そして社会の「新しい地平」を探り、切り開いていく人材を育てることに資する3つの委員会からできています。建築次世代委員会は、活発な人材育成に資する活動を続けています。「学生のための現場見学会」では、近代建築の外壁を生け捕りにした高層建築事例や日本の古代建築の復元など日本建築協会のネットワークでなければ実現できない多様な建設現場を体感していただきました。若手設計者の集いU-35委員会は、昨年も対話型ワークショップtalkbaton、公開イ

ベントactionを開催し、さらに各メンバーの仕事や活動を本にまとめることにも現在取り組んでいます。2040年に焦点を当て、様々な角度から模索を続ける、U-35の兄貴分として発足した2040委員会は、昨年も様々な方面のトップランナーとの対話を重ねました。そして、今年、その内容を1冊の小冊子にまとめました。本号に同封されていますので是非ご覧ください。今年は、3委員会のシナジーを生む合同の企画なども考えていきたいと思います。活動に興味のある方は、是非ご一報を。

2019年度 建築工事实務講習会

〔この講習会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラムです。(6単位)〕

■講習会会場〈大阪府建築健保会館〉
交通：地下鉄谷町線・中央線谷町
四丁目駅 8号出口より徒歩 5分

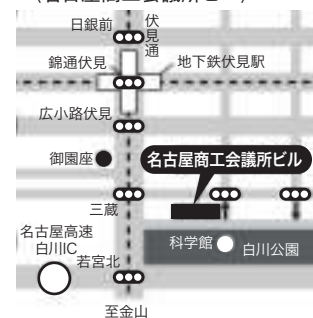


日本建築協会東海支部主催 建築工事实務講習会

〔この講習会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラムです。
(公社)愛知建築士会 (6単位)〕

■講習会会場

〈名古屋商工会議所ビル〉



日 時：2020年 1月16日(木)
9：00～17：30
会 場：大阪府建築健保会館
6Fホール
大阪市中央区泉町2-1-11
TEL：06-6942-3622
定 員：100名(先着順)
受講料：16,000円(含テキスト代 税込)
※テキスト当日配布

■申込方法

FAXまたはE-mailにて、

①催し名「実務講習会」

②受講者氏名(年齢)

③事業所名

④受講票送付先住所

⑤担当責任者

⑥E-mailアドレス

⑦電話番号

⑧受講料支払方法

(銀行振込、郵便振替、等)

⑨CPDを申請される方は、申請先の団体名と参加者IDをお知らせ下さい。

受講料は、前納制となっておりますので、併せて銀行振込、郵便振替等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講票を送付します。

なお、当会HPからもお申し込みいただけますので、<http://www.aaj.or.jp>をご覧ください。

日 時：2020年 1月22日(水)
9：30～17：00
会 場：名古屋商工会議所ビル 9階
愛知建築士会内
名古屋市中区栄2-10-19
定 員：60名(先着順)
受講料：16,000円(含テキスト代 税込)
※テキスト当日配布

■申込方法

FAXまたはE-mailにて

①講習会名

②郵便番号・住所

③受講者氏名・年齢

建築CPD単位申請希望者は氏名の下にCPD登録番号を明記

④事業所名

⑤申込担当者名

⑥電話番号・FAX番号・E-mailアドレス

⑦受講料支払方法(銀行振込等)

受講料は前払制となっていますので、併せて銀行振込等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講番号をE-mailまたはFAXで通知します。なお、日本建築協会東海支部HPから受講申込書のダウンロードができますので、<http://www.aaj-tokai.jp>をご覧ください。

■締切日 2020年 1月14日(火)

但し、定員に達し次第締め切ります。

■申込先

(一社)日本建築協会(担当 内山)
〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31 OMM7F
TEL：06-6946-6981
FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp
URL：<http://www.aaj.or.jp>

＜振込先＞

●三井住友銀行
大阪中央支店 普通 0860034
●三菱UFJ銀行
瓦町支店 普通 0210054
●りそな銀行
北浜支店 普通 0272234
●郵便振替口座 00910-9-39975
名義 シヤ)ニホンケンチュクキョウカイ
一般社団法人日本建築協会

■趣旨と内容

●本講習会は、建設業はもとより、官公庁・設計事務所・設備会社など幅広い分野の中堅以下の技術者を対象としたものです。

●現場実務の基礎である「施工計画」と「仮設見積」に重点をおき、講義します。

●都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。

■申込先

(一社)日本建築協会 東海支部
〒460-0008
名古屋市中区栄2-10-19
名古屋商工会議所ビル・9階
(愛知建築士会内)
TEL：052-201-2201
FAX：052-201-3601
E-mail：info@aaj-tokai.jp
URL：<http://www.aaj-tokai.jp>

＜振込先＞

●三菱UFJ銀行
栄町支店(普通 0167157)
シヤ)ニホンケンチュクキョウカイウカイシブ
一般社団法人日本建築協会東海支部

■趣旨と内容

●本講習会は、官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の技術者を対象としたものです。

●現場技術者の初級者を対象に、とくに取り付きにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき、講義します。

●都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。

●積算業務では具体例により、その着工準備から完成に至るまでをわかりやすく解説します。

■科目・講師

施工計画

谷本 達哉 氏

(株)浅沼組大阪本店
建築部品質管理室主任

永野 浩一 氏

(株)竹中工務店大阪本店
技術部企画管理グループ部長

施工計画は、品質を確保し、安全で能率よく経済的に本体工事を進める鍵をにぎっています。この講習会では、仮設から地下、躯体、仕上、設備にわたり、適切な施工計画の要点をわかりやすく解説します。

仮設見積

山口 紀宏 氏

(株)大林組大阪本店
建築事業部生産技術部計画第三課長

仮設工事は、非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

施工計画

日吉 智紀 氏

清水建設(株)名古屋支店
生産技術統括部生産技術グループ主査

適切な施工計画を立案できることが建築現場技術者の必須条件です。安全で、経済的な施工計画を解説します。

仮設見積

相原 仁史 氏

(株)大林組名古屋支店
建築工事業部建築生産技術第一課長

仮設工事は、一般には非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

積算業務

木原 陽 氏

(株)竹中工務店名古屋支店
見積部建築3グループ主任

見積業務のなかで基本となるのは、数量積算です。この手順・基準を基本に、より合理的で正確な積算業務を解説します。

日本建築協会中国支部主催 建築工事实務講習会

この講習会は、建築CPD情報提供
制度プログラムです。
建築関連CPD（6単位）

■講習会会場

- （広島工業大学 広島校舎）
・広電市内電車 袋町または中電前
下車
・広島バス 平和記念公園前下車



日 時 2020年 2月18日(火)
9:30~17:00
会 場 広島工業大学 広島校舎
広島市中区中島町5-7
定 員 60名
受講料 16,000円(含テキスト代 税込)
※テキストは、当日配布させていただきます。

■申込方法

FAXまたは中国支部へ直接

- ①講習会名
 - ②〒・住所
 - ③受講者氏名（フリガナ）
 - ④事業所名
 - ⑤担当責任者
 - ⑥電話番号・FAX番号
 - ⑦受講料支払方法（銀行振込等）
 - ⑧CPDを申請される方は、申請先の
団体名をお知らせ下さい。
- 受講料は前払制となっていますので、
併せて銀行振込等で納入して下さい。
受講料入金確認後、受講票をお送り
いたします。

■申込先

（一社）日本建築協会 中国支部
〒730-0805 広島市中区十日市1-1-9
（相生通り鷹匠ビル4階山陽工業株内）
TEL 082-232-6471
FAX 082-291-2233
E-mail: info@aaj-chugoku.jp
URL: http://www.aaj.or.jp

＜振込先＞

●広島銀行
本川支店（普通 3424438）
（シャ）ニホンケンチクキョウカイチュウゴクシブ
一般社団法人日本建築協会中国支部

■趣旨と内容

- 本講習会は、官公庁・設計事務所・
建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い
分野の技術者を対象としたものです。
- とくに取り付きにくい施工計画と仮
設見積、現場実務の基礎である積算業
務に重点をおき、講義します。
- 都市環境の変化に伴う法令・基準の
改正なども加え、技術の進歩に即応し
た知識の習得をはかります。
- 「積算業務」では具体例により、そ
の着工準備から完成に至るまでをわか
りやすく解説します。

施工計画

井上 昇 氏

清水建設㈱広島支店
主査

適切な施工計画を立案できることが、
建築現場技術者の必須条件です。
安全で、経済的な施工計画を解説し
ます。

仮設見積

尾野本 悟 氏

広島工業大学
教授

仮設工事費は、一般には非常に把握し
にくい面があって、つつい単位面積
当たり、あるいは請負金比率のみで
処理されがちです。
施工計画に基づいた合理的で迅速な見
積方法を解説します。

積算業務

八道 憲一 氏

鹿島建設㈱中国支店
次長

見積業務の中で基本となるのは、数量
積算です。この手順、基準を基本に、
より合理的で正確な積算業務を解説し
ます。

主催：（一社）日本建築協会京都支部
共催：（公社）日本建築家協会近畿支
部京都地域会

令和元年度 セミナー第4回 「歴史的建築物 の活用と改修ー その職能とデザ インを考えるー」

■日 時

2020年 2月28日(金)
18:30~20:30(質疑含む)



旧新風館 改修設計：R.ロジャース＋
NTTファシリティーズ 撮影：笠原一人

阪神淡路大震災後の2001年より兵
庫県から始まったヘリテージマネ
ジャーの養成は、本年度で全国47都道
府県中、43に及び講座修了生4500人
に達する勢いです。笠原先生は京都
工芸繊維大学に新設展開されている
「建築都市保存再生学コース」におい
て、研究・人材育成および今後の普
及等に携わられています。欧州にお
ける歴史的建造物の修復・活用に関
わる職能の実態や諸問題等を中心に、
日本の今後の展開を視野に入れたお
話等をさせていただければと思います。
(文責 日本建築協会 京都支部長
長瀬 博一)

■概要

近年、歴史的建築物の「活用」や
「改修」、「リノベーション」など呼
ばれる事例が各地で増加している。
文化財保護法も「保存」から「活用」
に向けて大きく改正され2019年に施
行した。しかし解体される歴史的建
築物も数多く、フェイクのデザイン
によって歴史を「捏造」したものも
少なくない。「改修」もオリジナルの
歴史的価値を損ねたものが散見され

る。加えて、歴史的な価値を守るた
めの制度や人材、職能、教育の環境
も十分ではない。ヘリテージマネ
ジャー制度が普及し、全国規模の人
材育成ができつつあるが課題もある。
歴史的建築物の活用や改修において、
何が必要とされているのか。職能の
問題とデザインの問題から考えてみ
たい。

■講師プロフィール

笠原一人 氏 京都工芸繊維大学助
教、住宅遺産トラスト関西理事、
DOCOMOMO Japan理事。
1970年神戸生まれ。1998年京都工芸
繊維大学大学院博士課程修了。2010
ー11年オランダ・デルフト工科大学
客員研究員。専攻は近代建築史、建
築保存再生論。共編著に『建築と都
市の保存再生デザイン』（鹿島出版
会）、『建築家 浦辺鎮太郎の仕事』（学
芸出版社）ほか。共著に『関西のモ
ダニズム建築』（淡交社）、『村野藤吾
の住宅デザイン』（国書刊行会）、『村
野藤吾の建築』（青幻舎）ほか。

- 定 員 30名(先着順)
- 講 師 笠原一人 京都工芸繊維
大学助教
- 参 加 費 会員1,000円（主催、共
催者共）、一般1,500円、
学生500円
- 会 場 京都建設会館別館4階会
議室（京都市中京区押小路通柳馬場東入橋町641）
- 最 寄 駅 駅より徒歩7分、地下鉄
烏丸線「烏丸御池」駅よ
り徒歩10分
- 申込方法 ①講演会名「2/28セミ
ナー」②氏名③勤務先
または学校名④当日連
絡先⑤E-mailアドレスま
たはFAX番号⑥会員・
一般・学生の別⑦CPD
申請される方はID番号

上記項目を明記しFAXまたはメールで
下記へお申し込みください。※受付後
連絡のため、FAX又はMailを必ずご記
入ください。

■申 込 先

（一社）日本建築協会京都支部事務局
FAX 075-255-6077/E-mail: kyokai-
kyotoshibu@kyoto-kenchikushikai.jp

京都スタジアム (仮称) 見学会

この催しは建築CPD情報提供制度
認定プログラム申請予定です。
建築関連CPD 2単位

日 時

2020年 1 月28日 (火)

14:00~16:30

受付13:30~

【コンセプト】

本スタジアムは、最高の観戦環境の創出、周辺環境への影響の最少化、ライフサイクルコスト低減を実現する「みんなの笑顔がきらめくコンパクトスタジアム」をコンセプトに計画された。敷地形状に整合させ四隅を大きく切り取った八角形のスタンド形状によって、効率的に観客席数を確保するコンパクトなスタジアムとしている。全ての観客席を覆う屋根は、スタンド先端からさらに2m突き出すことで雨天時でも快適な観戦環境とし、高さを抑えた屋根の多面体の構成や台形のシルエットは、亀岡盆地の山並み風景との調和を図っている。

【BIM実践について】

本プロジェクトでは設計から現場での内装プレゼンテーションに至るまで、一貫したBIM設計手法を導入している。計画当初から意匠設計者はBIMでの設計に取り組み、そのモデルをもとに構造設計者が構造フレームを設計し、計算結果から生成されたモデルを重ね合わせて統合モデルを構築してい

る。また、クラウド上でモデルの共有を図ることで、チームや外部協力者との瞬時の情報共有を可能とした。さらに、初期モデルを用いて、様々な環境シミュレーションにも取り組んでおり、現地ではその一端をご紹介したい。

【プロジェクト概要】

名 称	京都スタジアム (仮称) / ネーミングライツ「サンガ スタジアム by Kyocera」
設計監理	株式会社 東畑建築事務所 (構造VE設計: 株式会社 竹中工務店)
施 工	竹中・公成・長村特定建 設工事共同企業体
主 用 途	球技場 (サッカー/ラグ ビー/アメリカンフット ボール) 約21,500人収容
敷地面積	33,140.81㎡
建築面積	16,153.56㎡
延べ面積	35,601.30㎡
構 造	鉄筋コンクリート造/鉄骨造
階 数	地上4階
竣工予定	2019年12月

講 師	株式会社東畑建築事務所 第4設計室室長上羽一輝氏
所 在 地	京都府亀岡市追分町地内
最 寄 駅	JR亀岡駅 徒歩約5分
集 合	現地(詳細は参加証に記載)
定 員	50名(先着順)
参 加 費	会員1,000円、一般1,500円、 学生500円

申込方法	①催し名 ②氏名(フリガナ) ③会員・一般・学生の別 ④職場名または学校名 ⑤郵便番号・住所 ⑥当日連絡先電話番号 ⑦CPD申請される方は申請 先の団体名とID番号
------	---

上記を明記しホームページもしくは
FAXかE-mailにて申込先まで
申 込 先 (一社)日本建築協会
TEL: 06-6946-6981/
FAX: 06-6946-6984
E-mail: jigyoka@aaaj.or.jp
(担当: 内山)



2040委員会【2040 FUTURE VIEW vol.1】 発刊のお知らせ 2020年1月号に同封



このたび、未来創生プロジェクトに属する「2040委員会」のこれまで約2年間の活動を記録した、初の小冊子、【2040 FUTURE VIEW vol.1】が完成しました。

『建築と社会』1月号に同封して、会員のみならずの元にお送りいたします。

「2040委員会」では、現在40歳前後のメンバーが、時代が大きな変革を迎える2040年のあるべき姿を思考(志向、試行)する活動を行っています。

その時代を担うプレイヤーとして、迎える時代に向き合うであろう問題点を予測し、その問題点に取り組むための準備として、メンバー全員でのブレインストーミングおよび、建築にとどまらない様々な分野から、9名の方々に未来に向けた社会との関わり・視点を伺った、その記録が中心の冊子となっております。

ぜひご覧ください。

お問い合わせは下記まで

「2040委員会」事務局: hensyu@aaaj.or.jp

(一社)日本建築協会京都支部・
(公社)日本建築家協会近畿支
部京都地域会 共催

黄檗宗大本山萬福寺修理現場見 学研修会

(重要文化財萬福寺法
堂ほか4棟保存修理工
事現場)

昨年度に続き伝統的な日本の建築に関
する研修、また文化財の修理活用設計
技術者を育成する為の研修として、萬
福寺の修理現場見学並びに座学研修会
を開催します。萬福寺は京都府宇治市
黄檗に在る三禅宗の一つ、黄檗宗の大
本山です。現在、京都府文化財保護課
により4棟を保存修理工事中ですが、
御理解をいただき見学会開催の運びと
なりました。皆様の御参加をお待ちし
ております。(文責 日本建築協会京
都支部長 長瀬 博一)

■講師プロフィール

田中 智誠 氏

1949年生まれ。滋賀正瑞寺住職。黄檗
山萬福寺文華殿(宝物殿)主管。京都
府文化財建造物修理専門委員。『黄檗
文華』編集出版。文華殿春・秋特別展
の企画開催。資料閲覧者への対応、文
化施設への出陳依頼への対応。

齋藤 忠一 氏

1939年生まれ。福島県出身。京都林泉
協会副会長。東京藝術大学卒。重森
三玲に師事。『日本庭園史大系』全36
巻(社会思想社刊)刊行に参画。全国
庭園の実測調査を担当し桂離宮庭園、
修学院離宮庭園等、100余庭を実測。
1977年齋藤庭園を開業。主として、社
寺庭園を専門として作庭を続ける。

■日 時 2020年1月17日(金)
10:30~17:30
(昼食休憩含む)

■定 員 30名(先着順)

■参 加 費 4,000円(午前・午後のみ
の参加も可。午前1,000
円、午後3,000円。共催
の会員以外は+500円)
※萬福寺の境内拝観料
(500円)別途必要

■会 場 萬福寺(京都府宇治市五
ヶ庄三番割34)

■最 寄 駅 JR「黄檗駅」もしくは京
阪「黄檗駅」より徒歩約
5分 無料駐車場が有る
ので車での来場も可能

■スケジュール

10:15-10:30	現地集合・受付(山門前)	
10:30-11:30頃	重要文化財萬福寺法堂ほか4棟の 保存修理工事現場の見学・解説	竹下 弘展 氏 (京都府文化財保護課)
12:00-13:00	昼食休憩(黄龍閣別館2階を食事 場所として使用可能)	
13:00-15:10	座学①「黄檗山萬福寺 境内配置 と建築」	田中 智誠 氏
15:20-17:30	座学②「萬福寺東方丈庭園-隠元 禅師が富士山を主題として 作庭」	齋藤 忠一 氏

■申込方法 ①研修会名「1/17 黄檗宗
大本山萬福寺修理現場
見学研修会」 ②氏名
③勤務先または学校名
④当日連絡先 ⑤E-mail
アドレスまたはFAX番号
⑥会員・一般の別 ⑦参
加内容(全参加・午前
のみ・午後のみ)
上記項目を明記しFAXで
下記へお申し込みください。

※受付後連絡のため、FAX又はMailを
必ずご記入ください。

■申 込 先 (一社)日本建築協会
京都支部事務局
FAX 075-255-6077

「建築と社会」 表紙写真募集 入選発表

テーマ：
「社会とつながる建築」

日本建築協会編集委員会主催による
表紙写真コンクールの入選者が、下
記のとおり決定いたしましたので発
表します。

なお、入選作品は2020年1月号より
順次表紙に掲載いたします。

●応募作品数/31点

入選者

栗原 正隆(大阪府大阪市)	「京阪電気鉄道宇治駅」 「南海電気鉄道旧浜寺公園駅舎」 「JR京都駅」 「南海ビルディング」
佐藤 稜(兵庫県西宮市)	「うめきた広場」 「大阪梅田ツインタワーズ・サウス」 「兵庫県立美術館」 「大阪府立中之島図書館」
福西 博(兵庫県西宮市)	「築港赤レンガ倉庫」 「日鐵御堂筋ビル」
梶井 貴廣(大阪府大阪市)	「京都府舞鶴市 外灯」
山田 宏作(鹿児島県霧島市)	「牛根大橋」

(50音順 敬称略)

建築と社会

Architecture and Society

Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2020 01

Vol.101 No.1174

■特集予告

●2月号／第26回私の空間作法

●3月号／東海支部特集

特集 大阪ベイエリアの再生

■座談会・総論にかえて

大阪ベイエリアの再生を語る●田中直人・飯田 匡・鈴木克彦・守井 辰 — 14

■寄稿

【経済・産業】大阪ベイエリアの経営課題●加藤恵正 ————— 18

【神戸市】神戸港ウォーターフロントの再開発

～現況と今後の展望～●風嵐陽太 ————— 20

【ユニバーサルデザイン】水辺のユニバーサルデザイン

～須磨から舞子のCCZエリアをみて～●田中直人 ————— 22

【淡路島】土取り跡地の自然回復を果たした公園事業

～国営明石海峡公園淡路地区の成り立ちと今後の展望について～

●藤井厚企 ————— 24

【泉佐野市】りんくうタウンの現状と課題・展望●中平良太・日垣 淳 — 26

【岸和田市】岸和田ウォーターフロント「再生」●高田 昇 ————— 28

【居住】居住の側面からみたベイエリア

～大阪市・南港ポートタウンの取り組みから～●絹原一寛 ————— 29

【交通】モビリティの再生～LRTという可能性～●宇都宮浄人 ————— 31

【環境】大阪ベイエリアの現状・課題と展望

～豊かで安心な海を～●重松孝昌 ————— 32

【防災】防災研究とフューチャー・デザイン●倉敷哲生 ————— 34

【海辺に暮らして思うこと】

ニュータウンの開発に欠かせないもの●孝岡知子 ————— 36

大阪最南端のまち岬町●まちづくりエディター ————— 36

年頭の言葉	2020年を迎えて●設楽貞樹	1
本年の抱負	常設委員会●勝山太郎・中尾勝悦・西 博康・山形政昭・中村文紀	2
会告	若き創造者たちへ「第67回青年技術者顕彰」のご案内 2019年度建築工事実務講習会（本部、東海支部） 2019年度建築工事実務講習会（中国支部）、京都支部主催 令和元年度セミナー第4回「歴史的建築物の活用と改修 —その職能とデザインを考える—」 京都スタジアム（仮称）見学会、2040委員会【2040 FUTURE VIEW vol.1】 発刊のお知らせ 京都支部共催 黄檗宗大本山萬福寺修理現場見学研修会、 「建築と社会」表紙写真募集 入選発表	3 4 5 6
作品作風	医療法人 林病院 六甲バター神戸工場	8 10
gallery	光と素材●駒井陽次	12
法令コーナー	魅力ある観光まちづくり 奈良市歴史的建築物の 建築基準法適用除外に関する条例●徳岡健治	38
再読 関西の建築	建築文化の継承—関西の保存再生の事例— ●石田潤一郎	39
構造の頁	企業理念を未来へ伝えるキューブユニット 久光製薬ミュージアム●正野和司	41
建築と社会を 考える	地域の記憶の収集と活用 ～宗像市「CoCokaraひのさと」の取り組み～●小池高史	42
入賞発表	第65回工高生デザインコンクール 設計課題／「2025年のお祭り広場」	46
information	ゴッホ展／大正・昭和 神戸まぼろしの公会堂 コンペ 再現！／—「鉅鹿」発見100年—磁州窯と宋のやきもの ／日本書紀成立1300年 特別展 出雲と大和	53
月間の動き	2019年11月	60

今月の表紙

撮 影 者：福西 博（ふくにし ひろし）

撮影場所：大阪市港区「築港赤レンガ倉庫」

撮影時期：2016年1月

写真について

1920年代に造られた大阪市港区の「築港赤レンガ倉庫」、倉庫としての役割を終え、耐震補強をした上で、クラシックカーのミュージアムとして活用されています。歴史のある建物と年代物の車が織りなす雰囲気は独特です。

所在地 福井県越前市府中1丁目3番5号
敷地面積 3,631.79㎡
建築面積 1,421.31㎡
延床面積 11,792.96㎡
構造規模 RC造 地上10階・塔屋1階
工期 2017年10月～2019年4月
最寄駅 JR北陸本線 武生駅
撮影 藪内正直／仲和



北東面外観：プロポーションを揃えることでバランスをよくした高層棟と低層棟



耐震壁：温度補正をおこないながら、丁寧に管理された現場打ちコンクリート



東側外観：構造と融合する厚重感のあるファサード

医療法人 林病院

建 築 主 医療法人 林病院
 設計・監理 大林組大阪本店一級建築士事務所
 施 工 大林組大阪本店

計画地は越前市の中心であるJR武生駅前に位置する。用途地域は商業地域に区分され、容積率500%のポテンシャルの高い土地である。そこで、今後の増築や同一敷地内での建替えを見越し、建物を北側へできるだけ寄せ、南側に駐車場として将来の増築用地を確保した配置計画とした。また、ワンフロアあたりの床面積をコンパクトに纏め高さ方向に積層させることで、JR武生駅前のランドマークとしての存在感を強調した。

武生には越前市役所や武生公会堂など、重厚かつ時間と共に深みが増す建物が多く見られる。このような武生の建築物の歴史性を新病院に取り入れたいと考え、東西面の妻壁はRC化粧打放しの「連続耐震壁」をバランス良く配置し、重厚感と上昇感を表現した。南北面は病院の清潔さを表現すべくコントラストを弱めた白色で構成し、居室に必要な窓を秩序立てて配置。重厚さと清潔感のバランスを取った外装計画としている。

外来待合やリハビリ室、デイルーム等の人々が多く集まる場所に自然光をふんだんに取り入れ、不安な気持ちで来館される患者様や見舞客の気持ちが少しでも安らぐように配慮した。またインテリアでは、1階南側エントランスの入口に越前箆箆職人が製作した桐材の飾り壁、総合カウンターには浮造りのコンクリート打放し腰壁と天然木の天板を組み合わせ、背面に越前和紙を使った照明を設けるなど、地元の伝統工芸をふんだんに用いている。このようにインテリア計画でも武生の歴史性を取り入れることで、地元住民が建築に愛着を持つことを狙った。

(伊達翔／大林組)



スタッフステーション：患者を看守りやすいオープンカウンター



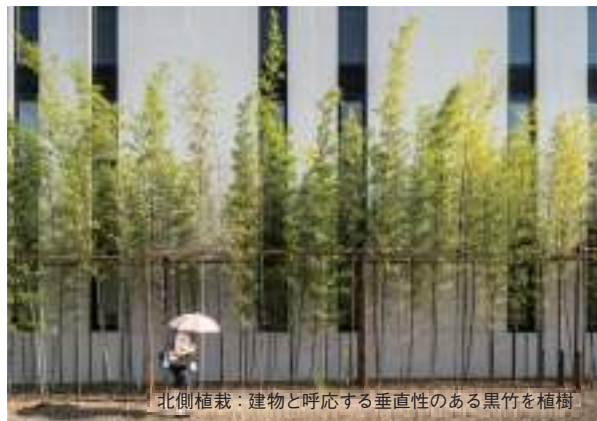
外来待合：ホスピタルループによる終点のない動線



南側エントランス：桐材の飾り壁で来館者を出迎える



総合受付：カウンター背面は越前和紙を使った内照式照明



北側植栽：建物と呼応する垂直性のある黒竹を植樹



越前市役所と西側外観：武生の既存建築物との調和を図ったRC化粧打放し



建物外観



建物全景

六甲バター神戸工場

建築主 六甲バター株式会社
設計・監理 清水建設関西支店一級建築士事務所
施工 清水建設神戸支店

六甲バターは、『Q・B・Bブランド』を掲げ、プロセスチーズを中心に事業を展開し、チーズ専門ブランドとして国内トップシェアを誇る食品製造・販売会社である。創業70周年の節目を迎え、さらなる生産量の拡大を目指し、老朽化した既存工場の再構築とともに神戸・六甲山麓の工業団地に新工場を建設、移転整備を行うプロジェクトとしてスタートした。

「世界一のプロセスチーズをつくる工場を創りたい」という六甲バターの想いを受けて、建設・エンジニアリング事業一体となるフルターンキーでの受注メリットを最大限に発揮できるプロジェクトチームを立ち上げ、生産効率を向上する製造ラインとプランニングの最適化を徹底し、原料搬入から製造・出荷までの受発注システムをIoTで繋ぐ最新の生産物流設備を導入。工場内の自動化・省人化を推進しながら、多彩な品種がタイムリーに製造できるよう計画した。また食品の安全・安心を確保するため、FSSC22000の取得を目指したフードディフェンスを構築。防虫・防鼠をはじめ異物混入防止対策を随所に取り込み、製造工程に関わる衛生区分に応じた室圧管理を可能とする省エネルギーにも配慮した空調システムとともに最新鋭の食品工場を実現した。

より企業理念やチーズの文化・商品を広く知ってもらう仕掛けとして、2階から工場内の各製造の様子を見渡すことのできる回廊や展示コーナーを備えた見学施設も併設。小学生の社会科見学などにも対応でき、学びながら楽しい食文化を伝える地域に根差した魅力ある工場である。

(芦田裕二・佐伯先史／清水建設)

所在地 兵庫県神戸市北区見津が丘6-7-3
敷地面積 51,540㎡
建築面積 20,953㎡
延床面積 47,405㎡
構造規模 S造 地上3階
工期 2017年11月～2019年3月
最寄駅 神戸電鉄粟生線 木津駅
撮影 酒井文明／SS大阪



お客様をお迎えするメインエントランス



従業員憩いの場となる食堂



学べる展示コーナーを備えた見学施設



自動物流システムを導入した製造室



見学通路から見渡せる製造室

光と素材

設計

駒井 陽次

昼の表情と夜の表情。

太陽が沈むと建築の表情は大きく変わる。内部空間も同じ。
それは、太陽や照明の光が、空間を切りとるかのような影を創り出したり、素材の表情を浮かび上がらせるからだと思う。

その場所で過ごす時はもちろんのこと、通り過ぎるだけでも、その瞬間がより豊かで魅力的なものとなればと思っている。そのために、光や素材を考え、慎重に選定している。が、難しい。

A：やわらかな光があふれ 大きな庇で来訪者を迎え入れるアプローチ
[南芦屋の家]

B：スリットからの自然光が入り ライン照明で演出されたエントランス
[六甲道の集合住宅]

C：コンクリートで創り出し 鋭く太陽光が差し込むボイド
[六甲道の集合住宅]

D：陰影により大きく切り取られ 表情が変わるコンクリートボリューム
[南芦屋の家]

E：ボリュームを2つに切り分け 夕景を演出するガラスファサード
[六甲道の集合住宅]

駒井 陽次（こまい ようじ）

1976年 奈良県五條市 生まれ
2000年 神戸大学工学部建設学科 卒業
2002年 神戸大学大学院建設学専攻 博士課程前期課程 修了
2002年 株式会社昭和設計 入社
2011年 第58回青年技術者 受賞
2014年 Style Agency 設立
PARK Lab. 共同設立
2019年 株式会社Style-A 設立

企画編集：池上 明（作品作風小委員会）



A



B



C



D



E

大阪ベイエリアの再生

2020年、東京ではオリンピック・パラリンピックが開催され、健康スポーツのあり方について関心が高まっています。一方、近年の異常気象による地球規模の環境問題や自然災害の多発による防災問題のみならず、本格的な超高齢化の進行に伴う福祉や健康・医療などに関する社会環境整備の方向が問われています。

視座を全国から関西地域に移してみた場合においても様々な課題が浮き彫りにされてきます。関西地域を形成する主たるエリアは他にもあり広大ですが、本号では大阪ベイエリアの再生に焦点を当てることにしました。もともと関西地域は、歴史的には大阪湾を中心とするベイエリアの、各地域でのこれまでのいろいろな取り組みが地域の特色をかたちづくり、発展してきました。しかしながら東京一極化の進行する中で関西地域の経済的な地盤沈下に対する打開策などが求められる状況になりました。

『建築と社会』においてもこれまで1985年1月号にて「大阪湾物語」として大阪ベイエリアの現状を特集した経緯があり、約35年を経過して、ベイエリアはどのように移り変わり、今後どうあるべきかを本特集で展望したいと思います。多様な方々からご寄稿をいただくことで、大阪湾岸の各地でのベイエリアの現状に加え、2025年の大阪万博やIRに限らずさまざまな観点を含み、今後のベイエリアの姿を考察したいと考えています。加えて、これまで計画の企画編集を担当してきた委員から座談会の形で意見や提案を添えたいと思います。

本特集が、関西地域に限らず、豊かな自然環境に包まれた美しい島国日本としての各地の国土計画や都市計画、地域のまちづくりのデザインを想起にする際に、ベイエリアの姿をとおして、後世へ何を残すのか。豊かで持続可能な都市や社会の未来を思い描く一助となれば幸いです。

計画系編集幹事 田中直人

■座談会・総論にかえて

大阪ベイエリアの再生を語る ● 田中直人・飯田 匡・鈴木克彦・守井 辰

■寄稿

【経済・産業】 大阪ベイエリアの経営課題 ● 加藤恵正

【神戸市】 神戸港ウォーターフロントの再開発～現況と今後の展望～ ● 風嵐陽太

【ユニバーサルデザイン】 水辺のユニバーサルデザイン～須磨から舞子のCCZエリアをみて～ ● 田中直人

【淡路島】 土取り跡地の自然回復を果たした公園事業

～国営明石海峡公園淡路地区の成り立ちと今後の展望について～ ● 藤井厚企

【泉佐野市】 りんくうタウンの現状と課題・展望 ● 中平良太・日垣 淳

【岸和田市】 岸和田ウォーターフロント「再生」 ● 高田 昇

【居住】 居住の側面からみたベイエリア～大阪市・南港ポートタウンの取り組みから～ ● 絹原一寛

【交通】 モビリティの再生～LRTという可能性～ ● 宇都宮浄人

【環境】 大阪ベイエリアの現状・課題と展望～豊かで安心な海を～ ● 重松孝昌

【防災】 防災研究とフューチャー・デザイン ● 倉敷哲生

【海辺に暮らして思うこと】

ニュータウンの開発に欠かせないもの ● 孝岡知子

大阪最南端のまち岬町 ● まちづくりエディター



企画：計画系分科会

飯田 匡／鈴木克彦／田中直人／松田奈緒子／守井 辰／吉村英祐

大阪ベイエリアの 再生を語る

司会 田中直人
(島根大学客員教授)

飯田 匡
(大阪大学大学院工学研究科講師)

鈴木克彦
(京都工芸繊維大学名誉教授)

守井 辰
(㈱日建設計都市部門都市開発グループ
アソシエイト)

開催日：令和元年10月28日(月)
場 所：日本建築協会会議室

■私が見た大阪ベイエリアと課題

田中：まず、ご自身が大阪ベイエリアと関わる思い出とか、自分の経験とか、「大阪ベイエリアと私」みたいな感じから始めましょうか。

飯田：学生の頃は、天保山によく遊びに行きました。当時からみるとライカ本社ビルはないし天保山ミュージアムは名前が変わり、今はすっかり元気がないという感じで、最近あまり行く機会もないです。

田中：ベイエリアの新しい土地というのは、バブルの象徴的な環境、エリアかもしれません。巨大なものが実験的にいろんな新しい建築のモデルをつくる受け皿になっていたと言えます。

鈴木：防災都市計画を研究した時に、ベイエリアを安全な避難場所としてどうなのか検討しました。その後、ベイエリアと都心部を含め循環型都市として、どう再生していくかということを研究したことがあります。

守井：以前に大阪の都市再生を仲間と議論していたときに、ベイエリアの土地利用が重要だという仮説を立てたことがあります。大阪

と東京の経済格差は床需要に現れています。大阪の床需要が東京と比べて勢いを欠くのは、かつては臨海部の工場と都心部のオフィスが一体となって経済活動を営んでいたが、主要工場の国内外移転とそれに伴うオフィスワーカーの移動によって都市部の空間需要が縮小していったからではないか、と考えたのです。工場や人の移転に伴い、大阪・関西の経済活動が勢いを失うことになったという認識が正しければ、ベイエリアに新しい土地利用が生まれ、定着することが大阪・関西の経済活動にとって重要なのではないかと。人口減少が進む社会トレンドの下では、都市内の空間需要も縮小傾向に進むのですが、そのような中でどういう形でベイエリアを再デザインしていくのか、というのが現在突き付けられている課題ではないかと思っています。

田中：都市計画として全体を継続的に見たものが、実際はあんまりやられていなくて、その時だけの話で終わってしまって、社会情勢の変化もありますが、あとで困ったねという話が出ているという感じがしますね。

守井：咲洲やりんくうタウンはバブル崩壊前に大型の需要を見込んで開発計画を立案し、事業着手した訳ですが、バブルが弾けて当初の計画はうまく行かなくなりました。経済情勢が動いていく中で見直しの判断をするのはなかなか難しいことだと思います。時代の動きをみながら、どう見直していくのかを考えるのが課題なのではないでしょうか。

田中：プロジェクトとしては産業系だけでなく住宅系についても課題がありますね。こんな埋立地であんな高層住宅を建てないといけないのですかと。人が生活する環境って一体何だろうと。ベイエリアにおいて開発された住宅では、どのような状況になっているのか。ベイエリアでは大きなUSJとかカジノを誘致して再生しようとしています。私も神戸のポートピアの博覧会計画を担当し、その跡地のポートアイランドや六甲アイランドの計画に携わり、その後神戸ではこれからの時代を考慮し、空港も整備されました。一方で、その大阪ベイエリアに関しては「なぎさ海道」というプロジェクトが展開されましたが、多くの現実の課題があるようです。

鈴木：経済効果だけ語っても無意味でしょう。社会効果はどうか、環境保全面はどうか

のか、多面的な側面から考えて、どういう開発効果があるのか語るのはいいいが、やたら経済効果のみを喧伝する、そういう世の中って開発時代の失敗を反省してないですね。

守井：例えば一般市民が利用しない工場等の施設の開発計画でも、開発公園や緑地の整備をうまく誘導することができれば、水辺につながる市民開放ゾーンが整備できるかも知れません。水辺と暮らしと産業が融合するような空間を増やしていくことで、ベイエリアならではのストックが生まれてくるかもしれないですね。

田中：まちづくりの中にももとの水辺とかの自然環境との縁が少なくなってきたっていうのは事実ですね。

鈴木：最近、外国人が大阪をどう見てるんだろうとYouTubeを見ましたが、ベイエリアは出てこないです。せいぜい、USJ、海遊館の建物だけチラッと写すぐらいで、海の風景を写すわけではない。やはり道頓堀であり新世界なんですよ。そこに大阪の魅力を外国人は感じているんです。新世界は、かつては大阪の恥部みたいな印象があって、普通の人だったら気軽に行けない街だったんですが、今や大阪のシンボルとなっています。

飯田：単体ではそれなりに集客できていると思うんですよね。天保山、USJはもちろんですね、あるいは、ちょっと違うかもしれないけれども、海辺の線を考えた時に、兵庫だと県立美術館とかがあったり、あるいは大阪の方だと北加賀谷の、名村造船所の跡地で民間企業が入って盛り上げていっているようなところがある。単体で面白そうなものがあるけれども、どれも行って帰ってくるしかない。海沿いのネットワークを整えて周遊できるよ



うになると人が回って行けると思います。

鈴木：要するに、水上交通を再評価して、そのルートで大阪を見直したら、全く違う都市構造になるような気がしますね。

■水辺再生の水上交通

田中：そうですね。施設をつくることばかりでなく、もっと人間中心に考えたらむしろ何もない方がいいみたいな、原点に立ち返って考えることも必要ですね。その救いの場が、一つは水辺だと思っているんですよ。もともと人間は、水とか緑とか自然で癒やされることが多いわけで、建築をつくってわざわざ緑を入れてみたり、水を引っ張り込んだりする建築がいっぱいありますね。だから、みんな自然への憧れがあるし、原点回帰の欲求が絶対あると思うので、もう少し大阪が持つ水環境の資源ストックをもう一回、利活用する時代が来てるんじゃないかなと思いますね。

鈴木：そういう意味で、水辺を活用しているタイなんかは非常に参考になりますね。タイっていう国は、かつては水上交通が盛んだったところで、それを基盤として都市が形成されてきたんですが、モータリゼーションが進んだ結果、自動車交通中心の都市構造に変わってしまった。その結果、さまざまな都市問題を起しているわけですけど、今またタイでは水上交通を見直し、観光を中心とした都市再生の手段とした結果、チャオプラヤー川沿いのエリアが開発ラッシュなんですよ。次から次、マンションや商業施設なんかができているんです。水上交通を見直すということは、モータリゼーションがあまりにも進んでしまった都市の再生に非常に意味がある。

田中：水上交通にかかわる交通モードが多種

多様にあると思うんですよ。だから、速度とか量とか、目的に応じてうまくミックスしていかないとだめで、タイの場合は観光的な面が大きいと思うんですよ。松江の堀川巡り。あのスピードである環境でやるから非常に楽しいんですよ。だから、その都市の環境にあった水辺交通、もう一度開発する、整備することも大事な。ところがそういう思いで計画しても、なかなか上手くいかなかった例も多いですね。例えば、神戸港の中突堤アメニティターミナル計画でそこからいろいろ、人工島につなごうという話があったんですけど、ほとんど新交通利用。速度とか量など、波長が違うんですよ。昔の渡しじゃないですけど、川べりを渡す、ああいう、生活に密着したパターンと、そうでないパターンといろんなものがあるので、それこそ交通整理した方がいいと思います。

飯田：京阪が枚方まで淀川を上がっていくような船を出して、いずれは京都までつなげたいとか、それはどちらかというと観光のためのゆったりコースだと思うんですけど。整備コストは相当安く済むでしょうね。

田中：あらためて、今あまりにも、自動車交通に頼りすぎていますね。自動運転でやるから安全だと、そんなレベルじゃなくて、もっともっと考えないといけないかなと思いますね。結構、新交通とかモノレールとか新しいものもいっぱい出てきているんですけど、どうでしょう。やっぱり新しい交通は新しい土地になじみやすいんですかね。内陸の再生としての交通っていうのはなかなか、地下鉄とかいろいろありますけど難しい問題がありますね。共通して、コストかかりすぎるとか。

■水辺の防災と安全

田中：阪神間では六甲山系からの川べりに遊歩道をつくるなど、市民のくつろげるウォーターフロントとして、整備していますね。ところが鉄砲水で流されるという災害がありました。そこに行けるようにバリアフリーにする方がいいのか、水へのバリアを作って逃げる方がいいのか。ましてや、大きな地震とか津波、高潮が来たらどうなるのでしょうか。高知や和歌山などでは、避難ビルやタワーの整備を進めていますが大阪ベイエリアではどうでしょうか。ことが起こってから騒ぐ前に早

急に災害弱者と言われる人たちのことを含め、基本的な安全を確保できる防災のまちづくりを進めるべきと思います。

守井：大阪市内の約7割が海拔3m以下といわれています。防波堤等で防御できなければ、津波や高潮等によって広い範囲の市街地が水に浸かる可能性があります。水辺空間とのつながりを守りながらどうやって浸水被害を防いでいくのか、ということが問われます。

田中：その辺りの構築物のデザインとか計画が、東北の被災地を見てもわかるとおり、巨大なものを作って、防災的にはいいのかもしれないけど、日常の景観や生活が海と全然つながっていないし、利便性の課題が指摘されています。

鈴木：台風の水害でも、川の堤防を強化しようって、またコンクリートの堤防が復活する恐れがありますよね。コンクリートの堤防を反省して、ピオトープに配慮した堤防づくりが進められてきたわけですけど、また逆戻りする可能性がある。だから、どちらを取るかっていう議論じゃなくて、両方のバランスを考えてベストな方法を考える。そういうことを考えないといけない時代だと思います。

田中：そういう時に、建築としてできることってどこまであります？

鈴木：もちろんいろんな可能性があるけど、それは建築だけで解決しようと考えてはいけないと思います。やはりコミュニティーの力とかいろんなことをふまえて、一番安全な方法や手段を考えるべきです。

守井：建築としてできることは、逃げる場所をつくることはあると思いますが、守る役割は難しい。守りを重視すると要塞になってしまいがちでそれでいいかという議論がありますよね。バリアをつくるようなことから。

■大阪ベイエリアをつなぐインフラ

田中：大阪ベイエリアは、沿岸部からどんどん埋めていくのではなくて、真ん中に島をつくってそこから海底トンネルや連絡橋でつないでいくことも考えられますが。

鈴木：技術的には可能で、香港とマカオは世界最長の橋でつながってますよね。

田中：自然がすごいといっても、人工構築物で実現していることがいっぱいあるんですね。しかし、大災害や事故で万が一、使えなく



なった場合、どうするかということにもっと備えるべきですね。シングル対応じゃなくて、バックアップとして複数で対応することも考慮したいですね。

鈴木：そういう意味では水上交通は、コスト的にも、災害のリスクを考えても、メリットが大きいですね。去年、関空が水に浸かった時も、水上交通がもう少し整備されてれば、あんなパニックは起こらなかったでしょう。

■これからのプロジェクトに向けて

田中：現在計画されているピックプロジェクトに対してはどう臨んだらいいですか。

鈴木：一番はIRの話だと思うんですけど、IRの効果っていうのは確かにありますね。例えば、世界最大のカジノ都市マカオでは税収の6割がカジノ収入、その収入はどういう形で反映されているかといったら、国民の教育費や医療費の無料化、古い市街地の整備、その投資効果として、歴史市街地としてユネスコの世界遺産に認定されている。そういうことで、結果として観光都市として発展している。いろんな経済効果を含めて、はたして、大阪でカジノをやった時にどういう効果が期待されるか、経済効果だけでなく、社会生活への効果も同レベルで考えないといけない。一方で影の部分では、カジノの周辺には、質屋が乱立してるわけです。日本だったらサラ金だろうって想定されます。あとは、風俗のことが必ず問題になります。

飯田：理念としては統合型リゾートということで、マイナスの面も多いかもしれないですけどプラスにきく面もできると、単に観光客向け、もしくは、遊ぶだけっていうのではないような街がその周辺にできてる可能性もあるかなと。

田中：可能性があるというより、そういうのにしないとだめですね。して欲しいですよ。大阪ベイエリアでそれだけの欲求を満たす場所で特定の人だけが喜んでるのは、マイナスですね。健康的で夢のあるプロジェクトを期待したいですね。

飯田：それが伸びて行って、少しでも内陸側の今切れているところに対して、繋がっていくようなものになるといいのかなと思います。

田中：加えて、万国博覧会がありますよね。私もポートピアという地方博ですけど、経験か

ら言うと、インフラとして都市の基盤整備をやりながら仮設とうまくジョイントして、道路も作っておいて、新交通システムなどを入れておいて、いろんなパビリオンをはめ込む。仮設物を入れる、ということは、本設と仮設とでうまくハイブリットの街づくりを進めるとよいと思います。埋め立て地の出島構造の課題を救済するために、知名度を上げ、注目性を上げるために、実験都市的なことをやるチャンスですね。その昔、最初にラスベガスを訪れた際、カジノだけでなく、結構楽しむところがあって新鮮でした。いろんなパフォーマンスがあって。パブリックゾーンにしかけのデザインがあって。まち全体がエンターテインメントでやっている、そのつくり方も面白いなと思いました。

鈴木：それは、マカオもまさしくそうですよ。はっきり言って、大阪がマカオに勝てるだろうかっていう話なんですけど。

守井：ラスベガスはカジノ以外の部分に力を入れており、収益の中でカジノの占める割合は半分くらいといわれています。一方、マカオやシンガポールのIRは、カジノ以外のところにも力を入れていますが、収益でみるとカジノが7～8割以上を占めているそうです。どのようなビジネスモデルのIRができるかは、選ばれる事業者によると思います。

田中：そういう意味で経済的にいろいろなシミュレーションが必要ですね。できたらもっと地元に落として欲しいですね。

■マリンリゾート

田中：海というとマリンスポーツとか、魚釣りとか、そういうリゾート的なイメージがありますが、開発が進む中で、どこまで可能性があるでしょうか。フィンランドでは港の中にプールをつくっていました。横にサウナがあって、サウナで熱いとなったら、港の中に作った海水のプールに飛び込む。昔は湖に飛び込むって聞いていたけど、街中でそれをやっている。郊外に行くのではなくて、街中でサウナ&スイミングをやっている。その土地だからできるような楽しみ方の企画も考えてやっていく。例えばフィッシングでお魚が釣れたらそれを料理して食べるとかありますよね。料理旅館みたいなものがあちこちでできています。グルメとか食べることを基軸にまちづくりをやる。そこで名物ができる。例

えば明石だったらたこ焼きができるとか、そういう食とまちづくりを合流してやっていくような展開もあるのかな。だから旬の鯛があって、アナゴがあってハモがあってみたいな世界ですね。そういう食べ物なんかに着目しても面白いなと思いますけどね。

鈴木：そういう発想っていうのは、ローカルコミュニティだからできる発想ですよ。官はそんな発想ができない。ローカルコミュニティをもっと育てないといけないです。

守井：岸和田のだんじりは、海側の岸和田城の周りをまわっているのが一番有名ですが、実は山側も一カ月後にだんじりがあります。だんじりは共通していますが、海側と山側は同じではない気がします。特に海側には、人と地域のつながりが残っているように感じます。いわゆるコミュニティがより残っているのは海側かも知れません。大阪や、神戸や西宮の方を見ても、海際コミュニティというか、人間関係が残っている。海際の集落は、高密に集まって住んでいますし。海に近い地域の特質について、都市計画や設計を生業としている我々が「あ、そういうことか」って解る知見が欲しいですね。

飯田：神戸と岸和田の話が出てきましたが、間の大阪市っていうのは、埋め立ててしまっているわけじゃないですか。そこはもう昔からの海に接して住んでいるっていう人たちが大阪市内にはあんまりいないんじゃないでしょうか。断ち切られていないですか。

田中：前にテレビの番組で、大阪の淀川で漁業をしてる方がいて、ウナギ漁をしているとか。結構、天然ウナギで美味しくて高級。だからもとの川や海辺で、漁をしている方もまだいらっしゃると思うんですね。しかし、後継者もいないし。どんどん減っていく。例えば大きなビルつくって、商業ビルつくっても、テナントのリーシングでどっかのチェーン店を引っ張り込んでくる。だからみんな同じで金太郎飴みたいな商業ビルになる。それではいつか魅力がなくなると思うので、ローカルティーをもっと織り込むようなこともやらないと駄目かなと思いますけどね。大阪と言えばこれっていう、いろんなものがあるので、そういうのをもっとうまく活用して欲しいなと思いますけどね。ローカルな文化やコミュニティですね。

■大阪ベイエリアの再生をめざして

田中：だいたい昔になっちゃいますけど、サンフランシスコとか、ニューヨークとかのウォーターフロントで、開発を手がけているデベロッパーが神戸などへ売り込みに来ていましたね。アメリカでやったモデルを、日本のウォーターフロントに持ち込んで、どうですかっていう話でしたけど、やっぱり無理があるんです。お金の面だけでなく、コンテナヤードを確保する前提で計画すると、水辺を占拠してる状況は変わらず、ウォーターフロントにアメリカのモデルのような魅力的なレストランなどは立地できない。だから今一度、そういったアメリカのモデルじゃなくて、新たなウォーターフロントとしての魅力付けをやるような仕事、できる人をもっとつくりたいいけないと思います。

守井：大阪港や北港の築港の歴史をみると、大正時代に財政事情から工事を進めることが難しくなった際に民間資本を活用して工事を続けています。御堂筋で有名な関一さんは、助役時代に港湾開発に民間資本を活用する方法を取り入れたそうです。例えば築港の第一号繫船棧橋の築造では、住友財閥の力を借りています。住友家は自らのビジネスとともに、大阪市の将来も考えて築造に協力したのだと思います。今でも地元でそういう意思決定できる資本家がいれば、共感できるビジョンとビジネスチャンスがあれば、民間資本を活用した再生事業がうまくまわっていく気がします。

鈴木：いや、民間資本だけでなく、ローカルコミュニティも必要だと思いますよ。金だけでなく地域力っていうか、コミュニティで養われた地域力、これからはそういうものを大事にしていかなないと、民間資本だけだったら、また拝金主義的な画一的なプロジェクトになってしまうでしょう。

田中：そういう意味で建築とかまちづくり企画がすごく大事で、デザインという前に、企画の仕事をもっともっとできる人を育てていく。そのためには、地域のことを深く知るとか、楽しむとか、愛する場面づくりをもっとやるべきで、建築協会の中でもっとやって欲しいし、建築と社会という、社会の在り方についてもう一度問いかけるような、大きなビジョンを掲げて志をもって、ベイエリアだけじゃないですけど、取り組んで欲しいなと

思いますけどね。

鈴木：大阪ベイエリアの再生で大きなキーワードになるのは、ひとことで言えば、インクルーシブネスだと思うんです。日本語で言えば包摂性ですね。これこそまさに大事であって、いかに都市的な包容力があって、多様性を受け入れていくか、これが大阪を再生する一つのキーワードになるんじゃないかなと思っています。いかにインクルーシブな都市再生を達成できるかです。

飯田：やっぱり、いかにいろんなところをつなげていくかっていうことが大事ななという気がしますので、例えば、瀬戸内とかで芸術祭をやってますよね。いろんな島をつなげていって。ああいうのがベイエリアのライン上でもできたりするんじゃないかな。定常的じゃなくてもイベント的な。そういう形をつなげていって、お互いに今、全然つながっていないところも、つながることで盛り上げていけるような、仕組みがあるといいんじゃないかなと思うんですけどね。

守井：ベイエリアに、大学などの教育機関があってもいいかなと思っているんですね。湾岸部に学生や研究者が暮らすところがあると、街の中に人の流れも出てくるのかなと。もう一つ思うのは、関西は下町的なまちから優秀な人材を輩出している土地だということです。商店街や中小工場のまちに優れた技術者や経営者、才能があふれているのではないかな。だとすれば、それはすごい強みなので、それをどうつなげていくか。ニュータウンでは育めない、または育みにくい大切なものがある気がします。人や才能を育てるという意味でも、ベイエリアの在り方について議論がいろいろあると思います。

田中：関西には大阪湾と琵琶湖の大きな水辺が二つありますね。京都の生活文化とかまちづくりが淀川でつながって、大阪を中心とするベイエリアに広がっています。明石海峡大

橋でつながった淡路島と四国の一部も入れ、関西の中で大阪を中心としたベイエリアの沿岸地域をそれぞれの地域特性を活かしながら、これまで以上の魅力的エリアに再生していく可能性に期待したいですね。

■座談会まとめ

田中：もっと議論したいところですが、そろそろ、まとめに入ります。大阪ベイエリアの再生に向けたいくつかの鍵が確認できました。まず、日本の中で歴史的に見ても面白いところが多い関西をもっと生かすような手立てで、より多くの多様な人を吸い寄せるとターゲットのひとつとしてベイエリアを見直し、活用を図ることはこの座談会でも共通の認識でした。具体的に今後、目指すべきことは、建築だけでなくもっと多様な人たちの生活文化に対する建築やまちづくり、デザイン関係者の理解や関心のレベルを上げていくことが必要と思いました。

さきほど、大阪ベイエリアに残るだんじりなどのお祭りの話やいろんな食べ物の話がありましたけど、そういうものについてもうまく包括し、まちづくりとして実現する実行性と感性が必要ですね。かつてはコンテナヤードであったエリアを大学キャンパスに変えたポートアイランドの例のように、時代の変化に柔軟に対応していく計画も必要です。今回のテーマである再生ということは、すでにある何に力点を置くのか、活用するのか、資源としてみるのかですね。資源はモノやコトだけでなくヒトも大きな要素だと思います。ヒトのつながりで地域ごとのばらばらでなくつながっていく大阪ベイエリアがこれから求められるかなと思いますね。都市の再生はこの大阪ベイエリアに限らず、今後各地でそれぞれの課題に向けた取り組みが期待されます。

本日はありがとうございました。

2020年もよろしくお願いします。



左奥：鈴木計画系分科会委員
左前：田中計画系分科会幹事

右奥：飯田計画系分科会委員
右前：守井計画系分科会委員

大阪ベイエリアの 経営課題

兵庫県立大学大学院教授

加藤恵正

■動き始めた臨海部

2019年秋、神戸の都心・旧居留地南側に位置する神戸港新港突堤西地区の開発が本格化した。第一突堤基部3.4haの開発は、約700戸の住宅やアクアリウム・ミュージアムなどの文化施設に加え、通販大手フェリシモの本社ビル（2019年8月着工）も立地する。こうした臨海部再開発は、2015年に始まる神戸都心・三宮再生プロジェクトの一翼を担うものでもある。「三宮地区の『再整備基本構想』」「神戸の都心の未来の姿[将来ビジョン]」が策定され、人と公共交通を優先する三宮クロススクエアを核とする「えき・まち空間基本計画」は動き始めている。公民学連携による社会実験なども既に実施された。都心再生プロジェクトに、ウォータフロント整備が核の一つとして位置づけられていることは、1995年の阪神淡路大震災最後の復興プロジェクトとして位置づけられるにふさわしい。震災時、高架構造の43号線が倒壊したことにより、臨海部産業空間と都市機能エリアを分断する産業道路の地中化が提案されたが実現しなかった。この時、産業空間と都市機能空間の融合が実現していたら被災地経済の再生は異なる様相を呈していた可能性がある。43号線の地中化は実現しなかったが、都市機能と港湾・親水空間の融合を企図する“ウォータフロント都心”を構築する試みとして位置づけてよいだろう。

大阪ベイエリアにおいて、この他にも「変

化」が顕在化しつつある。2025年に予定されている大阪・関西万博は、「未来社会の実験場」というコンセプトのもと、バイエリア夢洲で開催予定である。ここにはIR構想もあり、地下鉄の延伸も予定されているという。

こうしたバイエリアの一見華やかな「顔」は、かつて日本を支えた産業空間のあり方と強く結びついている。バイエリアの将来もかかる視点を閉却してはならない¹⁾。

■ラスト・ベルト大阪ベイエリアの盛衰

大阪ベイエリアは、かつて日本の産業を支えた旧阪神工業地帯を核とするラスト・ベルトである。ラスト・ベルトとは、産業構造の転換に対応できず、経済的衰退、人口減少、都市の荒廃が顕在化している地域で、OIA（Old Industrial Area）とも呼称され、その再生・再編は、先発工業国が共通して有する悩みであった。こうしたなかで、1995年には、“The Rise of Rustbelt”（P.Cooke,1995）²⁾ が公開され、世界のラスト・ベルトの多くが再生に向けた動きを示していることを明らかにしたのである。

1900年代初頭、日本の工業生産額の3割を占め、経済活動の機軸としての役割を果たしてきたこの地域は、その後地域内部におけるイノベーションが欠落し、加速度的な衰退に直面することになる。バイエリアを席卷していたブランチ・プラント（分工場）経済の弱



神戸港第一突堤基部事業区域全体のイメージ 出典 神戸市HP

1952年 兵庫県生まれ

1976年 慶応義塾大学経済学部卒業

1983年 神戸商科大学大学院経済学研究科
博士後期課程修了

1983年 神戸商科大学商経学部講師、助教授を経て、1995年から神戸商科大学商経学部教授。2001年から兵庫県立大学（神戸商科大学が統合改称）経済経営研究所長・教授。2017年から兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科教授。

博士（経済学）

点は、企業の中核や研究開発機能が弱く、近隣地元企業との取引連鎖も必ずしも大きくないことにあった（現在も、その状況は続いている）。さらに、近年加速するグローバル・バリュー・チェーン展開の加速の中で、エリア内での経済活動もその存立基盤再編に直面していると言って過言ではない。

「デトロイトの犯した過ちは、自動車産業の雇用が減るのを阻止できなかったことではない。・・・中略・・・デトロイトの本当の失敗、それは、エコシステムがまだ機能しているうちに、そのエコシステムで支える産業を新たなものに転換しなかったことなのだ」（エンリコ・モレッティ 2014）³⁾。阪神淡路大震災復興の過程で、神戸に医療産業クラスターが形成されたことを除けばベイエリアも基本的には同様の課題に直面しているようだ⁴⁾。では、新たな産業の姿への変化を妨げている要因は何なのか。ここでは、ベイエリアにおける「負のロック・イン」を指摘しておきたい。地域が衰退に転じた背景として、Grabherは「産業の発展を促す地域の雰囲気」「高度に発展し洗練されたインフラ」「稠密に形成された企業間の連関関係」「政治的な支援」といったかつてその地域を繁栄に導いた強みとも言える要素群がロック・インされることによって、逆に発展のエンジンとも言える地域イノベーションを押さえ込むことになったことを指摘した⁵⁾。こうした要素群は、各々が「強いつながり」によって巧みに構築され、地域経済の成功・繁栄に大きく寄与してきたが、

時代の流れの中で硬直化の罠に陥ったと指摘する。実際には、「機能的ロック・イン」「認知的ロック・イン」「政治的ロック・イン」という3つの負のロック・インが作用したと分析している。ベイエリアには、図に示す3つの負のロック・インが存在している。こうした構造をいかに溶解していくのか（下記図参照）⁶⁾。

■「負のロック・イン」解除、地域イノベーション・システムの構築、そして広域都市圏の核心として

最後に、競争力のある広域圏の核心としてベイエリアを位置づけ、新たな「地域イノベーション・システム」構築に向けた若干の展望を整理しておく。第一に指摘しておきたいのは、地域の社会経済資源に呼応した地域産業政策構築の必要性である。グローバル・ネットワーク時代における大阪湾ベイエリアにおいて、まず、死蔵された地域資源の再編成、外部からのアクセシビリティを高めるための仕組みの創出など、ロック・インしてしまった主体や仕組みを再編させることからスタートしなければならない。第二に、地域ガバナンスのあり方を指摘しておきたい。大阪ベイエリアは、大阪市、堺市、神戸市、尼崎市など湾岸基礎自治体を多数含んで兵庫県、大阪府にまたがっている。ブランド・プラント経済から離脱するうえで、産業構造の再編・転換を含む中・長期的視点からの地域経済再生を計画し、既存産業再編や新たな産業

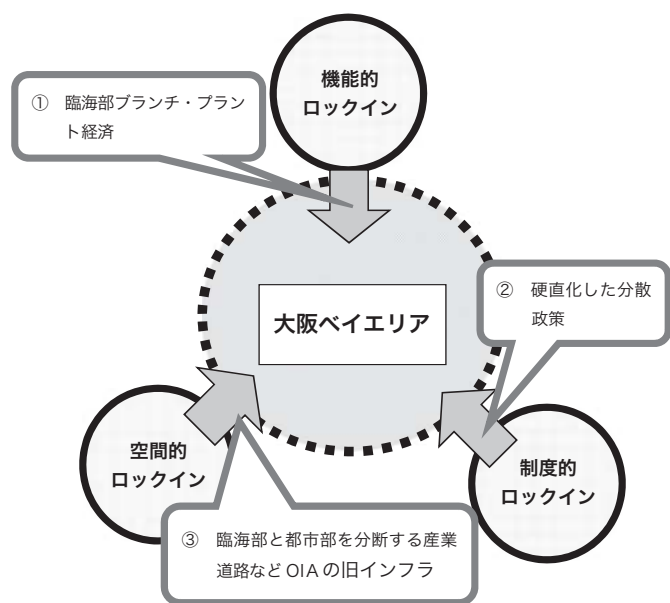
導入のための府県境・市境をこえた広域的視点から経済競争力強化のための地域整備を行うことは不可避である。これまでのように、自治体ごとの画一的施策ではなく、大阪ベイエリア全体を統合的視点から地域産業の活性化や新規産業立地を加速させる戦略が重要となる。経済空間と行政空間の不一致を排し、広域行政のなかに解決の方途を見出すことはその効率性からみて必須といってよい。

最後に、イノベーション創発を加速する広域プラットフォームの必要性を指摘しておきたい。近年、都市や地域に形成されるイノベーション・システムを稼働するにあたって、「関連した多様性（related variety）」をベースとしたプラットフォームの役割が注目されている⁷⁾。ここで言う関連した多様性とは、相互に補完的で共通の関係性を有した多様性を指しており、こうして形成される集積からは新たな知識や情報が生み出され、また業種を越えたイノベーションが創発されることが期待される。イノベーション・プラットフォームは、これまでベイエリアが醸成・蓄積してきた多様な産業集積を基盤に、ベイエリア全体の創造性を加速するあらためて緩やかで柔軟なネットワークを再構築することを狙いとしており、産業集積とベイエリアのダイナミズムの間の「ミッシング・リング」を構築・顕在化させる試みでもある。

（かとう よしまさ）

参考文献

- 1) Katoh,Y (2013) Transformation of a Branch Plant Economy: can the Osaka Bay Area escape the rust belt trap ?, Working Paper, No.224, Institute for Policy Analysis and Social Innovation, University of Hyogo, 2013.
- 2) Philip C., ed. (1995), The Rise of Rust Belt, Routledge.
- 3) エンリコ・モレッティ（池村千秋訳）『年収は「住むところ」で決まる－雇用とイノベーションの都市経済学－』、プレジデント社、2014.
- 4) 加藤恵正「進化する神戸医療産業都市－医療産業クラスター飛躍の条件－」山崎朗編著『地域産業のイノベーションシステム』学芸出版、pp.124-141, 2019.
- 5) Grabher,G. 'The Weakness of Strong Ties: The Lock-in of Regional development in The Ruhr Area', Grabher,G.ed. The Embedded firm; On the Socioeconomics of industrial Networks, Routledge.
- 6) 加藤恵正「地域経済の発展と政策」池田潔編著『地域マネジメント戦略』同文館、pp.34-58, 2014.
- 7) Boschma,R., etc., Constructing Regional Advantage:Platform PoliciesBased on Related Variety and Differentiated Knowledge Bases, Regional Studies, Vol45-7, pp.893-904, 2011.



大阪ベイエリアの「負のロック・イン」構造

神戸港 ウォーターフロント の再開発

～現況と今後の展望～

神戸市港湾局計画部
ウォーターフロント計画課
ウォーターフロント計画係長

風嵐陽太

■はじめに

神戸港は、自然条件に優れた天然の良港として、古代、中世より大陸や朝鮮半島との交易拠点として賑わい、1868年の開港以来、日本を代表する国際貿易港として我が国の国民生活や産業基盤を支えてきた。高度経済成長期以降には、本格的な港湾物流のコンテナ化や船舶の大型化の時代に対応するポートアイランドや六甲アイランド等の新たな港湾物流、海上都市を整備してきた。

一方で、時代の変化とともに利用頻度が低下した製造業や物流拠点等がある工業地域等の臨海部では、親水性のある都市機能を複合的に取り入れた「ハーバーランド」「HAT神戸」等のウォーターフロント再開発を進め、神戸港は我が国のウォーターフロント再開発の先駆けと言われてきた。

現在、神戸市では、都心三宮の再整備と一体となって、中突堤周辺地区や新港突堤西地区を中心にウォーターフロント再開発に取り組んでいる。本稿では、神戸市のウォーターフロント再開発の方針及び上記地区を中心に再開発の具体例について紹介する。

■ウォーターフロント再開発の方針

ハーバーランドからHAT神戸に至る都心・ウォーターフロントは、神戸の発展を牽引してきた中心的な地域であり、神戸がこれからも国際的な都市間競争に負けない選ばれる都市であり続けるためには、この地域の魅力に磨きをかけていく必要がある。そのため、都心・ウォーターフロントのめざす姿を描いた

「『港都 神戸』グランドデザイン」（以下、グランドデザイン）を平成23年3月に策定し、都心・ウォーターフロント全体で様々な取り組みを行っている。グランドデザインでは、種々の都市機能を導入したゾーニングを設定し、エリア毎に今後のまちづくりの方向性を設定している。中突堤は「観光・エンタランスエリア」、新港突堤西地区は「文化・創造産業複合エリア」（突堤基部）、「観光・集客複合エリア」（第1突堤、第2突堤）、「海のエンタランスエリア」（第3突堤、第4突堤）としてそれぞれ位置づけ、方向性に沿った施設の導入を行っている。

また、神戸開港150年の節目に、概ね30年先を見据えた神戸港が目指すべき戦略的な将来像として、「神戸港将来構想」（以下、将来構想）を平成29年7月に策定した。将来構想では、神戸港の主たる機能である「港湾・産業」と、みなとまち神戸の活力と文化を創造する「にぎわい・都市」の両面から取り組みを進めることとしている。「にぎわい・都市」の分野では「世界から人を惹きつけるウォーターフロントの形成」をコアプロジェクトのひとつとして掲げ、戦略的取り組みとして、「都心の成長を牽引するウォーターフロントの再開発」、「新たなランドマークとなる神戸港のシンボル景観の整備」、「ウォーターフロントの特色を活かした豊かな生活環境の創出」を挙げている。具体的には、インバウンドも誘引する集客施設の立地や戦略的な文化観光施設の展開、街並み景観のデザインの向上等により、観光集客力強化と時間消費型滞在地



図1 リニューアルしたメリケンパーク（全景）

2009年 大阪市立大学工学部環境都市工学科
卒業
2011年 大阪市立大学大学院工学研究科修士
課程修了
2011年 神戸市役所入庁
以降、ウォーターフロント再開発等に関する業務経
験を経て、2019年から現職に至る

形成を図っていく。

再開発エリアにおける建築物や歩道、緑地等の公共施設の整備に当たっては、良好な景観を形成することを重視している。中突堤周辺地区及び新港突堤西地区は、神戸市都市景観条例に基づく都市景観形成地域として、地域毎に定めた方針に基づき、都心ウォーターフロントにふさわしい景観の形成を図っている。また、両地区を含む都心・ウォーターフロントエリアでは、神戸らしい夜間景観にさらに磨きをかけ、都市ブランド力を高めるため、「神戸市夜間景観形成実施計画」を平成24年3月に策定し、魅力的な光の演出等を取り入れた夜間景観整備にも取り組んでいる。

■中突堤周辺地区

神戸開港150年を機に、供用開始から30年を迎えたメリケンパークでは、さらに魅力あるウォーターフロント緑地とするため、多目的広場や芝生広場の拡充、「BE KOBE」モニュメントの設置、夜間景観の整備、新たな飲食店の誘致等を行い、平成29年4月にリニューアルオープンした。リニューアルにより、多くの方々にお越しいただいており、特に「BE KOBE」モニュメントは、若者のSNS等で広く発信され、神戸の新たな観光拠点となっている。また、眺めて楽しい、水に触れて楽しめる噴水広場の整備を行い、平成30年4月に一般開放した。夜間には、音楽とLED照明による噴水演出を行い、メリケンパークの新たな顔となっている（図1）（図2）。

メリケンパーク内に立地している神戸海洋博物館は、今年度より、昭和62年の開館以来、初めて大規模な展示フロアのリニューアルに着手している。新たに「神戸とみなとのあゆみ」をテーマとし、令和2年2月上旬のリニューアルオープンを予定している。

今後は、みなと神戸の観光・エントランス

エリアとしての魅力に磨きをかけるため、みなと神戸を代表するシンボルである神戸ポートタワーのリニューアルと、これに隣接する中突堤中央ビル（南館）の再整備に向けた取り組みも進めていく。

■新港突堤西地区

都心三宮の南側に位置する新港突堤西地区では、グランドデザインの土地利用方針に基づき、順次、再開発の事業化を進めている。

これまで、第3突堤で神戸三宮フェリーターミナルを平成26年9月に供用開始したほか、第4突堤では、神戸ポートターミナルの耐震改修工事を行い、平成27年3月にリニューアルオープンした。

第1突堤では、平成27年12月に宿泊・温浴施設「神戸みなと温泉 蓮（れん）」とコンベンションホール「ラスweet神戸オーシャンズガーデン」が開業した。神戸市では新たな憩いの場として、施設の周辺に緑地（新港第1突堤緑地）を整備し、施設と同日にオープンした。

第3突堤基部では、総合福利厚生施設として、港湾関係者や市民、来街者等の多様な活動と交流の場となる「神戸ポートオアシス」を整備し、平成29年7月に開業した。施設としては、ホール（400席、可動式）のほか、事務所、会議室、食堂等があり、ホールや会議室は、港湾関係者だけでなく広くイベント等に活用されている。整備にあたっては、デザインプロポーザル方式により建物設計を行い、神戸税関やデザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）、新港貿易会館等の周辺の歴史的建築物とも調和した外観デザインを採用した。平成30年12月には、兵庫県の第20回人間サイズのまちづくり賞まちなみ建築部門奨励賞を受賞している（図3）。

第1突堤基部では、神戸開港150年の平成29年に、文化・集客・業務・商業・住機能等



図3 ポートオアシス

の複合再開発を自ら実施する事業者を広く公募し、「海・港から生まれるニュー神戸ライフスタイル〜日本・アジア・世界へ発信〜」というコンセプトのもと、水・水族・アートが融合したアクアリウム、クラシックカー等のミュージアム、創造産業に関連する企業等の本社、ウォーターフロントエリアにふさわしい高質な住機能、低層階では各施設と関連した商業施設等を導入した事業提案を採用した。業務・商業棟（南街区）を皮切りに、令和2年後半より順次操業開始する予定である。また、施設の整備にあわせて、公共施設として、歩道、デッキ、緑地広場等の整備も行うこととしている（図4）。

今後は、第2突堤及びその周辺部においても、グランドデザインの土地利用方針に基づき、順次、事業化に向けた取り組みを進めていく。

■おわりに

神戸市は、都心とウォーターフロントが近接した、他都市にはない立地環境を有している。この環境を活かし、都心三宮の再整備と一体となったウォーターフロント再開発により、交流人口や賑わいの創出に取り組んでいるところである。

今後、大阪湾ベイエリア全体の動きを視野に入れつつ、将来構想に掲げる「世界から人を惹きつけるウォーターフロントの形成」を目指し、着実に取り組みを進めて参りたい。

（かざらし ようた）



図2 メリケンパークの噴水広場



図4 新港突堤西地区（第1突堤基部）再開発事業イメージ

水辺の ユニバーサル デザイン

～須磨から舞子の
CCZエリアをみて～

島根大学客員教授

田中直人

東京大学大学院工学系研究科建築学専門課程修了。博士（工学）。

神戸市にて福祉のまちづくり計画のほか、西神ニュータウン、舞子駅前再開発などを担当した後、神戸芸術工科大学教授、摂南大学教授を経て島根大学大学院特任教授、2018年より現職。

各地でのまちづくりやユニバーサルデザインの計画に携わる。著書に「建築・都市のユニバーサルデザインーその考え方と実践手法」（彰国社）ー日本建築学会著作賞受賞、「ユニバーサルサインーデザインの手法と実践」（学芸出版社）、「五感を刺激する環境デザインーデンマークのユニバーサルデザインに学ぶ」（彰国社）等。

ユニバーサルデザイン監修や作品に、神戸博ポートピア'81、ビッグ・アイ、イオンレイクタウン、奄美海洋展示館等。

■はじめに

大阪ベイエリアは沿岸地域のみならず近接の河川地域とともに、経済的、文化的にも関西の特色のある発展をとげてきた。大阪ベイエリアの現状としては、平成4年12月の大阪湾臨海地域開発整備法（いわゆるベイ法）に基づき、今後の開発と環境整備が取り組まれつつある。本稿ではベイエリアにおける水辺のバリアフリーについて、福祉的なバリアフリーの視点に限定せず、広くユニバーサルデザインの環境デザインから考察を行う。

■自然の恩恵を享受できる入浜権

都市開発において自然環境を傷つけない整備が求められる。その中で水辺は人間性を回復し、ゆとりとうるおいを得る市民にとって身近で貴重な生活空間である。もともとの水辺は自然地形としてベイエリアに注ぐ河川湿地帯をはじめ、砂浜や岩場があった。その後、産業や運輸の用地として、土地の拡大を図り、ごみ処理の一環としても水辺の埋め立てが進められてきた。大阪ベイエリアでもその過半は産業施設や自動車系道路で、公園・緑地や歩行者系道路は少ない¹⁾。湾岸を走る高速道路は地域の景観に大きなウェイトを占め、視覚的にも地域景観を変えている。また、道路によって地域が分断される状況もあり、かつては自由に市民がアクセスできる水辺も港湾施設や工場用地が占有し、一般市民の水辺へのアクセスを阻むバリアとなっている。元の海岸線ははるか陸地に埋没し消滅している。

1973年、兵庫県高砂市の公害を告発する住民運動から海浜や海岸に自由に立ち入り、釣りや海水浴、散策を楽しむなど、山林の入会権から着想された自然の恩恵を享受できる権利として「入浜権」が主張された。海辺まで市民のだれもが自由に出入りできるバリアフリーが求められたのである。

■ベイエリアをつなぐバリアフリー

現在、大阪ベイエリアには2つの海上空港と数多くの人工島があり、それぞれ鉄道、新交通システム、フェリーなど海上輸送手段が導入されている。しかしその大半は内陸部とそれぞれをつなぐ行き止まり構造であり、ベイエリア全体としてネットワークされていない。

高速道路や鉄道、連絡橋などの整備においても車だけでなく、多様な利用者の状況によりそった配慮を導入すべきである。その意味で駅ターミナルや車両のバリアフリーデザインの改善もさらに必要である。将来の都市インフラとして既存の空港や鉄道とも機能するような計画を講じ、点・線・面と広げていくバリアフリーアクセスの整備が課題である。

1981年のポートピア博では全国に先駆けて新交通システムポートライナーが開業されたが、駅や車両におけるバリアフリーはその後の全国各地の交通バリアフリーのモデルを提示している。

■水辺を大きな公園に

筆者らは1985年1月の建築と社会「特集・大阪湾物語」に大阪ベイエリアを海から連続的にヨットでクルージングし観察調査した結果をルポ記事として報告している²⁾が、水辺景観は地域差が大きく、背景の緑や建築が遠いという印象を記憶している。景観としてもワンポイントではなく水辺をゾーンとして捉え整備する発想が重要である。神戸市では須磨海岸に1976年、海釣り公園を開業している。整備はこの地点だけでなく、1990年CCZ（コースタルコミュニティゾーン）整備計画に基づき、須磨から舞子エリアに至る海岸保全機能の充実などの整備をめざしている。これにより、地域住民や観光客が自由に水辺を楽しむ大きな公園としてイメージされるようになった（図1）。



図1 CCZエリア（須磨～垂水～舞子）注：須磨地区一部省略 現地案内サインをもとに作成

1991年には「なぎさ海道」として、大阪ベイエリアというゾーンをつなぐ海辺に近づける親水空間をめざそうとプロジェクトが提唱された。拠点をつなぐ道によって水辺の景観整備を図り、行政区域を超えて、魅力的な湾岸景観が連なる海辺の大きな公園の実現が期待される。

■水辺のバリアフリー

多様な市民、観光客など不特定多数の人を安全快適に受け入れるユニバーサルデザインの実現には基礎的なバリアフリーの配慮が必要である。須磨から舞子に至るCCZの計画エリアについてバリアフリーの整備状況を2019年10月に調査した。

砂浜のままでは車いすやベビーカーは走行できないが須磨海岸では砂浜に設けられた舗装路が車いす使用者等の移動と海岸景観を改善していた（図2）。しかしJR須磨駅から南側の海岸へのEVが未整備で北側EVから踏切を経由せざるを得ない。駅舎から海岸への早期のバリアフリーを望みたい（図3）。海釣り公園および須磨浦公園などとの一体的なつながりを図るバリアフリー整備も期待したい。



図2 砂浜と遊歩道、遠く海釣り公園望む（左）
図3 JR須磨駅南の様子（右）

垂水地区についてはJR垂水駅から海神社、マリニピア、平磯地区の諸施設をつないでいく街路整備などでのバリアフリーの更なる改善への試みが求められる。舞子地区については水辺で市民の楽しむ姿が確認できた（図4）（図5）。アジュール舞子における海岸や県立舞子公園などでは魅力的な水辺や松林などの整備が進んでいる。遊歩道や歴史的な建築の移築、リゾート施設の配置などで、基本的なバリアフリーに加えて、市民の憩いの場として魅力的な景観を形成している。明石海峡大橋、JR、山陽電鉄のクロスする立体的なバリアフリーなどのさらなるスパイラルアップを期待したい。



①将棋 ②バーベキュー ③魚釣り ④散歩と軽スポーツ
図4 水辺で見られた市民の楽しむ姿

■水辺のコンバージョンによる「活性化」

既存市街地での多種多様な活動を補完し、新たな都市機能を更新する受け皿として、ベイエリアの用地がリザーブ機能を果たすことが期待される。その際に公害の拠点となる懸念を払拭する環境改善を図り、新たな用途として海辺の名所づくりが求められる。

産業活動の国際化やコンテナ自動車輸送など運輸システムの変化とともに重厚長大産業の衰退、工場の離脱、空き倉庫の増加などで臨港鉄道、荷揚げ施設の遊休化が目立ち、不活性化地域となっていた地域もある。これらの地域工場や倉庫跡地、埋め立て地に着目し、多様な人のアクセシビリティを高めるため、集客施設や集客イベントを企画する動きが出てきた。すでにアウトレットや水辺の環境の魅力を活かしたレストランなどの商業施設に加え、海遊館やユニバーサルスタジオなどもある。さらに大規模なIR（統合型リゾート施設）や万国博覧会の計画もある。これらは管理の都合上、当該エリアの周囲に、一般市民が自由に出入りできない境界などのバリアが設けられることが多い。埋め立て地などに新規の大規模な開発だけに傾注することなく、灘五郷の酒蔵めぐりのようにもともと海辺に近い地域で育まれてきた生活・産業遺産を生かしながら、街並み景観などを工夫して地域をつないでいく環境デザインにより多様な人の来訪機会を高めることにつながる。

阪神淡路大震災のときは仮設的な用途として広大な仮設住宅用地となったコンテナヤードが今また大学キャンパスなど他の用途に変わるなど今後も地域用途は変化していくこと

が考えられる。水辺は新たな活性化を醸し出す可能性を秘めたエリアでもある。

■安全対策としてのバリアづくり

海釣り公園をはじめ、海辺で釣りを楽しめるが、進入禁止エリアへの立ち入りも多く、危険なバリアが多いのが現状である。水に関しては楽しむ水辺など親水として関わる以外に利水や治水の視点が重要である。とりわけ防災目的で津波や高潮から沿岸地域を守る防潮堤や防波堤、消波のテトラポットなどが求められるが、東日本大震災被災地のように敷地のかさ上げを行う場合もある。大阪ベイエリアにおいても津波や高潮により大きな被害が予測される地域もあり、今後、水の侵入を防ぐ防潮堤などのバリアを設けて危険を除去しなければならない。日常的にも転落防止の柵やフェンスを設置すべき箇所があるが、水辺とふれあう親水性の高い環境デザインと相反する場合も多い。水を防ぐバリアづくりと水にアクセスしやすいバリアフリーをどのように両立させるかの課題がある。

■おわりに

構想された「なぎさ海道」が構想で終わらず、真に関西の未来都市の魅力的なインフラとして市民や観光客など多様なひとにやさしいユニバーサルデザインにつながってほしいものである。そのためにはさまざまなプロジェクトのパッチワーク的な受け皿として放置することなく、既存の行政区分を超えたベイエリア全体を見つめ、より多様な人にとって魅力的で安全快適なアクセシビリティを配慮したまちづくりとしての実践が求められる。（たなか なおと）

参考文献

- 1) 財団法人大阪湾ベイエリア開発推進機構「なぎさ海道」1995年
- 2) 「大阪湾物語」建築と社会pp.58～87 日本建築協会1985年



図5 明石海峡大橋を望む広場でのイベントに集う市民

土取り跡地の自然回復を果たした公園事業

～国営明石海峡公園
淡路地区の成り立ちと
今後の展望について～

国営明石海峡公園事務所
調査設計課長

藤井厚企

1965年生まれ 大阪府出身
大阪工業大学工学部卒業
平成3年に建設省入省後、土木研究所勤務
地質化学部地質研究室、材料施工部土質研究室研究員。
平成11年4月より近畿地方整備局勤務
猿谷ダム管理所、大和川河川事務所、琵琶湖河川事務所、猪名川総合開発工事事務所、淀川河川事務所専門官、紀伊山地砂防事務所建設監督官、企画部技術検査官、六甲砂防事務所工務課長を経て、平成31年4月より現職。
国営明石海峡公園全体の計画および調査設計、事業調整を担当する。

はじめに

国営明石海峡公園は、明石海峡を挟んだ兵庫県淡路市の「淡路地区」と神戸市の「神戸地区」の2地区で構成され、全体計画面積330haのI号国営公園である。

近年の余暇時間の増加に伴う、主として近畿地方の広域レクリエーション需要の増大に対処するため設置する大規模公園であり、併せて明石海峡大橋を中心とした明石海峡周辺地域の広域レクリエーションゾーンの形成に寄与する公園だ。

国営明石海峡公園（淡路地区）の概要

淡路地区のコンセプトは「海辺の園遊空間」で、関西国際空港建設にも使われた約100haの大規模な土取り跡地の自然を回復し、国際的でリゾート感あふれる海辺の園遊空間を創り、基本テーマの「花」「海」「島」を活かしたランドスケープと園遊空間の場づくりを図っている。この公園には3つのゾーニングがされており（図1）、①斜面緑地を保全しつつ、簗場山からの大阪湾の眺望を中心とする展望点を整備、林間のレクリエーションの場とした「展望ゾーン」。②瀬戸内海や淡路島の自然・歴史・文化を基調としながら、国際交流にふさわしい庭園的（園遊）空間を整備した「文化交流ゾーン」。③海辺の開放的な空間を活かしたレクリエーション利用の場とし、広域観光の拠点を整備する「海岸ゾーン」を整備する計画だ。このうち「文化交流ゾーン」と「海岸ゾーン」の一部は既に開園している。

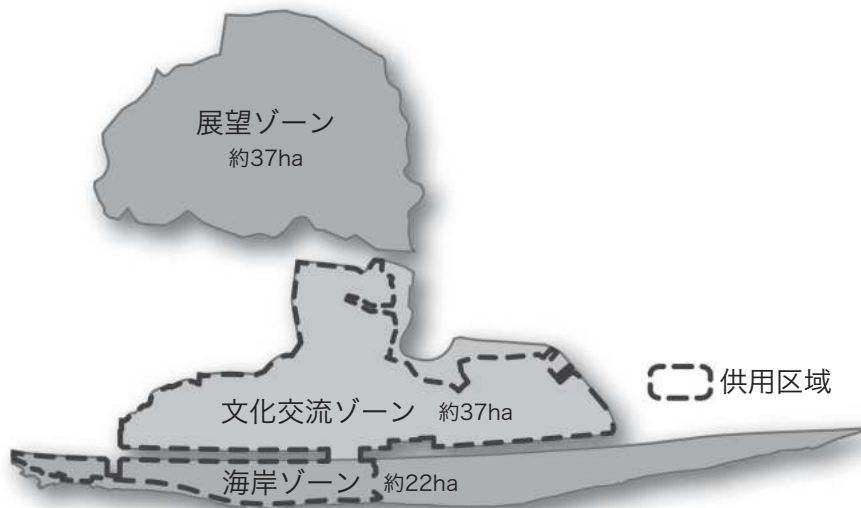


図1 国営明石海峡公園 淡路地区

淡路地区のなりたち

現在の淡路地区のある場所は、もともと「灘山」というウバメガシやヤマモモが群生する標高約160mの海に迫った山であった（図2）。

●地形と緑化区域

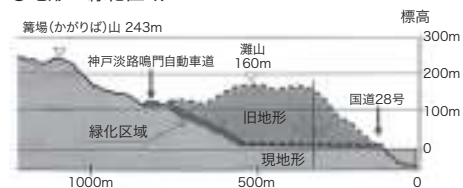


図2 土砂採取された地形（横断面図）と緑化区域

昭和38年から灘山は切り崩され、大阪港ベイエリアの埋め立て用の土砂として運び出され、平成6年まで続いた。大型の重機を用いた大規模な土砂採取の結果、約1億m³もの土砂が採取搬出され、139haもの自然を失った。その広大な土砂採取跡地の利用にあたっては、国営公園や施設群の整備とともに、岩盤がむき出し（写真1）となった12haの斜面地の緑化が大きな課題となった。この斜面地については、兵庫県がウバメガシなどの灘山従来からある緑を用い岩盤斜面のまま回復を目指し、ポット苗約25万本の植栽する緑化を行った結果、現在に至っている。

淡路地区は平成8年度に事業承認を得て、隣接施設と連携を図りながら整備を進め、平成12年3月から同9月までの期間に国際園芸・造園博「ジャパンフローラ2000」の会場で使用された後、平成14年3月21日に文化交流ゾーンおよび海岸ゾーンの各一部を開園（30.1ha）した。その後も、順次整備を進め、現在では計画面積の約42%となる40.4haを開園

し、海の景色や四季折々の花木、遊具、イベントなどが楽しめる公園となっている（写真2）。

■ 淡路地区の今後の事業について

淡路地区での当面の取組として、一部未開園区域が残る海岸ゾーンの整備およびリニューアルをおこなっていく予定である。特に民間活力の導入を図るシー・スケープ・ラウンジェリアは、国営公園初のPark-PFI制度を活用し、本公園の課題として食の充実や繁閑の差がなく年間通して来園する魅力づくりを行っていく予定で手続きを進めており、昨年5月、募設置等予定者等として代表法人（株）アクアイグニスに決定したことを公表した。Park-PFI制度とは、平成29年の都市公園法改正により創設された、飲食店、売店等の公園利用者の利便の向上に資する公募対象公園施設の設置と、当該施設から生ずる収益を活用してその周辺の園路、広場等の一般の公園利用者が利用できる特定公園施設の整備・改修等を一体的に行う者を、公募により選定する「公募設置管理制度」のことである（図3）。

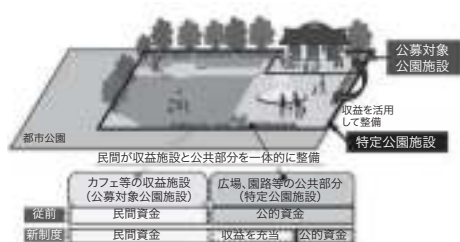


図3 Park-PFIのイメージ図

選定した公募設置等予定者からは、美しい海の景色を活かした、公園の他エリアにない時間消費型コンテンツである複合温浴施設の整備や、プロムナードと一体感のあるカフェ等の施設配置による回遊性向上が提案されており、温浴施設を核とした「癒し」と有名シェフ・パティシエ等による「食」の提供できる魅力ある公園作りを行っていく計画で、公園利用者の集客に資する魅力的なサービス提供が期待される（図4）。これに隣接するエリアも大阪湾や紀淡海峡を望む高台の広場、波音を聞きながら景色を楽しむテラスやデッキ等を提供する施設の整備を計画している。

より魅力的な公園となる整備を進めてまいりますので、今後の淡路地区をご期待下さい。

（ふじい あつき）



写真1 土砂採取後、大きく姿を変えた灘山



写真2 現在の淡路地区(供用区域と計画範囲)



図4 アクアイグニスの事業イメージパース図

泉 佐 野 市

りんくうタウンの 現状と課題・展望

泉佐野市市長公室民間活力企画戦略担当
理事 兼 統合型リゾート誘致担当理事
泉佐野市観光協会アドバイザー

中平良太

泉佐野市市長公室政策推進課成長戦略室
官民連携推進担当主幹 兼 民間活力企
画戦略担当主幹 兼 統合型リゾート
誘致担当主幹

日垣 淳

中平良太

東海大学文学部広報学科広報メディア課程卒業

1983年 (株)テレビランド入社、TV番組ディレク
ター。

1985年 (株)電通映画社【現(株)電通テックと
(株)電通クリエイティブX】入社、CM制作
部配属。プロデューサーとして大手
企業のTVCMを担当。

1991年 (株)クリエイターズユニオン入社、取締役制
作部長兼チーフプロデューサー。
TVC、イベント、WEB、映画を手掛ける。
ACC賞多数、博報堂「ベストプロデュー
サー特別賞」など受賞。

2012年 「NPO関西シティプロモーション」設立。
「だんじりin大阪城」実行委員会副委員長
として立上げ開催。

2013年 泉佐野市部長級職員公募により入庁。

2016年 現職。

日垣 淳

1996年 泉佐野市入庁、総務部納税課配属。

2001年 総務部契約検査課（2005年から総務課に名
称変更）配属。

2013年 総務部人事課配属。

2017年 4月～現職。

■りんくうタウンの現状

●「りんくうタウンのホテル出店状況」

関西国際空港が立地する泉佐野市は、空港
対岸のりんくうタウンを筆頭に宿泊施設が多
数あり、府内でも有数の宿泊拠点になってい
る（図1）。2013年には、関空を含めりんく
うタウン地区にはホテルが3施設であったが、
その後はインバウンド急増のフォローもあり、
現在7施設1844室に増え、2020年夏以降は10
施設2900室になる予定である。

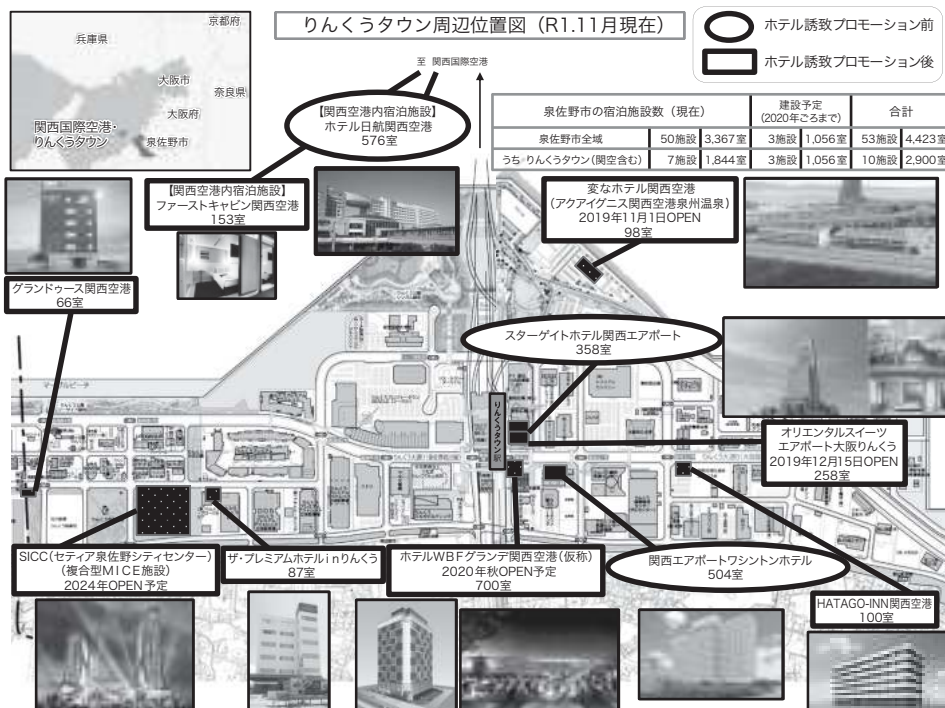


図1 「りんくうタウンのホテル分布図」(市長戦略室作成)

年	全体		外国人	
	延べ宿泊者数	実宿泊者数	延べ宿泊者数	実宿泊者数
2010 (平成22) 年	1,119,460人	1,041,413人	491,101人	421,359人
2011 (平成23) 年	852,170人	747,107人	308,660人	271,734人
2012 (平成24) 年	1,043,530人	897,292人	425,360人	384,262人
2013 (平成25) 年	1,117,003人	941,639人	495,625人	403,646人
2014 (平成26) 年	1,298,823人	1,098,917人	678,186人	573,495人
2015 (平成27) 年	1,648,398人	1,424,058人	987,825人	837,677人
2016 (平成28) 年	1,477,990人	1,274,220人	936,990人	775,690人
2017 (平成29) 年	1,555,470人	1,325,020人	989,440人	813,700人

図2 泉佐野市宿泊数推移 (市作成)

※観光庁「宿泊旅行統計調査」出典 (ただし、数値は当該調査を元に市で推計した推計値)

	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度
泉佐野市域 計	950万人	1,118万人	1,321万人	1,320万人	1,372万人	1,355万人	1,383万人
りんくうタウン内 合計	2,170万人	2,298万人	2,471万人	2,324万人	2,400万人	2,332万人	2,348万人

図3 りんくうタウン泉佐野市域入込客数 (市長戦略室推計)

昼間人口と夜間人口の比率の推移 (泉佐野市)

	H2 (1990)	H7 (1995)	H12 (2000)	H17 (2005)	H22 (2010)	H27 (2015)
昼間人口	84,392	97,302	102,943	103,477	105,572	107,084
夜間人口	88,761	92,238	96,042	98,827	100,801	100,966
昼夜間 人工比率	95.1	105.5	107.2	104.7	104.7	106.1

【出典】国勢調査

図4 泉佐野市昼間人口と夜間人口の比率 (市作成)

●「りんくうタウン泉佐野市域の年間入込客数は約1380万人」

泉佐野市、田尻町、泉南市の2市1町に跨るりんくうタウン全域では約2350万人（図3）。

●「昼間人口が夜間人口を上回る」

泉佐野市民の市内従業・通学者割合が高く、閑空や観光関連業への他自治体からの就業者流入が多い（図4）。尚大阪府内で上回っているのは5市1町である。

■泉佐野市の取り組み

泉佐野市は長年閑空のインパクトを活かすべく、海外の国際空港立地自治体のような観光目的地化を目指しており、MICE（企業等の会議〈Meeting〉、企業等の行う報奨・研修旅行〈Incentive Travel〉、国際機関・団体、学会等が行う国際会議〈Convention〉、展示会・見本市、イベント〈Exhibition/Event〉の頭文字を使った造語）、ショッピング、医療の各ツーリズムを核とした「カジノを含む統合型リゾート（Integrated Resort：略IR）」の誘致を目指して段階を踏んで国際観光施策を進めてきた。戦略として3段階に分け取り組んでいる（図5）。まず、第1段階として、りんくうタウンへの「国内有数の宿泊施設拠点形成」、第2段階で「MICE核と関連施設誘致」、第3段階で「MICEエリア形成」し、IR誘致に繋げようというものであり、IRが誘致できない場合でも、MICEを中心に観光目的地にするというものである。

●第1段階 宿泊拠点形成

第1段階前の2013年頃の閑空りんくうタウン地区でホテルは3施設であった。りんくうタウンは“負の遺産”というイメージがついておりホテル誘致が難しいことが予想されたので、泉佐野市の宿泊需要データを基にセールスシート作成、ホテル事業者へのセールス、「新設ホテルに最大1億円の奨励金：おもてなし条例」制定、市の土地をホテル限定で売却公募と立て続けに打ち出し、報道のアナウンス効果もあり、思惑通りホテル出店ラッシュに繋がった。

●第2段階 MICE核と関連施設誘致

現時点が第2段階である、市内に既存MICE施設はあるものの規模が小さく核施設誘致が必要であることから、海外事例を研究・視察し、

日本初の「民設民営」の「MICE複合施設」を具現化するため、経験のある海外資本に期待し国際公募したところ、マレーシアのグローバルデベロッパーであるSPセティア社に決定し、2024年に「SETIA IZUMISANO CITY CENTRE」（SICC）がオープン予定となった。また、関連施設として、長年放置されていた広大なりんくう公園予定地に工事中の「閑空アイスアリーナ」は国際規格リンク（60×30m）とカーリングシートを併設し、アイスリンクに敷く特殊床材を日本初導入し、床面積が3,000㎡のアリーナとして他競技やMICEなどにコンバージョン利用できる“真”の多目的ホールとなる。それらに呼応するように、映像を駆使したMICE開催可能な360°シアターレストラン「オチアリーナ」、ショッピングツーリズムの

中心施設「りんくうプレミアム・アウトレット」大規模拡張などが建設中である（図6）。

●第3段階 今後の展望と課題

第3段階の今後の取り組みとして「KIXりんくうMICEクラスター」を組成し、施設が各々で観光客誘致をするのではなく、SICCと閑空アイスアリーナを核に各施設を有機的に結び付け、エリア全体で巨大なMICE複合施設となるように取り組む。

課題としてはりんくうタウンでの飲食店が少ないことと、訪日外国人からは夜がつまらないとの声が大きく、MICEのアフターコンベンションの観点からも、エンタメを中心にナイトタイムエコノミー施設誘致も大きな課題である。

（なかひら りょうた・ひがき じゅん）

泉佐野市MICE CITY戦略

ホテル誘致⇒宿泊拠点形成

マーケティング
サウンディング
トップセールス
誘致促進策
企業誘致奨励金
おもてなし条例
公募
泉佐野駅前
りんくうタウン駅前

MICE核と関連施設誘致

マーケティング
サウンディング
国内外視察
公募
閑空アイスアリーナ
IZUMISANO CITY CENTRE
商業・賑わい施設
プレミアム・アウトレット拡張

MICEエリア形成へ

DMO設立
観光資源&ルート造成
コンベンションビューロー設立
ステークホルダー互恵構築
エリアMICEアライアンス設立
泉佐野市域外施設とも連携
国家戦略特区(MICE特区)検討
既存施設ユニークベニュー化

図5

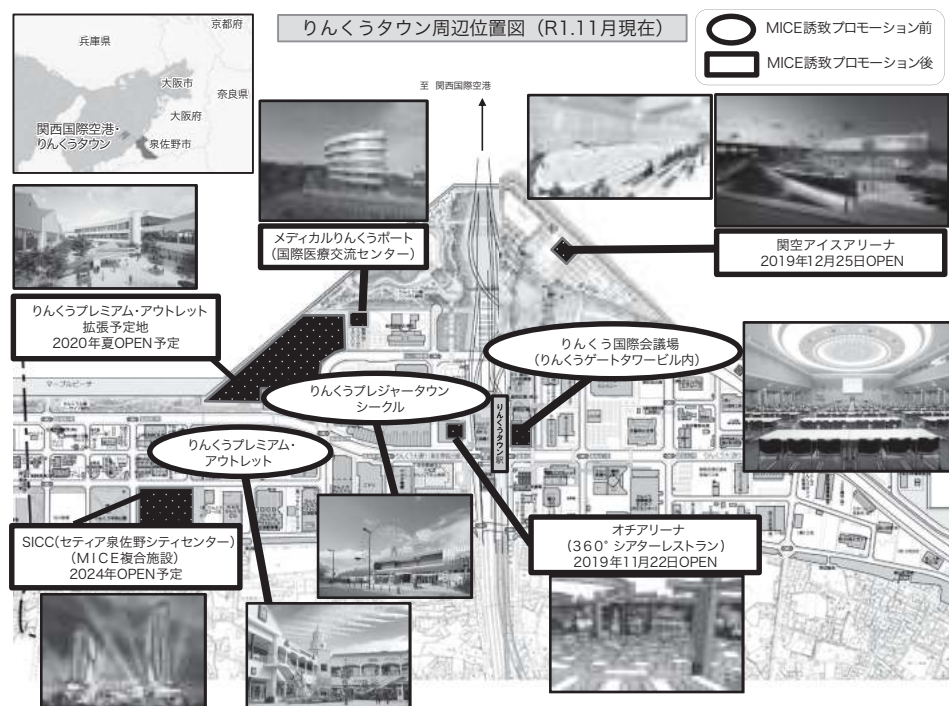


図6 「りんくうタウンのMICE関連施設分布図」（市成長戦略室作成）

岸和田ウォーターフロント「再生」

立命館大学名誉教授
COM計画研究所代表

高田 昇

■岸和田ウォーターフロント再生の背景

岸和田市は大阪府南部の泉州地域にあって、明治以来、日本でも有数の紡績地帯として発展してきた。さらに、臨海部では全国的な木材需要に対応するため、1966年に木材コンビナートを建設し、さらに同年、市独自で沿岸部の埋め立てを行い、大阪鉄工金属団地を建設し企業誘致を進めた。その後、商港機能の拡充を図り背後都市の生活環境の改善に努めてきた。

そして、施設の老朽化等により港湾機能が低下していた岸和田旧港地区において、約19.5haを対象に大阪湾環状都市構想（大阪府新総合計画より）の拠点地区として、また、岸和田市の海の玄関としてふさわしい地区づくりをめざして『歴史、文化とウォーターフロントの再生』をテーマに岸和田旧港地区の再開発を行ってきたのである（図1）。

この事業に至るまでには、行政はもとより、市民や商工団体等が時間をかけて旧港を取り巻くまちづくりのあり方を研究し、協議を積み重ねてきた経過がある。その成果として、1987年「水辺におりなす“港と城・祭のまち”21世紀へのふれあいステージ」としてのビジョンが確立された。

■「再生」の経過

1985年12月の港湾計画、埋め立てと並行して岸和田漁港等の既存施設が阪南1区へ移転、

※ 図の出典はいずれも「岸和田旧港地区周辺の魅力づくり構想」

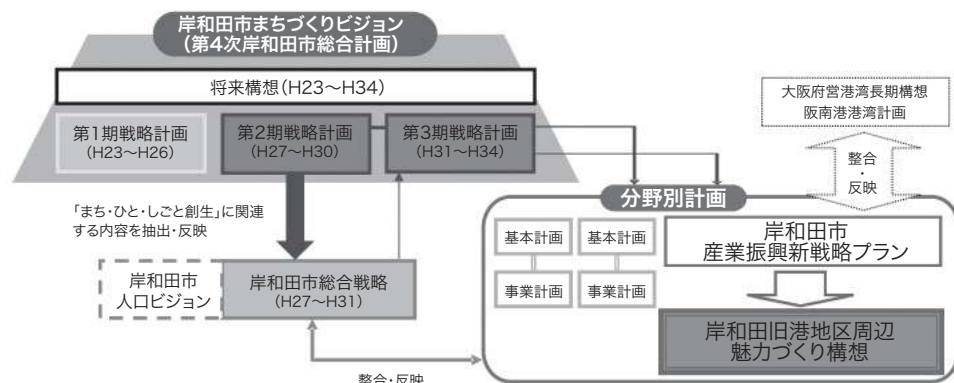


図1 各計画との関係



図3 既存市街地との連携

1993年2月の市街化区域編入・再開発地区計画の都市計画手続きを経て、1997年3月に新たな都市拠点として、岸和田カンカン（商業施設東館・核テナント「イズミヤ」）開業後、商業施設や住宅、文化施設、緑地など総合的なまちづくりを進め、新たなまち「アクアヴェルデ岸和田（旧港地区全体の愛称）」として誕生した。

1998年10月にスポーツドーム岸和田が開業、1999年9月に岸和田カンカンベイサイドモール（商業施設西館）が開業、同年シネマコンプレックス「ユナイテッドシネマ」がオープン、2002年4月には国際・文化施設「岸和田市立浪切ホール」がオープン、2003年9月にハウスウェディング施設「リヴァージュブラン」が開業するなど、臨海部の都市拠点として発展してきた。

■旧港「再生」の波及

その後、周辺に商業施設や大型店の開業が

相次ぎ、来訪客数の減少が顕著に見られるようになる。2000年11月りんくうアウトレット。2004年11月イオンモールりんくう泉南。2008年3月アリオ鳳。2014年10月ららぽーと和泉。2010年8月スポーツドーム岸和田が撤退し、大きな空き地が出来る。2015年12月岸和田カンカンの核テナント「イズミヤ」が撤退し、追隨したテナントの撤退による空洞化が懸念されている。

一方、2015年8月には隣接部において、「地藏浜みなとマルシェ」など新たな地域活性化イベントの試行実施、11月には岸和田カンカンの臨海線をはさんだ山側にコープが開業している（図2）。

■都市再生としてのウォーターフロント「再生」

このような経過を辿りつつ、また10年程前から他都市同様に人口減少に転じる中でも、マイナス面の克服、プラス面の活用を試み、



- ①業務ゾーン
既成市街地と連携した業務や生活利便施設など都市型住居に付帯するサービス機能の充実を図る
- ②商業・業務ゾーン
既成市街地と連携した商業核を形成するとともに、臨海部の活性化及び高度化を図る。
- ③都市型居住ゾーン
水と緑豊かな環境に包まれた魅力的な住環境を維持・保全する。
- ④スポーツ・レクリエーションゾーン
にぎわいのある親水空間の創造と周辺の水と緑豊かな環境と調和したスポーツ・レクリエーション施設など港湾関連の福利厚生機能の誘導を図る。
- ⑤文化・交流ゾーン
優れた交通ネットワークを活かし、宿泊機能を導入し浪切ホールを中心とした文化・国際交流拠点の形成を図る。
- ⑥連携業務ゾーン
漁業振興ゾーンなど、隣接するゾーンと連携する機能の導入により、本地区の活性化及び高度化を図り、にぎわいを創出する。
- ⑦漁業振興ゾーン
漁業関連施設の充実により漁業の振興を図る。
- ⑧物流ゾーン
優れた交通ネットワークを活かした物流拠点の形成を図る。

図2 整備イメージ図（ゾーニング）

今日に至っている。

ある意味、所謂「りんくうタウン」周辺や大阪湾ベイエリア周辺における単機能型で自己完結型の機能ではなく、また「完成形」の街づくりではなく、既存市街地と繋がりがつつ生きている街、成長する街として、本来の都市再生を持続させていると言えよう。

そのバックボーンとなっているのは、市が一貫したまちづくり方針である港と城、駅の活性化戦略である（図3）。

（たかだ すすむ）

神戸大学工学部建築学科卒。1970年12月COM計画研究所設立。1990年4月立命館大学教授に就任。その間、各地のまちづくり事業にプランナー・コンサルタントとして業務にあたる。主な著書『ライフスタイル・ガーデニング（創元社）』『都市再生・街づくり学（編・創元社）』『まちづくりフロンティア（オール関西）』『コーポラティブハウス（学芸出版）』『まちづくり実践講座（学芸出版社）』他。

居住

居住の側面から みたベイエリア ～大阪市・南港ポート タウンの取り組みから～

株式会社地域計画建築研究所
（アルバック）

絹原一寛

万博・IRが注目される大阪ベイエリアにあって、高度経済成長期に建設されたニュータウンがあることはあまり知られていない。内陸部の市街地環境の悪化に伴い、海へと延びる新しい理想郷としてベイエリアの開発が複合的に進められ、居住エリアとして南港ポートタウンが建設されたが、オールドタウン化など課題が顕在化している。昨今の目まぐるしいベイエリアの動きを背景に居住の側面から論じてみたい。

■南港ポートタウンの概要

南港ポートタウンは咲洲の中央部に位置する面積約100ha、計画人口約40,000人のニュータウンで、大阪市が事業主体となり昭和52年に街びらき（図1）。中心部にはショッピングセンターがあり、核テナントのスーパーや商店が近隣の生活を支えている。市内とは思えないほど豊かなボリュームの緑と広い道路・公園、車両通過を制限するノーカーゾーンが特徴といえ、非常に素晴らしい居住環境を有する（図2）。

一方、人口は平成2年の32,036人をピークに減少の一途を辿り、直近の国勢調査では20,868人、高齢化率も31.3%。共同住宅のみで占められており住宅の更新が起こっていないことも起因し、とりわけ15～29歳の若年層の転出が顕著である。

■咲洲ウェルネスタウン計画と再生へのアクション

こうした状況に危機感を持ち、大阪市は再生への取り組みに着手。ポートタウンの持つ資産を最大限活用し、心身ともに健康でいきいきと暮らせるまちを目指した「咲洲ウェルネスタウン計画」を策定。住民組織として「咲洲まちづくりプロジェクトチーム」を組織化し、将来像の議論とともに協働による具体的なアクションに着手した。

南港住民が普段から享受している豊かな暮らしにフォーカスしたまちの情報発信として、



図1 南港ポートタウンの位置

ポータルサイト「ナンコウスタイル」の立ち上げ、プロモーション動画の作成や、フォトピクニックの開催、SNSによる投稿などを住民の手で実践。さらに区の事業として地域の魅力を対外的に発信する「ファミフェス」を開催。加えて、港湾局が所管する緑地を活用し、南港に欲しかったが十分ではなかった高感度の手づくり雑貨やこだわりの食品などのコンテンツを扱う出店者を集めた「NANKO

DIY MARKET」を開催。現在では2ヶ月に1回の頻度で開催、子育て世代を惹きつける場になっている（図3）。

これら一連の事業は、南港に生まれ育った若年代が中心となって取り組んでいる。大阪への好アクセスもあってかデザイナーやクリエイターほか多様な人材が地域に居住しており、現在ではその輪も大きく広がってきた。これら住民の取り組みと並行する形で、大阪

市は先進的教育の観点からまちづくりを後押し、平成30年4月に施設一体型小中一貫校を、また、翌31年4月には日本初の公設民営による新たな中高一貫校「水都国際中学校／高等学校（国際バカロレア導入予定）」を相次いで開設した。

■居住も含めたグランドデザインの再構築へ

隣接するコスモスクエアは駅前での住宅供給が続いたものの、事業用地は長らく未着手の状態であった。しかしここに来て万博・IRへの期待感の高まりから土地動向も大きく変化しつつある。これを機にベイエリアの将来のあり方、グランドデザインが再考される機会としたい。

南港ポートタウンは都心型・郊外型を脱皮した新しい住宅地として建設されたが、閉校となった高校敷地の活用や老朽化したショッピングセンターの更新の動きは見えていない。かつてベイエリアは複合都市として構想されたが、現在の動きは南港ポートタウンに隣接する夢洲や鉄道などインフラが先行しているが、南港ポートタウンのまちの動きも出つつある。

どのように居住も含めた次世代型の複合都市として再生、リ・ブランディングを図るか。これからは大阪港エリアなど周辺とも呼応した居住形態や住民構成の多様化も期待される場所である。住民側の力強いソフトの動きとも連動した共同住宅や商業施設、インフラの計画的な更新・誘導や、新しい移動手段の確保が必要であり、それらを包括的・戦略的に実現するまちの経営体制（ガバナンス）も大きく変えていくべきであろう。

（きぬはら かずひろ）

2002年3月大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻修了、同4月に（株）地域計画建築研究所（アルバック）入社。都市・地域プランニンググループ、チーム長、技術士（建設部門・都市及び地方計画）、一級建築士。専門は都市計画、都市デザイン、低炭素まちづくり、エリアマネジメント。主な業務実績として、うめきた2期区域のまちづくりの方針作成支援、南港ポートタウンの緑地を活用したエリアマネジメント支援、ミナミ御堂筋沿道の地権者組織運営・エリアマネジメント支援、大阪府・商店街等エリア魅力向上モデル事業支援など。その他、関西道路研究会・魅力部会事務局、関西地域創生研究会事務局など。



図2 南港ポートタウンの写真
（左上・豊かな緑の道路）（右上・集合住宅と緑地）（左下・商業施設）（右下・ノーカーゾーン）



図3 ナンコウDIYマーケット

モビリティの再生

～LRTという可能性～

関西大学経済学部教授

宇都宮 浄人

近年、バイエリアの交通機関の利用者が増えている。海外からの観光客やLCC利用客の増加が背景にある。また、2025年の万博開催に合わせ、大阪メトロの夢洲延伸が見込まれるほか、2031年には地下鉄なにわ筋線も開通し、バイエリアの交通網はさらに充実することが見込まれる。しかしながら、訪れる人、住む人のことを考えたとき、現在の公共交通システムは、そうした人のモビリティ、つまり移動の選択範囲や可能性をしっかりと支えているだろうか。

■モビリティという課題

関西空港にきた外国人は、まず、さまざまな交通事業者があることに戸惑う。事業者単位に案内があり、切符も運賃も異なる。複数の事業者を使えば、金額が加算される。欧州では、こうしたばらばらの仕組みが改められ、

サービスや運賃の統合が進んでいる。

このような日本の現状は、住民のモビリティにも影響する。通勤定期代の支給を受けているうちは、運賃はさほど気にならなくとも、退職してからはそうはいかない。バスから乗り換えて鉄道に乗ると運賃が高くなり、地下鉄に乗り入れればまた運賃が加算される。交通費が高ければ、外出意欲も失う。さもないと、自家用車で移動に頼ることになる。実際、そうした自家用車依存はバイエリアでも高い。そのことが、バス利用者の減少、そして事業者によるサービス削減という悪循環をもたらす。

バイエリアは幹線鉄道が発達しており、高速道路の建設も進んだ。しかし、幹となる大動脈だけでは体は機能しない。毛細血管まで血が行き渡って、初めて健康な体となる。むしろ、自家用車が運転できれば、さほど問題にはならない。しかし、高齢化が進む中で、自家用車に頼れない「交通弱者」が着実に増加している。住民のモビリティは低下しているのが現状である。

来訪者の受け入れという意味でも、モビリティは課題である。動脈に沿った都心や有名観光地は確かに便利である。しかし、繰り返し訪れたくなるエリアであるためには、さらに行動範囲を広げてもらい、エリアの本当の魅力を知ってもらう必要がある。そのことが、新たな交流と経済活力を生むことにもなる。

■今後の展望

動脈から毛細血管まで、交通システムを統合し、一つのサービスとしてモビリティを提供するMaaS（モビリティ・アズ・ア・サービス）が、

ス）が、昨今、注目されている。日本ではスマホのアプリを用いた予約・決済という側面が強調されているが、本来は、サービスや料金を統合し、自家用車に頼ることなく、ドアツードアで移動できるようにするものである。これからのモビリティを考えると、バイエリアも、欧州のように、事業者の違いや鉄道、バスといったモードの壁を乗り越えた一つのサービスの提供が求められる。つまり、真の意味でのMaaS、「バイエリアMaaS」の構築である。例えば、一定のゾーン内であれば、大阪メトロと大阪シティバスは、同じ運賃で乗り換え自由という仕組みである。

ただし、そうしたサービスが機能するためには、接続する公共交通がしっかりしている必要がある。アプリで検索・決済できても、バスの本数が少ない、渋滞でなかなか来ないのでは意味がない。その点、筆者は海外で普及している次世代型路面電車（LRT：Light Rail Transit）の活用を展望したい。渋滞に巻き込まれず、バリアフリーのLRTは、住民に高品質のモビリティを提供する。また、来訪者にもわかりやすいLRTは、インバウンド観光客が地域に入り込む機会を提供する。例えば、三宮駅に降りても神戸港に行けない、堺駅に降りても、街中や古墳群に行けない、和歌山駅に降りても和歌山城に行けない、というのが現状であろう。

幸い、神戸、堺、和歌山の各市は、いずれもLRT計画の議論を公式に行っている。バスより輸送力もあるLRTは、バスの運転手不足という課題の解決にもつながる。道路空間の再配分が必要だが、クルマ優先という20世紀型の発想は捨て、新時代のバイエリアのモビリティという観点から、これら計画の実現が期待される。

（うつのみや きよひと）

1960年 兵庫県生まれ

日本銀行勤務を経て、2011年4月より関西大学経済学部教授（2017年4月～2018年3月：ウィーン工科大学客員教授）。専門は交通経済、経済統計。主な著書に、『地域再生の戦略―「交通まちづくり」というアプローチ』（ちくま新書、第41回交通図書賞受賞）、『鉄道復権』（新潮選書 第38回交通図書賞受賞）、『路面電車ルネッサンス』（新潮新書、第29回交通図書賞受賞）、共著に『フランスの地方都市にはなぜシャッター通りがないのか』（学芸出版社）、『LRT』（成山堂）、『世界のLRT』（JTBパブリッシング）、『経済統計の活用と論点』（東洋経済）など。



阪堺電軌の次世代型路面電車、「堺とらむ・茶ちゃ」

大阪ベイエリアの 現状・課題と展望

～豊かで安心な海を～

大阪市立大学大学院工学研究科教授

重松孝昌

大阪湾の現状に関心を持っている人はそれほど多くはない。それ故に、大阪湾がどのような状況であるかを知っている人は多くはないであろう。「大阪湾のイメージは？」と問われると、「きたない」「くさい」「生き物がいない」などと答えるものの、実際に大阪湾のそのような状況を見たことがある人はほとんどいない。自分たちの生活とは無縁なところに大阪湾が存在する、あるいは大阪湾のことなんか考えたことなかったという感覚ではないだろうか。まずは、大阪湾の環境の変遷と現状について簡単に紹介するとともに、私たちの生活と大阪湾の環境との関わりについて記しておきたい。

■大阪湾の環境の変遷と現状

かつての大阪湾は、「魚庭（なにわ）の海」と呼ばれる魚貝類の宝庫であった。図1は、大阪府の漁獲量の推移を示している。1980年代をピークとして減少傾向にあることがわかる。高度成長期には大阪湾がどんどん汚くなったと言われることが多いが、漁獲高は年々増加傾向にあったことは事実である。1990年以降は、貝類や魚

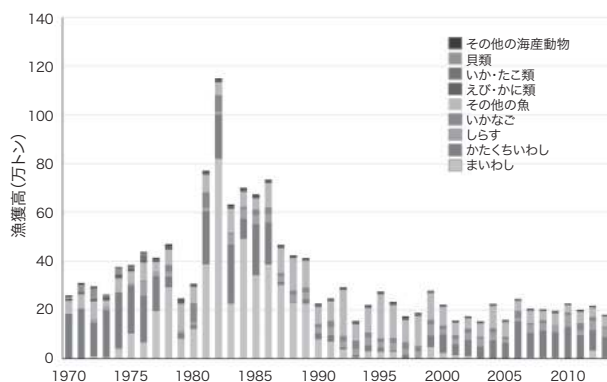


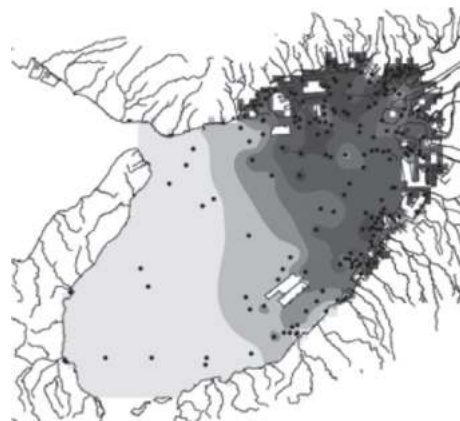
図1 大阪府の漁獲量の推移
（（独行）大阪府立環境農林水産総合研究所に加筆）

類の漁獲が著しく減少していることがわかる。

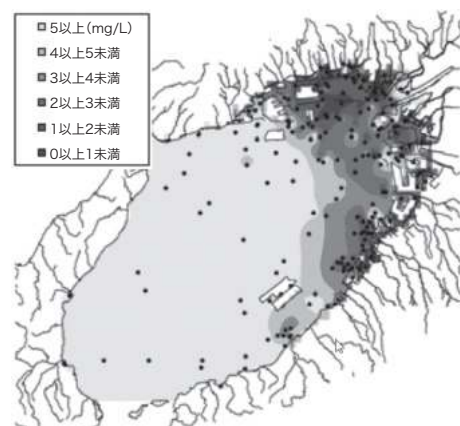
このような漁獲の変遷には、私達の家庭からの生活排水や工場などから排出される栄養塩（特に、窒素やリンなど）が過度であったこと、すなわち、富栄養化が原因であるとされてきた。過度な栄養塩が海に流入すると、植物プランクトンが異常発生（赤潮）して魚類の生存に影響を及ぼすとともに、死滅して海底に沈積した植物プランクトンが底生生物に分解されて水中の酸素が消費されて少なくなる（貧酸素水塊）。その結果として、特に夏季の大阪湾奥部の港湾海域では、数ヶ月にわたって生物が生息できない状態となる。このような状態が数年にわたって継続すると、気象条件によっては海が青白く染まる青潮と呼ばれる現象が発生することがある。青潮は、一見するときれいな海と目に映るかもしれないが、毒性の高い硫化水素を含む海水で、生物の大量斃死をもたらす危険な状態である。

このような貧酸素水塊の発生には、富栄養化だけでなく沿岸域の地形が大きく影響している。昔の大阪湾沿岸域は遠浅で、多くの人が至る所で潮干狩りや海水浴を楽しんでいた。しかし、高度成長期になると浅場を埋め立てて人工島が造成され、大型船が着岸できるような港湾施設が築造されるようになった。浅場の喪失によって、太陽光が到達する海底が少なくなり、稚子魚や貝類・甲殻類の生息の場であった海草群落や藻場が激減し、これによって大阪湾固有の生物が減少し、浄化機能の低下を招くこととなった。また、潮の干満や波の襲来に伴って海底に酸素が供給されていたが、この機能も劣化することとなった。このような状況の打開策のひとつとして、下水処理施設の機能を充実させ、海域への栄養塩

の放出量を抑制する施策がとられた。効果は徐々に現れつつあり、夏季の貧酸素水塊の広がりも徐々に縮小しているように見受けられる。



(a) 2006年



(b) 2016年

図2 夏季溶存酸素（DO）の分布
（大阪湾水質一斉調査結果）

■今後の課題や展望

その一方で、最近では魚介類の量が極端に減少しており、その理由のひとつとして、海域に流入する栄養塩が少なくなり過ぎているとの指摘がなされつつある。ノリの生産量や貝類の減少傾向が続いており、海の栄養不足を示す状況証拠は揃いつつある。しかし、私たちは、海の適正な栄養塩濃度に関する知識をまだ十分には持ち合わせていない。モニタリングの頻度や項目を増やして、海健康診断の質向上を図る必要がある。収集されている気象情報の量と比較すると、海の情報量は極めて少ないのが実状である。

私達の活動が大阪湾に及ぼす影響は、栄養塩を通してだけではない。

図3は、大阪湾の表層温度と大阪市の気温の経年変化を示したものである。同図（a）中のⅡ類型、Ⅲ類型、Ⅳ類型とは、それぞれ、大阪湾南部海域、中央海域、湾奥部海域を示している。同図（a）によれば、大阪湾の表層

水温は年々高くなる傾向を示しており、湾奥部ほどその増加の割合は高くなっていることがわかる。さらに、湾奥部の表層水温の上昇割合 $0.0337^{\circ}\text{C}/\text{年}$ は大阪市内の気温の上昇割合 $0.0306^{\circ}\text{C}/\text{年}$ とほぼ同じ割合であることがわかる。夏季の日最低気温は海水面温度に強く依存するとの研究例もあるように、臨界域の温度環境は海水温と密接に関係している。

一般的には、日中は太陽光を浴びて地球表面が温められるが、熱容量の差によって陸表面の方が海表面より温度が高くなり、その結果として海から陸へと海風が吹く。夜になると陸表面の温度は下がるが、海表面の温度は下がりにくく相対的に海表面の温度が高くなる。その結果として、陸から海へと陸風が吹く。この夜間に吹く陸風が海水面温度を下げる役割を担っている。しかし、コンクリートやアスファルトで覆われた陸表面は、夜間でも温度が下がりにくい。さらに、空調施設や常時稼働している電気機器類から熱が放出され、人間活動が活発になると夜間でも陸域の気温は低下しにくくなる。その結果として陸風が吹く機会が少なくなり、海水面温度も低下しなくなる。人間活動に伴って大気へ放

出される熱が海水面温度を上昇させ、海風によって暖かい空気が常に陸域へと供給され、益々、空調施設の利用が盛んになる。港湾海域のような静穏な海域では、海水の流動が少ないために、海水面の温度は益々高くなりやすい。

流動の少ない静穏な海域では、表層と底層の水が混合しないので、表層と底層の温度差が大きくなり、鉛直混合がほとんど無くなってしまう。これによって、底層に溶存酸素が供給されなくなり、前述したような夏季の貧酸素化を助長することになる。利用のための静穏性を確保しつつ、底層に溶存酸素を供給できるような鉛直混合の促進技術の開発・適用が望まれる。その解決策のひとつとして、地域熱供給システムを紹介しておきたい。

地域熱供給システムでは、海域底層の温度の低い海水を取水して臨海域の冷房・冷凍施設で利用し、発生する廃熱で取水した海水を温めた後に、海域の底層から放出する。底層から放出された海水は周りの海水よりも温かく密度が小さいので浮上して鉛直混合を促進し、表層水温の低下に寄与することになる。これによって、大気への廃熱量を抑制、表層

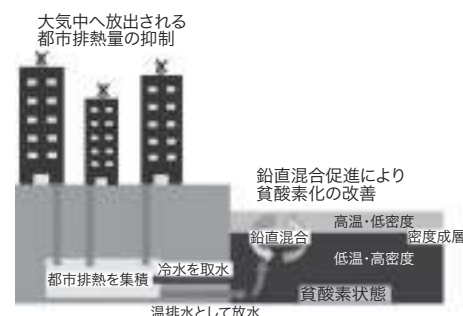


図4 地域熱供給システムの概要

水温の上昇を抑制するとともに、海域底層の貧酸素化の抑制にも貢献できる。すなわち、ヒートアイランド現象の緩和と海域の環境改善に貢献するwin-winシステムである。このようなシステムは、環境への影響を考慮した建物の機能を考えた設計をはじめ、まちづくりの有り様を根本的に考え直さないと実現できない。私達の活動が身の回りの環境にどのような影響を及ぼしているのかを理解し、どのような環境にしたいのかという将来像を描く必要があるということである。

大阪湾に限らず、東京湾や伊勢・三河湾、広島湾でも自然再生事業が進められている。大阪湾が抱える最も大きな課題は、他の海域と比較すると、圧倒的に浅場が少ないことである。前述したように、浅場の機能が環境に果たす大きさについて、我々はもっと認識する必要があると考える。そのためには、海中にある浅場も大切な国土の一部であるという認識を持つことが重要ではないかと問題提起しておきたい。同時に、沿岸域の環境は実に繊細なバランスの基に形成されていることを再認識しておきたい。ちょっとしたことで、良くも悪くも環境は変わり得るということである。臨海都市の持続可能性の考究には環境に関するさらなる科学的知見が必要である。まだまだ自然から多くのことを学ばなければならない。

(しげまつ たかあき)

1963年大阪府生まれ。
大阪市立大学工学部土木工学科卒業、同大学院工学研究科前期博士課程修了後、同大学工学部助手に着任。1999年に博士（工学）を取得。大阪市立大学工学部講師、准教授を経て現職。
専門は流体力学および河口域・港湾域・内湾域の環境評価及び環境修復技術の開発・提案。鉛直循環流誘起堤体の開発、浮体式津波避難シェルターの開発、都市河川の環境修復、港湾海域の底層酸素消費メカニズムなどについて研究。

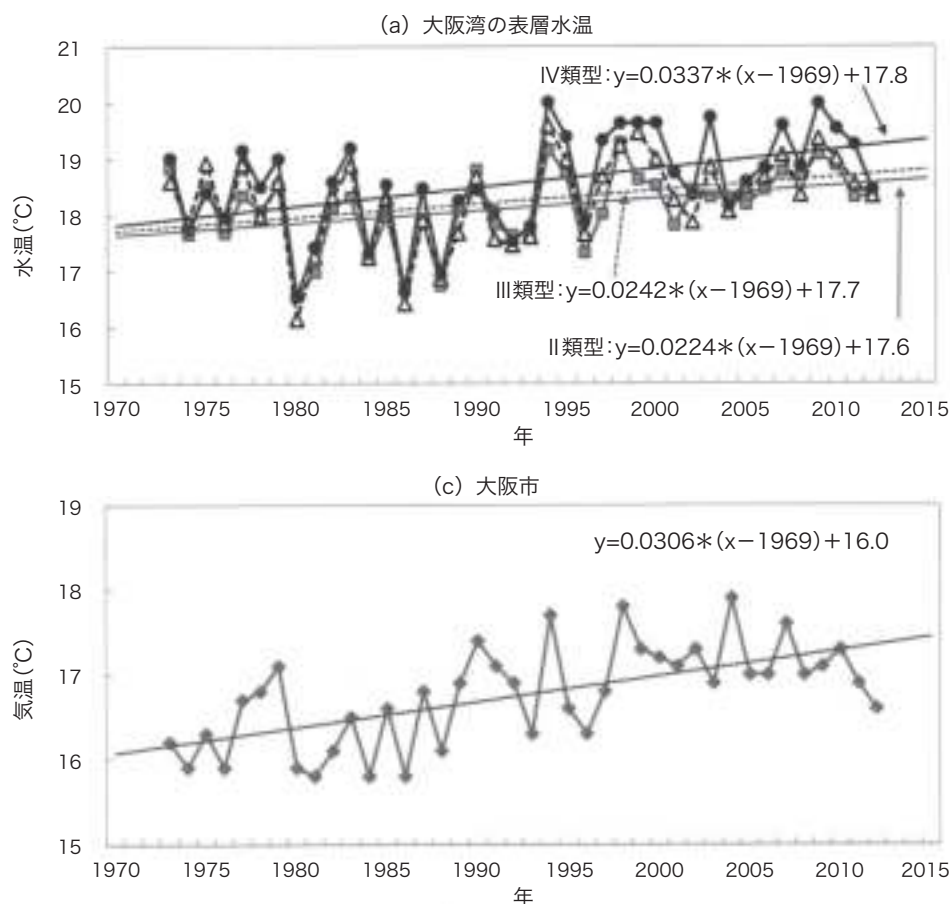


図3 大阪湾の表層水温と大阪市の気温の経年変化（中嶋昌紀氏の学位論文より）

防災研究とフューチャー・デザイン

大阪大学大学院工学研究科教授

倉敷哲生

■自然災害起因の産業事故

東日本大震災では石油コンビナート施設が大きな被害を受け、特に、大規模な津波によって油貯蔵施設から大量の油が流出し、津波火災を拡大し気仙沼市街地の全焼に至っている。このような自然災害起因の産業事故をNatech（Natural-hazard triggered technological accidents）と称する。近年、欧州を中心に活発に研究が行われ、自然災害と産業事故の間を繋ぐ新たな領域としてその研究が着目されている。Natechに対し、社会や住民の命・生活を守るためには何が必要で現実的に可能なリスク対応の解析とリスクはどこまで受け入れる必要があるのか、短期的・長期的な対応のあり方など、Natechに関する研究の課題は尽きない。

大阪湾においても可燃性物質を扱う石油化学コンビナートが集積している。大阪府では石油コンビナート等防災計画を平成28年3月に改定しており、その中で南海トラフ地震の際にコンビナート地域から流出する油量は44,000klと試算されている。これは東日本大震災で気仙沼地区に油が流出し、市街地全面火災に至った時の流出量の約4倍に相当する。

■大阪ベイエリアNatech防災研究イニシアティブ

大阪大学では「大阪ベイエリアNatech防災研究イニシアティブ」を設置し、大阪ベイエリアを対象としたNatechに対する防災・減災

を多面的に進める取組を行っている。災害の発災メカニズムの検討とシミュレーションモデルの開発や、影響伝播過程解明と統合型ハザードモデルの開発、減災防災対策（海域・陸域）や、リスクコミュニケーションの研究などが行われている。

著者らは、シミュレーション技術による被害想定および減災効果の評価を目指し、研究開発を進めている。大型タンク火災においては避難誘導や消火戦術に寄与すべく、ふく射熱評価シミュレーションによる危険ふく射熱範囲の評価を行っている（図1）。特に、水上における漏洩油の液面火災の研究例は少なく、津波火災を想定し実験（図2）・数値解析の双方から評価を試みている¹⁾。



図1 タンク火災ふく射熱シミュレーション



図2 水面での油火災実験

■リスクコミュニケーション

文科省の報告によれば、東日本大震災では、科学技術コミュニティから行政や社会に対し、その専門知を結集した科学的知見が適切に提供されなかったことや、行政や専門家が社会に対して、これまで科学技術の限界や不確実性を踏まえた的確な情報を発信できず、リスクに関する社会との対話を進めてこなかったなどの課題があると指摘されている²⁾。被害想定結果の公表やハザードマップの配布など、

自治体でのリスク情報公開に向けての取組が盛んになりつつあるが、市民レベルでのリスク認知や災害のイメージを膨らませるには必ずしも十分ではない。リスクのより適切なマネジメントのために、社会の各層が対話・共考・協働を通じて、多様な情報および見方の共有を図るリスクコミュニケーションの活動がその一助となり得る。

筆者らは「フューチャー・デザイン」を取り入れ、多様な知を集積し、視点の変化・行動変容を促すリスクコミュニケーションの場を持続的に行う仕組みの確立を目的とし、ワークショップ・デザイン、ファシリテーション・グラフィックの検討を行っている。

■フューチャー・デザイン

フューチャー・デザインとは、アメリカ先住民イロコイ族が重要な意思決定を行う際に7世代先の人々になりきって考え、物事の判断を行ってきた考え方を基にして西條・原らにより提案されている学術体系である³⁾。

例えば、2060年に我々の年齢である人々（将来世代と称する）は現在、幼少または生まれていないこともあり、2060年に残して欲しいものがあったとしても、それを表明することはできない。一方で、国の負債・社会保障費など将来世代の負担は重く、我々の今の社会の仕組みは将来世代の可能性を惜しみなく奪っている。こうした点について、「今の利得がたとえ減るにしても、これが将来世代を豊かにするのなら、その意思決定・行動がヒトをより幸福にする」というヒトの性質を「将来可能性」と定義すれば、その「将来可能性」を生む社会の仕組みのデザインとその実践を通じて、新たな社会の構築を目指す取組がフューチャー・デザインである³⁾。

■ワークショップのデザイン

フューチャー・デザインに基づくワークショップを企画するにあたり、ワークショップのデザインを構築した。1グループ4、5名程度でグループを編成し、大阪湾臨海部に面する大阪府A市を対象とし、将来の人口変化や南海トラフ地震による影響（自然災害に起因する産業事故の影響を含む）を考慮し、以下に示す前提条件を設けた課題設定とした。

【課題：貴方は大阪府A市の住民である。2060年のA市に必要な施策を提言し、自治体と共に「A市2060ビジョン（仮）」を策定することを考える。】

【前提条件：現在に比べ、2060年は少子高齢化社会であると想定（年少人口は4割減、生産年齢人口は3割減、高齢者は2割増）。また、205X年に南海地震が発生すると想定する。】

各グループで付箋紙、模造紙を用いて議論を行った。各自で様々な施策案を数多く考え付箋紙に記入する「発散フェーズ」、付箋紙を2次元マトリックスに整理する「収束フェーズ」、さらに、施策案を重要度の高い順に順位化し、上位5つの重要施策を選ぶ「決定フェーズ」を介して、グループ内の考えの「見える化」を図った。

また、参加者にはA市の市民になりきり、以下の2つの立場で2回同じ議論を行った。

【(A) 現世代グループ：現在の年齢で現代に居たまま、A市の市民として議論を行う。】

【(B) 将来世代グループ：2060年のA市の市民になりきって議論を行う。】

なお、Natechに関するリスクコミュニケーションとして2つのシナリオを想定した。

【(I) オルタナティブシナリオ：205X年に南海地震が発生し、想定内の被害予測に留まる場合を想定。】

【(II) ワーストシナリオ：205X年に南海地震が発生し、想定外の事象（特に、津波火災）に発展する場合を想定。】

オルタナティブシナリオでは、地震による津波が発生してもA市のハザードマップで示される津波浸水領域に留まることを想定している。一方、ワーストシナリオでは、A市の臨海部にコンビナート施設が集積しているため、自然災害起因の産業事故（津波火災）の発生を想定している。

■ワークショップの結果

ワークショップのアンケート結果の一部を記述する⁴⁾。ワーストシナリオに取り組んだ班で「1回目の議論と2回目の議論で提案する施策の内容はいくつ変化したか」の項目に対しては、変化した施策の数が「0」の回答はなかった。施策内容と優先順位は現世代・将来世代の立場を変えることにより視点の変

化が起きている。

また、シナリオ毎の比較として、災害関連の施策の数の変化を調査した。ワーストシナリオの場合、災害関連の施策の数は多く、ワーストシナリオを提供することで個人の危機意識やリスク認知を促すことができると考える。また、同じ班でも、将来世代の方が災害に関する施策の数は少ない。将来世代の立場の場合、時間やコストを要するが長期的に市や住民に価値のあることを考え施策を考える傾向にある。

さらに、現世代のみや将来世代のみの議論では不十分な点について調査した結果、現世代のみでは「費用を要する施策が出にくい」という回答が多い結果を得ている。長期的な視点に立つことが難しく、費用を要すると実現可能性が低くなるため優先度が低いと思われる。一方、将来世代の立場では、「費用を要する施策が出にくい」という回答は少なく、長期的な視点に立った議論が可能になっている点が示唆される。目先の利益にとらわれず、将来を踏まえた施策を考える上でも、将来世代の導入は有用であると考えられる。

■自助・共助・公助への関与

上記のワークショップを現在、フューチャー・デザインの概念を知らない大学生や、概念に精通している大学院生を対象に同様の内容で開催している。特に、若い世代にはフューチャー・デザインの親和性があると考え、現在、図3に示す高校生を対象としたワークショップにも展開している⁵⁾。

さらに、徳島県阿南市の高校生を対象に同様のワークショップを行った。ワークショップの前後に同一の質問をアンケートとして回答してもらい、集計した結果の一部を図4に示す。ワークショップ前は公助・共助への



図3 高校生対象ワークショップの光景

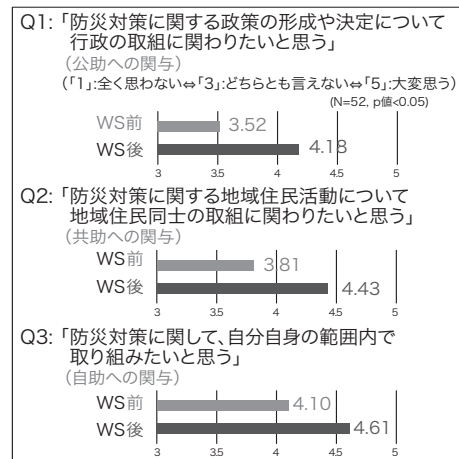


図4 高校生対象ワークショップの結果

関与の項目は低い。重要性は判っていないながらも社会的経験が浅く、イメージが湧かないことが考えられる。一方、このようなワークショップを経験した後では、将来世代の立場になって考えることにより、公助はもとより共助の重要性も認識し、アンケート結果にも大きな変化が見られている。

こうしたワークショップは今後、高校の総合学習（総合的な探求時間）における防災教育・未来教育としての教育コンテンツとしても活用できると考えている。行政の施策策定に若い層の声を取り入れるという観点からも、今後さらに研究を深掘りして進める予定である。また、リスクコミュニケーションは一過性ではなく継続して行うことに意義がある。リスクコミュニケーションのさらなる深化のために、本研究の成果を次のワークショップの企画へ反映する予定である。

参考文献

- 1) 安全・安心科学技術及び社会連携委員会（2014）リスクコミュニケーションの推進方策，文部科学省
- 2) 川北将平、倉敷哲生ら（2019）安全工学シンポジウム2019，pp.360
- 3) 西條辰義編（2015）フューチャー・デザイン，勁草書房
- 4) 立山侑佐、倉敷哲生ら（2018）工学教育，Vol.66，pp.42-47
- 5) 朝日新聞（2019）9月12日朝刊24面

（くらしき てつせい）

1971年鳥取県生まれ、1989年米子東高卒業
1993年大阪大学工学部生産加工工学科卒業
1997年同大学院工学研究科博士後期課程修了、博士（工学）
同年同大学院助手、2004年准教授
2011年ベルギーカトリックルーベン大学
Visiting Professor
2014年経済産業省製造産業局戦略調整官
2018年大阪大学大学院工学研究科教授
専門：信頼性工学・複合材料工学
URL：http://www.mapse.eng.osaka-u.ac.jp/w8/

昨年の特集「共生社会のまちづくり」では、多文化共生に向けた取り組みを行っている三つの団体にご寄稿をいただきました。今回は、バイエリアにお住まいのお二人にご執筆をお願いしたところ、ご快諾をいただきましたので掲載いたします。

■ニュータウンの開発に欠かせないもの 孝岡知子 兵庫県芦屋市 涼風町自治会元会長

兵庫県芦屋市に南芦屋浜とよばれる面積約125.6haの埋立地がある。開発途中の新興住宅地であり、無電柱化で道幅も広く住居の景観が美しいと評判である。子育て世代にも人気が高く、豊かな住宅都市としてすぐれた立地条件を有しており、定住化を図ることに期待がもてる。

しかし、驚いたことに南芦屋浜には市民が頼れる行政機関がない。ニュータウンの開発に欠かせない小学校をはじめ、地域のコミュニティの核となる公共施設がないのである。多くの子どもは本土まで橋を渡って遠距離からの通学を余儀なくされ、災害時の緊急避難場所の設備は整っておらず、防災・防犯に脆弱なまちづくりに陥っていることが次第に浮き彫りになってきたのだ。

中でもある都市設計によるミスマッチが住民を困らせている。閑静な海辺の住宅街に隣接して造られた護岸は、図らずも魚が釣りやすい形状であるため、遠方からも多くの釣り客が訪れるレジャースポットとなってしまう。そのため違法駐車やゴミの放置といったマナーの悪さがもたらす騒音や臭い、カラス被害等に住民は頭を抱えている。居住空間と目と鼻の先にこのような娯楽の場が設けられていることに不満を抱く住民も多い。またこの護岸は、「高潮は大丈夫」とこれまで言われてきたが、2018年に台風21号による高潮浸水被害が起これ、護岸の測量

ミスが後に発覚した。

そんな中、住民は2016年にゼロから自治会を設立し安心安全なまちづくりを目指して活動が続けている。幅広い層が主体性をもって参加できるようにインターネットを活用するなど、新しい方法で運営を行った結果、若い働き世代の自治会活動を可能にし、これまでのマイナスイメージを払拭させることに成功した。イベントも活発で顔の見える地域活動を通じて住民の団結力が町を活性化させている。しかし、住民の努力だけでは問題解決にも限界があるのだ。

だからこそ、都市計画の中で、この地で暮らすことになる人々の生活に思いを馳せ、将来どのような街になるのかを見通す姿勢が欠けていたように思う。一番優先しなければいけないことは、住宅都市として人々が安心して住める条件を都市計画の中で確保することではなかったのかと感じている。

(たかおか ともこ)



美化清掃活動の様子



防災訓練の様子

■大阪最南端のまち岬町 まちづくりエディター 大阪府泉南郡岬町

岬町は、大阪府の最南端に位置しており、古くから淡路・四国へ渡る海上交通の要衝として栄えてきました。また、ヨットハーバーや海水浴場など海を楽しむことができる様々な観光資源が集積しています。しかし、人口減少や高齢化率の増加等から町内にはかつてあった活気が失われつつあります。

私たち「岬町まちづくりエディター」は、海や山の自然に恵まれた魅力あふれる岬町に惹かれてやってきた移住者です。移住者の視点から、岬町



の魅力を発信し、地域における賑わいの場づくり、地域の人々との交流等、地域活性につながる活動をしています。

地域の人たちが楽しく豊かに暮らせるまちを目指すことによって、一度は途絶えた人の流れを取り戻すとともに、新たな起業や雇用創出により将来的な定住者の確保につなげ、「まちの価値」を高める取り組みを進めています。

まず、活動拠点として多奈川駅前にある元旅館でDIYイベントを開催し、「まちづくり交流館ミサキノヒトフク」を作りました。そして貸館

事業やシェアキッチンとして活用することで場の活用を図り、町内外の人たちの交流の場として、スタートアップに取り組む人々が集まり、まちづくり交流館を拠点として、関係人口増加に向けた、イベント、ワークショップ、マルシェ等を開催しています。

海辺のまち岬町に移り住んで感じたことは、豊かな海の香りが町の何処にいても感じられ、海に沈む夕日がうっとりするほど美しいことです。私たちにとって日常には欠かせない香りと景色です。また、町内の4つの漁港からは、たくさんの魚が水揚げされ、町内の定食屋さんでは新鮮な魚介類が味わえます。

今後は、町内の漁業協同組合や農園の運営に取り組むシルバー人材センターと連携しながら海産物や農産物のブランド化に向けてワークショップを開催し、新たな特産品のプロモーションを併せて展開することで、岬町の魅力を発信し、岬町への誘客ならびに地元産食材の消費拡大による地域産業の活性化を目標に取り組んでいきたいと思っています。



「建築と社会」誌

特集一覧 ●1998～2019

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州一諏訪とその周辺ー	●街並みの演出ー最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備ービルメンテナンスの立場から	●建築への証言ー'98ー21世紀に向けて	●ゆれをとめるーたえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を縛る小粋なモノの仕掛人	●大阪府都市整備局	●東海支部会員作品'99北信濃一街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法ーまちづくり・すまいづくりへの展開ー	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリアー都市空間としてのインテリア	●木とともに*	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年*	●中国支部ーしまな海道と中国地方の街づくりー	●東海支部会員作品2000中部・北信濃ー地域文化の基盤と新たな価値づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測るー測定方法と測定結果が意味するものー	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法ーパートIIー	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐーわざ、もの、こころー	●時間*	●私の空間作法ー会員作品ー ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者
2001 vol.82	●エス・ティ・ティファシリティーズ*	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●IT社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境ー近未来に向けて今できることー ●大建設ー作品特集1996ー2001ー	●建築の力 ●都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法ー会員作品ー	●第48回青年技術者 ●NHK大放送送金館・大阪歴史博物館
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局営繕部	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心 ーパート2ー	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●満町パープレィス*	●建築をささえるセンサー	●建築とボランティア	●時を超えてーサステナブルエンジニアリングの現在ー	●私の空間作法ー会員作品ー	●第49回青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋ーこの地の文化・芸術と建築ー街づくりを考えるー	●サスティナビリティー次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザインー	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョンーインテリアから発信するまちなみー	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジーー建築の主観的価値についてー	●力と楽しさつき合う方法	●私の空間作法ー会員作品ー	●第50回青年技術者 ●若手技術者顕彰50年
2004 vol.85	●大阪市住宅局	●都市緑化	●東海支部会員作品 ●愛・地球博*	●省リスクな「まち再生」	●リニューアールの技	●地域住民主体のまちづくりと支援制度	●Product Design+1	●銭湯ー心地よさを求めてー	●建築家とは何か	●巨大地震にそなえて	●私の空間作法ー会員作品ー	●第51回青年技術者
2005 vol.86	●震災から10年	●「健やか」 ●長崎医療センター	●東海支部会員作品2005 ●東海における施設づくりへの新たな試み	●建築の経済化	●住まい方の変化	●人工栽培	●次世代に伝える「木」の建築 ●「建築と社会」1000号記念	●改正建築基準法と景観緑三法	●火災から守る	●構造の過去から未来へ	●私の空間作法ー会員作品ー*	●第52回青年技術者
2006 vol.87	●都市環境デザインと参加のまちづくり	●「地方空港の時代」ーまちと共存する空港づくりー	●東海支部会員作品2006 ●十東海支部特集3部作	●都市再生の本質ー光と影のはざままでー	●変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	●身近な省エネルギーーエネルギーをたくわえ、有効利用するー	●設計図が伝えるもの	●建築物の安全・安心	●第53回青年技術者	●「セキュリティ」	●もしも…ー構造が未来へつなぐ夢ー	●私の空間作法ー会員作品ー
2007 vol.88	●光り輝く京都の景観まちづくり	●学校新時代	●東海支部会員作品2007 ●十東海支部特集3部作	●創立90周年記念ーこの10年、これからの10年	●あそび考	●こだわりの設備と空間の移り変わり	●住まいの設備と空間の移り変わり	●建築系雑誌が伝えるもの	●建築基準法等大改正	●第54回青年技術者	●ガラスを考える	●楽しい構造の世界
2008 vol.89	●私の空間作法ー会員作品ー	●PFI事業、その後*	●東海支部会員作品2008 ●十東海支部特集3部作	●まちづくり2011年宣言	●新ホテル物語	●設備に役立つ地震対策	●中国地方を歩いて見えるもの ●小林聖心女子学院	●建築と景観	●第55回青年技術者	●木造住宅を巡って	●建築においてROBOTが活躍する日は来るのか？	●自然と戦う構造
2009 vol.90	●私の空間作法ー会員作品ー ●京阪電車中之島線ー新駅舎の設計と建設ー	●水の都にぎわいのある未来に向けて	●東海-TOKAI オムニバス	●楽しい福祉	●体感するインテリア	●建築空間が求める空気環境(空気質)	●建築と水	●実用レベルで展開される施工管理のIT化	●第56回青年技術者	●地域の歴史資産を活かしたまちづくり	●第16回会員作品特集“私の空間作法”	●構造家日記ー頭の中をのぞいてみたー
2010 vol.91	●創業110周年記念特集 ●NIKKEN SEKKEI	●建築とエコ技術	●東海支部復活50周年記念号 東海-TOKAI オムニバス	●食と建築・都市	●ホスピタリティのあるケア空間	●太陽光発電	●建築と石	●再生・受け継ぐ・繋がる*	●第57回青年技術者	●建築ストック社会の形成への展望	●LED照明の活用・将来を考えるー人・地球への思いやりー	●東京スカイツリー
2011 vol.92	●「100年」を第一目標にスウェーデン建築家・スウェーデン建築家・スウェーデン建築家 ●第10回 会員作品“私の空間作法”	●BIMは設計を変革するか？	●東海支部復活50周年記念号 東海-TOKAI オムニバス	●まちなかのサードプレイス	●変遷する“身の置きどころ”	●ECOー建築設備が出来るECO技術ー	●建築と土	●鉄道駅に注目する	●第58回青年技術者	●火災に強い建築を考える	●コンクリートという素材	●構造教育と社会
2012 vol.93	●自然災害に立ち向かう力を求めて	●今、私が思う「和」	●東海支部特集	●第18回 会員作品“私の空間作法”	●中国市場に挑む	●ZEB ネット・ゼロエネルギービルを目指してー低炭素社会の実現に向けてー	●建築と窓	●巨大地震に備える	●第59回青年技術者	●超高齢社会に求められる住まい	●歴史的建造物の保存活用	●身のまわりの「世界」の「構造」を探る
2013 vol.94	●東畑建築事務所創立80周年 ●U-35のまなざし ●脱成長の時代を考える	●“らしくない”空間 ●小特集 ●中之島フェスティバルタワー	●東海支部特集 ●小特集 ●「ABENO REBORN」	●第19回 会員作品“私の空間作法”	●コミュニティの“かたち”ー人と人とのつながりを再考するー	●無駄から見える節電	●第60回青年技術者	●グランフロント大阪	●素材としての建築	●建築に携わるものに求められること	●木の街をつくる	●実験
2014 vol.95	●エリアマネジメントの展開に向けて	●融合する空間ー新たな試みー	●東海支部特集 ●小特集 ●「ABENO REBORN」	●第20回 会員作品“私の空間作法”	●オフィスの設備の変遷とこれから	●オフィスのこれから	●第61回青年技術者	●建築と時間	●省エネ・低炭素のこれまでとこれから	●大阪・上町台地あべのハルカス ●複雑・高度化する建築とその技術について	●でっかいものはすごいぞ	●安井建築設計事務所90周年
2015 vol.96	●フォー・オールの時代に向けて	●場をつくるープログラムの挑戦ーリノベーションのリアル	●支部復活55周年記念 東海支部特集	●第21回 会員作品“私の空間作法”	●あかり・文化・創造	●これからの学びのかたち	●第62回青年技術者	●建築の価値	●空き家と向き合う	●職人がいなくなるものー2015年ーに備えて	●形態にあらわれた構造	●「図面」を変えるーBIMの深化が誘う建設プロセスの変革ー
2016 vol.97	●都市の記憶をたどって	●非日常の棲み処ー寝泊まりの進化	●東海支部特集	●第22回 会員作品“私の空間作法”	●人の移動・物の移動・情報の移動	●第63回青年技術者	●おもてなしと建築	●UR都市機構西日本支社ー暮らし輝く先駆者のまちづくり	●人口減少社会のまちづくり	●見えないものを語るー新たな技術による施工管理・検査システムへの展開ー	●構造を支える人と技術のつながり	●ボーダレスー消失する境界と拡張する領域ー
2017 vol.98	●ニュータウンから学ぶこれからの「計画」	●第23回 会員作品“私の空間作法”	●日本の「建築と社会を繋ぐ」プロジェクト100	●東海支部特集	●建築設備の伝統と革新	●第64回青年技術者	●100年前の建築、100年後の建築ー意匠・空間の視点からー	●観光立国を目指した宿泊施設について	●安全安心な木造建築物の利用促進への取り組みと今後の可能性	●山と建築ーそこに山があるから登るのだ！ー	●関西で木と生きる	●時間軸に挑むウィークエンドー時をデザインするーということ
2018 vol.99	●東畑建築事務所創立85周年 ●温泉と暮らし	●第24回 会員作品“私の空間作法”	●東海支部特集	●働き方と価値：社会に繋がる多様なワークスタイル	●スポーツイベントを支える設備技術	●第65回青年技術者	●第1回片岡安貴(日本建築協会論考コンクール)募集テーマ「建築と社会」ーその関係を探るー	●平成と建築	●安全安心な木造建築物の利用促進への取り組みと今後の可能性	●山と建築ーそこに山があるから登るのだ！ー	●重さと関わる	●こだわりの空間料理人
2019 vol.100	●共生社会のまちづくり	●第25回会員作品“私の空間作法” ●京都支部創立70周年記念特集「京都とまちづくり」ー未来を創造ー	●東海支部特集「社会と建築」という流れ	●建築と社会を繋ぐプロジェクト	●建設業2.0ー価値・意識・生産性ー	●第66回青年技術者	●第2回 片岡安貴(日本建築協会論考コンクール)募集テーマ「建築と社会」ーその関係を探るー	●建築の仮設性と恒久性	●「災害。逃げる」	●新素材の可能性ー材料の高性能化とハイテク素材ー	●最先端技術と社会	●オープンマインドな空間

6981、FAX 06-6946-6984) まで。
販売価格は2019年9月号までは1,230円、
2019年10月号からは1,254円(税込・送料別途)。

「建築と社会」と改題し、今日に至っている。
取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、
日本建築協会事務局 (TEL 06-6946-

*は欠号

魅力ある観光まちづくり

奈良市歴史的建築物の建築基準法適用除外に関する条例

徳岡健治

奈良市観光経済部奈良町にぎわい課長

背景

■奈良町の現状と課題

奈良町は、江戸中期に形成された街区構成とともに、幕末から戦前にかけて敷地の間口いっぱいに建築された、奈良格子、虫籠窓（むしこまど）といった伝統的様式を持つ町家が多く残っており、当市の貴重な歴史的景観資源となっている。歴史的文化遺産にかこまれた環境の中で、普段の生活が営まれ、伝統産業、文化が継承されてきており町全体が生きた文化財ともいえる。近年は、観光客も国内だけでなく世界各地から多く訪れるようになった。

しかし、自主条例に基づく町並み保存の規制・誘導は必ずしも徹底されていないため、町家等の歴史的な建造物が取り壊され、表面上修景された新しい町家風の建物が増加した。一方では、駐車場化や空き地化し町並みの質感の低下を招いている。今後、歴史的な建造物の老朽化や世代交代が進むなかで、この傾向はより一層助長されてしまう恐れがある。

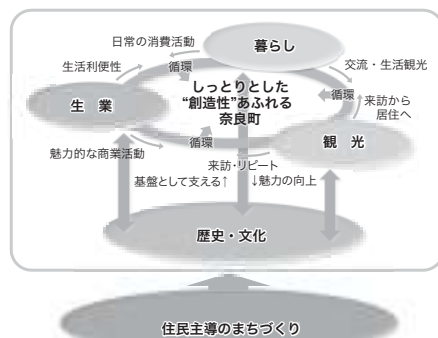
このことから、修理・修景補助制度の内容や位置づけの見直しのみならず、それらの制度の周知や運用体制の整備、地域住民の意識啓発等による協働による景観づくり等も含め、奈良町の町家・町並みの保存のための方策を総合的に見直していくことが求められている。

■新奈良町にぎわい構想

昭和50年代から展開されている奈良町のまちづくりは、平成4年の「ならまち脈（にぎわい）構想」の策定に繋がり、ならまちを中心に町並みの保全・活用や観光に関する事業を展開してきた。しかしながら、まちづくりの過渡期を迎えている今、観光客の増加による観光地化は住民の生活に悪影響を及ぼし、奈良町で暮らす住民にとって「住みにくさ」を与えている。今後、目指すべき奈良町の将来像について共通認識を持ち、奈良町にふさわしいまちづくりを展開する指針となる新たな

計画として、平成29年2月に「新奈良町にぎわい構想」を策定した。

将来ビジョンは、「歴史・文化」「暮らし」「生業」「観光」のそれぞれについて、地域ごとの特徴や課題に応じた「まちづくり」を展開して、その価値を守り、育み、高めていく。そして、「まちづくり」の取り組みを原動力として、「歴史・文化」を基盤とした「暮らし」「生業」「観光」の相互循環を創り出し、奈良町の「にぎわい」を長期的視点から持続的に向上させ、歴史都市型コンパクトシティを目指す。



奈良町のにぎわいづくり イメージ

構想を具現化するため、平成30年度から当面3年間のアクションプランを策定し、①地域の伝統行事の紹介②景観保全の検討と支援③伝統的な町家の重点的な保全手法の検討④奈良町顕彰制度の創設⑤歴史・文化史料の利活用の促進⑥観光案内板・解説板、おもてなし民間トイレ等の充実など6つの事業に取り組んできた。

条例の制定

■条例制定の趣旨

新奈良町にぎわい構想実現に向けたアクションプランにおいて、景観保全の検討と支援、また町家の重点的な保全の検討に取り組む。その中で、奈良町の魅力ある観光まちづくりを進めるため、地域固有の歴史的・文化的な価値を有する歴史的建築物の活用が必要不可欠となっている。しかし、歴史的建築物は歴史的・文化的な価値を損なうことなく現行基準に適合させるための改修を行うことが難しい場合があることから、解体せざるを得ないケースが多く見受けられる。

こうした課題は、奈良町に限らず奈良市域全体の歴史的建築物の活用を促進する方策として、建築基準法第3条第1項第3号に基づき、建築基準法（以下「法」という。）の適用を除外する条例を整備することとした。

■建築審査会の同意があったとみなす

保存建築物を指定には、建築物の歴史的価値や現状変更のための措置が適切に行われるかの審査（保存活用計画の審査）を行わね

ればならない。法では建築審査会の委員は、法律、経済、建築、都市計画、公衆衛生に関する者5名とされているが、歴史的建築物の構造、防火、意匠に関しての専門家がいないので、エキスパート・ジャッジが出来ない。

このことから、法第3条第1項第3号の規定の運用について技術的助言が通知された。「歴史的建築物の保存活用が円滑に進むよう、地方公共団体が建築審査会の同意のための基準を定め、当該同意基準についてあらかじめ建築審査会の包括的な了承を得ることにより、別途、地方公共団体に設ける歴史的建築物の保存活用や構造安全性に詳しい者等により構成される委員会等において個別の歴史的建築物について同意基準に適合することが認められた場合にあっては、建築審査会の個別の審査を経ずに、建築審査会の同意があったものとみなすことができること。」とされている。しかし、別途委員会を設置すると、これまでの他都市の活用件数からすれば、費用対効果に疑問が残る。

■奈良県建築士会との連携

外部委員会を模索していたところ、奈良県建築士会において平成31年3月に歴史的建造物の活用に向け、保存活用計画の審査や技術的助言、相談業務を行うための「奈良県歴史的建造物委員会」が設立された。奈良県建築士会と連携することにより、条例制定の運用に向け環境整備が整った。

条例制定後の課題

■条例の普及

奈良市歴史的建築物の法適用除外に関する条例は令和元年9月議会で成立し令和2年4月1日施行を予定している。この条例を活用するには、保存活用計画を作成しなければならないが、他都市でも事例が少ないことから、申請されるのか未知数などがある。

本市では、平成30年4月に古民家活用の先駆者である㈱NOTE及び地銀の南都銀行と「奈良市における歴史的建築物活用に関する連携協定」を締結した。歴史的な建築物の民間主導による活用、空き家の情報共有、これまでの成功事例セミナーやワークショップの開催などについて連携する。条例の普及に向け歴史的建築物の所有者への広報だけでなく、町家バンクの普及など行政自らが条例適用可能な建築物の掘起こしに取り組まなければ、この条例が広く活用され一般化することはない。

（とくおか けんじ）

●徳岡健治

1965年生まれ。1989年摂南大学卒業。1989年奈良市入庁。

建築文化の継承—関西の保存再生の事例—

(1983年 1月号)

石田潤一郎

武庫川女子大学
客員教授

■再生事例の紹介

『建築と社会』1983年1月号の特集は「関西の建築文化を考える」であった。コンテンツは3本立てで、一つは特集と同じ表題の鼎談である。出席者は画家の小松益喜、都市計画家の玉置豊次郎、科学技術史家の吉田光邦、司会が建築史家の福田晴虔氏である。そうそうたる顔ぶれにふさわしく、談論風発、議論は実質12ページに及んだ。二つ目は「関西の建築と街なみ—その風土・21世紀への遺産・展望」について諸家へのアンケートである。回答を寄せているのは若手・中堅の建築家を中心とする16人である。

そして、三つ目の柱として「建築文化の継承—関西の保存再生の事例—」が掲載された。上二つの記事では、関西の歴史とそれがもたらした特性についてはさまざまに語られているが、建築・町並みの保存についてはそれほど言及されていない。そのため、特集の締めくくりとしてこの保存事例の紹介が現われると、多少の唐突感を覚える。しかし、冒頭の企画趣旨を読むと、前段の記事で示される関西文化の特質を受けて、その継承の建築的具体化へ読者の思いを導く布石として、この三番目の記事を設定した編者の意図が分かる。少し長いが、ほぼ全文を引用しよう。

この項は、「関西における文化の継承を、建築の立場からどのように行っていくべきなのか」を考える一つの材料とな

ることを意図してまとめている。／文化の継承とは言っても、建物の場合は物理的・機能的に寿命のあるものであり、その点では現在にもはや適応しなくなった時点で取り壊され、そこで文化的使命も終わってしまう運命にある。このことから、建築を通じての文化の継承は、建物の存続ということが一つの前提となるが、その存続のあり方にも保存と再生という二つの側面を考えることができよう。ここでは、そのうち再生という側面にスポットをあてている。／再生（リニューアル）は、現在まで存続してきた建物を現在の中で生きかえらせるものであり、建物に新たな意義を付与させつつ、現在あるいは将来へと継承させていこうとする考え方である。関西においても、近年、こうした再生に対する動きがでてきており、着実にその効をあげてきつつある。／こうした動きを背景とした、ここでは関西でのこうした再生の事例を紹介し、設計者のねらいがどこにあり、現在の中で再生された意義がどこにあるかをみている [後略]

この文章を今読んで、どういう感想をいだくだろうか？ 文化財保護法が改正されて「活用」が重視されはじめる35年前に、再生に注目しているのは早いと見る人もいよう。一方、ガラデリ・スクエア（1964年）やキャ



南京町復興環境整備（左）、六甲パインモール（上）＝『建築と社会』1983年1月号から

ナリー・マーケット（1968年）が米国で出現してから十数年後にこんな議論をしているのは周回遅れだと感ずる人もいるだろう。

この記事の歴史的位置を見定める前に、そもそもここで取り上げられた12事例を列挙しよう。①日本銀行大阪支店（再生年度：1982年、新設計者：日建設計）〔名称とデータは当記事に従う。以下同様〕、②六甲パインモール（1982年、竹中工務店）、③白鹿記念酒造博物館（1982年、大林組）、④神戸市立博物館（1982年、神戸市＋坂倉建築研究所）、⑤（魚崎郷）酒蔵地区の景観整備（1980年調査）、⑥北野町山本通地区の景観整備（1980年景観保全事業開始）、⑦南京町復興環境整備（1983年度完成予定）、⑧武庫川学院第3学舎甲子園会館（1966年、竹中工務店）、⑨同志社大学理科〔化〕学館（1977年、大林組）、⑩京都市考古資料館（1979年、京都市住宅局）、⑪中京郵便局（1978年、郵政省）、⑫今西家（今井町）角座敷（1983年、安川毅）。

このラインナップから見て取れるのは、一つには近代建築単体の再生と伝統的な街並みの景観整備とを同列に眺めていること。二つには1982年に重要な作例が次々と登場したことであろう。実はここに、この記事が書かれるに至った経緯が現れているといえるのである。

■保存再生への道のり

日本の近代建築に関する研究は1950年代後半、隆盛を迎える。だが、研究者の多くは、十九世紀的な洋風建築をかならずしも高く評価してはいなかった。そのため1950年代に国の重要文化財に指定されて保存が図られた洋風建築は、英国人技師設計の作品2件だけであった。しかし、日本の戦後復興の過程で、有名な洋風建築が取り壊される事態が次々と起きた。研究者間でも「明治建築」の評価は分裂したままだったため、日本建築学会は判断を保留して、「現在の時点では、後世の人々が評価を下せるよう、保存を図ろう」という論理を組み立てて、文化財に指定することを促進するという決議を出す。

文化財に指定しようにも、どこにどれだけ残っているということが明らかでなければ、どれを指定すべきかが決められない。そうした文化財行政側からの現存状況の把握要請を承けて、日本建築学会は1962年から日本各地で「明治建築」調査を開始する。その成果は1969年に1200件の明治建築のデータを集めた『全国明治洋風建築リスト』として発表された。これが日本で最初の近代建築のインヴェントリーとなる。この年までは、外国人建築家の作品と擬洋風建築が20件指定されるにとどまっていたが、リストの完成を受けて、は

じめて日本人建築家の作品15件が一気に指定される。一方、現地で保存できなくなった「明治建築」を移築する野外博物館「明治村」が1965年に開設され、非常な人気を博する。

1974年にいたって、有力な建築ジャーナリズムが近代洋風建築の保存をテーマとして取り上げる。『都市住宅』誌は年間テーマとして「保存の経済学」を掲げ、『新建築』は10月臨時増刊号「日本近代建築史再考——虚構の崩壊」を刊行する。そこでの論調は、それまでの価値観一すなわち様式建築は遅れて劣ったものであり、それを打倒したモダニズム建築が優れているというモダニズム的建築観をはっきりと否定していた。その上で様式建築を含めた近代の建築全体を再評価し、その保存を訴えるものであった。

また『近代建築』誌はさらに早く1973年に年間連載「歴史的環境の保存」を企画し、1974年4月には「神戸・北野町の環境保全」の特集する。そこでも異人館単体ではなく、歴史的環境の保存という視点で保存計画が提案される。

こうした潮流の中、1974年の日本建築学会は大会研究協議会に、「折衷主義建築の評価のために」を主題として建築学会が開かれる。そこでは、はっきりと昭和戦前期までの洋風建築の保存を課題としていた。この転換の理由の一つは、60年代後半以降の＜歴史的環境の保存＞＜町並み景観の保存＞の趨勢と呼応して、歴史的建築物の保存を、単体の文化財としての保存という従来のような認識に変わって、環境の要素としての建築の保護という位置づけが急激に強まったことによる。1974年研究協議会のパネリストを務めた山本学治は、折衷主義建築を評価する理由として、一つにはCIAM的近代主義批判として折衷主義の表現手法に関心が持たれていることを挙げ、二つ目には折衷主義建築が「現代日本の生活環境のなかに、数世代の定着した生活との感性的つながりをもって、広く残存」していることを挙げる^{註1}。その言葉どおり、大阪・中之島の洋風建築群、あるいは京都・中京郵便局、東京日本橋の東京銀行本店の保存問題など、洋風建築の保存は歴史的環境の継承を図る企ての中に位置を占めていた。

この転換を象徴するのが、中京郵便局のファサード保存の決定であった。そこでは三条通の街路景観を保存することが最大の目的とされたのである。先に今回取り上げた「関西の保存再生の事例」の特徴の一つとして、単体の再生と街並みの整備とを区別なく取り上げていることを挙げたが、それはここに述べた「歴史的環境」の評価という趨勢を受け継ぐものであったのである。

■1982年の開花と当惑

保存再生の実作としては、倉敷アイヴィスクエア（1974年）を一大画期として、東大工学部6号館屋上増築、日本橋東海ビル（村井銀行本店の部分保存）（ともに1975年）、東京国立近代美術館工芸館（近衛師団司令部の再生、1978年）、横浜開港資料館（1981年）などが登場する。また小樽運河の部分保存決定（1980年）、旧東京音楽学校奏楽堂の移築保存決定（1982年）を見た。むろん大阪市庁舎、大阪砲兵工廠のように解体された作品も多いが、それが激しい議論を生んだこと自体、時代の変化を告げるものであったといえよう。

当記事発行の2ヶ月後の1983年3月、『新建築』は「イメージの継承」という特集名で14作品を掲載した。いずれも、なんらかのかたちで歴史的建造物に向き合った作例である。神戸市立博物館と六甲パインモールはこちらにも掲載されている。

14作品のうち、1978年と1981年の竣工がそれぞれ1作品あるが、他の12作は1982年に完成している。つまり、1970年代を通じての建築思潮の変化が80年代初頭にいたって具体的な作品となったといえることができる。

ただ、『新建築』の特集の総論「建築的想像力の試されるとき」において長谷川堯氏は、これらの作品群の可能性を評価しつつも、そこに「ただとどしく、また時にとんちんかん」な弱点があることも指摘している^{註2}。ここでの12作品においても、そのすべてが高評価を得たわけではない。設計者の様式的素養の乏しさがささやかれもし、また煉瓦造の耐震補強技術に対する不満も多かった。

にもかかわらず、これらの成果が今日乗り越えられたとは、到底いえないのもまた確かである。これらの多くで、参照すべき作例が乏しいがゆえに、設計者は自分の納得のいくということを指標に苦闘している。そのことが生硬さをもたらすが、一方でここまでやるかという突き詰めた表情をも生んでいる。あらためて36年前のこれらの作品を見て、今日の再生事例がしばしば与条件の最適解ということにどまっていることを逆に痛感させられたのである。

註

- 1) 山本学治「折衷主義建築の評価と日本近代建築史」(『建築雑誌』第89巻第1084号、1974年)
- 2) 長谷川堯「建築的想像力の試される時」(『新建築』第58巻第3号、1983年)

参考文献

田原幸夫・笠原一人ほか『建築と都市の保存再生デザインー近代文化遺産の豊かな継承のために』(鹿島出版会、2019年)

企業理念を未来へ伝える キューブユニット

久光製薬ミュージアム

正野和司

株式会社安井建築設計事務所 大阪事務所構造部主任

はじめに

佐賀県鳥栖市に本社を置く久光製薬は、2017年に創業170周年を迎えた。久光製薬ミュージアムは、同社の歴史を後世に伝え、さらなる飛躍を目指す企業マインドの発信起点とすることを目的に計画された。基本デザインには、イタリア人彫刻家のチェッコ・ボナノッテ氏が携わっており、彼の独創的発想から生まれたインパクトのある計画を具現化することが前提条件であった。平面は基本的に4m×4mのグリッドとし、それを高さ方向でも守ることで、キューブを積み重ねたユニットをイメージしている。ガラスの箱が跳び出す彫刻ともいべき建築の実現には、構造的な工夫が必要不可欠であった（写真1）。



写真2 2階多目的ホール

構造計画

本建物の特徴は、最大4.5mの跳ね出しをもつ2階の多目的ホール（写真1の2階手前、写真2）と12m×12mの展示室（写真3）である。構造形式はRC造とし、チェッコ氏の案をベースに、各キューブの面をどのような要素で構成していくかを想定しつつ構造計画を進めていった。壁や床、開放空間など平面・立面ともにバランスを取りながら、意匠設計者と調整し最終的なプランをまとめた。

壁と床

展示室の天井裏には多くの設備系統が想定されたため、無梁のアンボンドPCスラブとし厚みを300mmとした。またPC鋼より線と交互に中空ボイドを配することで、躯体の軽量化も図った。壁厚はスラブ同様に300mmで統一し、耐震要素の確保はもちろんのこと、PC端部の定着具を納める役割も兼ねた。

多目的ホールでは、2階とR階で片持ちスラブの支持方法を変えた。2階床は下面が屋外に面するため、梁型を出さないようボイド併用の450mm厚のアンボンドPCスラブとした（図1、写真4）。R階屋根については、スラブに照明設備を埋め込む直天井を要求されたため、スラブ自体は250mm厚の在来スラブとし、逆梁形式で屋上にPRC梁を設けて支持した。その逆梁も周囲から目視できないよう、可能な限りセットバックさせている。



写真3 2階展示室

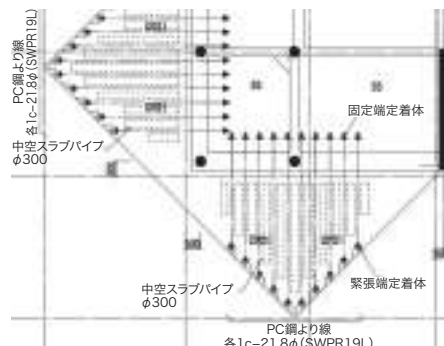


図1 多目的ホール2階伏図



写真4 多目的ホール床スラブ施工状況

ガラス

ガラスの箱という性質上、屋内への環境負荷が大きく居住性の向上を目的にLow-Eペアガラスを採用した。多目的ホールの跳ね出し部では上下のスラブ間でガラスの支持部材を留めているため、スラブのたわみや上下振動による悪影響が懸念された。そこでFEM解析を実施し、サッシ部のクリアランスや部材の支持方法を検討、納まりを精緻に決めていった（写真5、図2）。またBEMSなどの省エネ技術を取り込むことで省エネ率103%を達成し、佐賀県初のZEB認証を取得している。

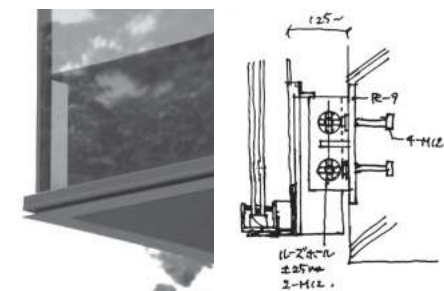


写真5 サッシ部 図2 サッシ部詳細図

おわりに

壁・床・ガラスと要素を組み合わせ、キューブを積み重ねていくことでこの建物は完成した。また建築主とボナノッテ氏、設計者、施工者それぞれの思惑が心地よく混ざり合い、庭園と自然が眺望できる開放的な空間を実現できた。その恵まれたチームワークのおかげで、末永く見守っていききたい建物となった。（しょうの かずし）

●正野和司

1983年生まれ。2008年鹿児島大学大学院理工学研究科建築学専攻修了。2008年株式会社安井建築設計事務所入社。

写真1、2、3、5はフォトトリックスが撮影



写真1 建物外観

地域の記憶の 収集と活用

～宗像市「CoCokara ひのさと」の取り組み～

九州産業大学地域共創学部
准教授

小池高史

1983年生。2012年横浜国立大学大学院環境情報学府博士課程修了。博士（学術）。専門は社会学、社会老年学。著書に『「団地族」のいまー高齢化・孤立・自治会』（書肆クラレ、2017）、『何歳まで働くべきか？』（共著、社会保険出版社、2016）、『九州地域学』（共著、晃洋書房、2019）など。

■地域の集合的記憶

フランスの社会学者モーリス・アルヴァックスは、私たちが他者との共通の記憶をもとに過去を再構成することを「集合的記憶」とよび、個人的な記憶は集合的記憶に従属するものだと言った。

われわれの思い出は集合的なものであって、たとえそれが、われわれだけが関与した出来事や、われわれだけが見た事物にかかわるものであっても、他の人びとによって思い起されるのである¹⁾

家族や親せき、学生時代の友人など、共通の記憶をもつ人たちの会話のなかで、私たちは自らの過去を思い出し再構成する。それが自分のアイデンティティにもつながっていく。

そういった集合的記憶論の延長に地域ごとの集合的記憶というものを考えることもできる。ある地域の住民に共有される記憶が、地域への愛着のもととなっており、それが失われることで地域社会の連帯も崩れてしまうといった事態が懸念される。住民の入れ替わりと新旧住民の断絶、世代間の断絶といったことがその要因になるだろう。

実際に地域の記憶をコミュニティの維持や地域社会の活性化につなげようという取り組みが各地で生まれている。本稿では、地域の記憶を収集しニュータウンの再生に活用しようとしている事例として、福岡県宗像市日の里地区における「ひのさと記憶プロジェクト」を紹介する。

■空き店舗の活用

●日の里地区

宗像市日の里地区は、福岡市と北九州市の中間に位置し高度経済成長期の両市への人口流入に対応するために、1966年から日本住宅公団によって開発された地域である。JR鹿児島線の東郷駅の南東側、217.6haの計画面積に5,000戸、20,000人の規模を目標に開発された²⁾。中央にURの集合住宅があり周囲には戸建ての住宅地が広がる。2019年3月末時点でこの地域の人口は11,826人（5,438世帯）、高齢化率35.2%となっている。

ピーク時の人口は14,000人を超えたが、1990年代から減少が始まり、人口減少や住民

の高齢化、空き家の増加、店舗の撤退といった、多くのニュータウンに共通する課題を抱えている。竣工が1971年だったため、2021年で50周年をむかえる。



写真1 UR日の里団地（1971年入居開始、1,533戸）



写真2 UR日の里1丁目団地（1975年入居開始、348戸）

●CoCokaraひのさと

日の里コミュニティ運営協議会は、2014年から「東郷駅前活性化事業計画」を進め、2016年に住民主体で地域活性化に取り組む施設として、駅前のバスターミナル内の空き店舗を活用した「CoCokaraひのさと」というコミュニティスペースを設置した。

CoCokaraひのさととは、「日の里団地再生の拠点」「若い世代を呼び込む場」「駅前の賑わいを生む場」「多様な主体が協力する場」「情報共有と発信の場」という5つの役割を掲げ、「学習ルーム」や「大人のしゃべり場」「多世代交流サロン」といった居場所づくり事業のほか、大学との連携調査や入居事業者との合同イベントも実施している。施設内には託児所と在宅看護センターも併設している。

普段は平日の10時から21時まで開館しており、ヨガ教室、ギター教室、スマートフォン教室といった健康づくり、生涯学習活動が行われ、集合住宅内の農場でとれた野菜の販売があったり、婚活支援団体に会場を提供したりもしている。教室やイベントがない時間帯には、中学生や高校生が自習する姿がよく見られる。



写真3 CoCokaraひのさと

■ひのさと記憶プロジェクト

●事業概要

このCoCokaraひのさとの事業として、2017年にはじまったのが「ひのさと記憶プロジェクト」である。まちびらき50周年にむけて、日の里地区に関する様々な記憶の収集とその活用を目指す取り組みである。このプロジェクトでは、おもに日の里地区にまつわる古い写真や映像、資料の収集（数日間借りてデジタル撮影・複製して返却）と、昔の日の里について話してくれる人を探し、聞き取りを行うことを続けてきた。

プロジェクトのメンバー構成に特徴がある。そこには、地元住民でもあるCoCokaraひのさと館長を中心に、複数の近隣大学等研究機関の研究者、地元新聞社の記者、長年日の里地区に居住してきた住民、最近入居した住民、さらに日の里地区で生まれ育った中学生も集まっている。地区内外、新旧住民、多世代のメンバーが集まり共同で取り組むことは、プロジェクトの成果だけでなく、取り組みの過程もまたまちづくりにつながる効果をもたらしている。たとえば、同じ話を一緒に聞き取るなかでも新住民や地区外のメンバーは初めて知った事実に驚き、地域に新たな価値を見出し、いっばうで旧住民のメンバーは、昔を思い出しながらともにその記憶を保存していく意義を感じる。記憶の収集の過程が今後まちづくりを担う世代の育成にも直接つながっているのである。

聞き取り協力者の募集には、知人の紹介にたよって協力を依頼したり、CoCokaraひのさと館内や回覧板で書面を配布して住民からの協力を呼びかけたりしている。すでに30名を超える人たちからの聞き取りを実施しているが、今後50名程度まで聞き取り協力者を増や

していくことを計画している。

日の里地区まちびらきから50周年となる2021年には、プロジェクトの成果をまとめた記念誌を刊行する予定だが、その後も収集した記憶を使った各種イベントの開催、教育現場での活用など地域への成果の還元を目指している。

以下に、これまでの聞き取りのなかで収集された記憶について、いくつか紹介する。



写真4 プロジェクト会議の様子



写真5 聞き取りの様子1



写真6 聞き取りの様子2

●地域のはじまりの記憶

今では住宅が立ち並ぶ街となっている日の里地区であるが、開発が始まるまでは建物もほとんどない丘陵地だった。初期に日の里地区に入居した人の語りからは、開発当初の地域の様子がうかがえる。

（公団住宅に入居したのは）いや、別に訳はないんやけども、目新しきやないですかね。われわれ団地ね、目新しい。初めての団地、アパートということで選んだんでしょね。

（その当時は）まだ周りに家もあんまり建ってないですね。一戸建てがほとんど点々ですもんね、まだ。（70代男性）

この方は日の里の近隣地区に生まれ、日の里団地が建設されると「第1期生」として入居した。子どもころ泳ぎに行った池などがあった土地にできた団地は、当時目新しい住まいとして周辺住民に見られた。ようやく最初の団地ができた当時は一戸建ての住宅はまだ点在する程度だった。

真っ暗でしたよ、ここら辺。本当に、あそこに電気があっていうぐらいの、遠い所に。こっち側のバスが通る通りは外灯がいくつかあるんですけど。だから、19日に引っ越してきて、主人たちは荷物持って先に来て、私は掃除を済ませてから、1人でここへ来たんですけど、駅の前に出たとたんに、どっち向いて歩こうって。ものすごい、本当に真っ暗で。駅前も。（70代女性）

これは、1971年に日の里地区に家建てて移り住んだ方の引っ越し当日の記憶である。当時は夜になると駅前にも街灯や店舗はなく暗く、近隣にも何軒か家が建っているだけだった。入居して数年間はぼつぼつと家ができていくだけであったが、5年ほどたったころ急速に住宅が建設され、小学校も開校し、まちに賑わいが出てきた。

開発前や開発当初の様子を写した写真とともに、こうした地域のはじまりの記憶を収集し、当時を知らない住民たちが共有していくことができている。

●日の里まつりの記憶

日の里地区の竣工から5年、開発開始から数えると10年が経った1976年から、この地域で毎年行われている日の里まつりという夏祭りがある。

この時期に地域で祭りをはじめた目的は、「日の里地区はもとより近隣の老若男女全てが参加し」「日の里に心の通い合う象徴を作ることであり、新しい日の里と伝統の融和であり、隣接する住民を一つにするものであり、こどもたちの未来にふるさとを与えること³⁾」であった。この理念を表す「新旧、近隣の融和」「子どもたちに故郷の思い出を」の言葉が祭りのスローガンとなった。

この日の里まつりは、毎年8月のお盆明け

の週末に二日間行われる。現在も続いており2019年には44回目を迎えた。日の里地区で一番の定番のイベントとなっており、住民にとってなくてはならない行事である。住民から地域の記憶の聞き取りを行っているとな頻繁にこの日の里まつりにまつわるエピソードが登場する。

7丁目はその盛り上がってましたもんね、やっぱりやろうって最初、何かをやろうってということで、若かったですよ、まだね。そして結局、じゃあみんなで行うかということになった。

そして、その場で、じゃあ神輿がいるねっていうことになって、祭りは神輿がつきものじゃないですか。そういう意見が出てきたので、じゃあ別に反対することでもないから、何か協力しようと思ってね。若かったからね。夫に、それこそ書いてって安請け合い、何でも聞いてくれると思った。何でも器用にできるんですよ。えらい無理をさせたというかね。もうそういうこと。(70代女性)

これは日の里地区で祭りをはじめようという議論が起こったころのその議論の記憶である。1975年に日の里地区に引っ越してきたこの方は、祭りの開催が決まった当時どのような祭りにするのかという町内会の話し合いに参加していた。そのなかで、神輿を作ることが提案され自分の夫に町内の神輿作りを依頼した。夫は宗像大社の神輿を見学するなどして苦労して作り上げたそうである。日の里まつり開始の経緯については、文書資料で書き残されてはいるが、当時どのような議論が起こりどのように準備が行われたのかは、当事者の記憶のなかだけに残されていた。

子どもたちが、一番思い出に残ってるのは、日の里のお祭りですね。

このとき、子どもの人数がすごかったでしょ。だから、日の里まつりが大にぎわいでしたよ。今こそ少なくなったけど、多いときは、東小学校、10クラスぐらいあったわけだ。すごかったですよ、日の里まつりは。

木のやぐらの、あの上で、「さあ、日の里おんどだーい」って言って、みんなで気合入れて、「さあ、踊った、踊った」っていうことだね。祭りは、子ども、もう大好きでしたよね。(70代男性)

1974年に日の里団地に入居したこの方は、3人の子どもを日の里で育てた。子どもたちとの一番の思い出となっているのが日の里まつりのことだったと語られた。

日の里で子ども時代を過ごした世代の語り手たちも祭りの思い出についてしばしば語ってくれる。

現在、祭りの主役となる子どもの数は減少し祭りの規模も縮小傾向にある。今後も日の里まつりを継続していくのかどうかについても議論が持ち上がっている。祭りがはじまった当初の記憶や盛り上がりを見せていた時代の記憶は、地域の祭りの意義をどう考えていくのかという議論に示唆を与えるものだろう。



写真7 第44回日の里まつり

●団地暮らしの記憶

初期に日の里地区に大人として入居した人だけでなく、この地域で子ども時代を過ごした世代にも子ども目線の共通の記憶がある。以下は日の里団地で子ども時代を過ごした人たちの語りである。

ー 棟での誕生日会みたいなのをやってたという。

A めっちゃしよった。バターケーキなんですよ。年にだって、同じ棟に子どもが、当時9人、10人。10人分のもう、毎月のように来るから、やってました。誕生会。

B 交代交代だね。

ー 基本的には子どものいる家族が集まって。

A そうです、みんなでやるんですよ。

C 俺、1回しかやった記憶がない。

A 本当？うちめっちゃくちゃしよった。

B 毎回毎回ね、中学校に入るまで。同級生を呼んで誕生会じゃなくって、団地のなかの誕生会をやるのが、当たり前なんだったよ。

ー で、ちょっとずつ年が違いうちたちが集

まってって感じですよね？

A そうですね。

(A：40代女性、B、C：40代男性)

今では団地に子どもがいる世帯は少なくなっているが、1980年代には一つの棟だけで10人も同世代の子どもがおり、毎月のように誰かの誕生日会を開いていた。普段から毎日のように団地内で同じ棟や近くの棟の子どもが集まって遊んでいた。そういった記憶が収集された。このような日常の暮らしにまつわる記憶も、今の子どもたちには驚きをもって受け止められるものだ。

●座談会と集会的記憶

この子ども時代の団地暮らしの記憶は、座談会形式で聞き取りを行った。そのため誰かの記憶が他の人の記憶を呼び起こし、忘れていた思い出が次々に現れてきた。文字通りの集会的記憶の実践であったのだが、座談会のなか、聞き取りの協力者たちは昔の話をすることを楽しんでいるようにみえた。

座談会形式の聞き取りにかぎらず、聞き取りに協力してくれた人たちは、地域にまつわる記憶を語るなかで、普段は忘れていた出来事や街の様子を思い出し、改めて地域への愛着を感じているようだ。そうであるとすれば、記憶を収集する取り組み自体が、まちづくりの一環になっているということも言えるだろう。



写真8 座談会の様子1



写真9 座談会にて（地図を見ながらかつてあった店舗について語り合う）



写真10 座談会の様子2

■ひのさと記憶プロジェクト展

2019年10月22日（火・祝）、ひのさと記憶プロジェクトは50周年イベントとして、「ひのさと記憶プロジェクト展」を開催した。プロジェクトの宣伝、写真の収集、記念誌に掲載する住民視点の年表作りなどを目的とし、CoCokaraひのさとを会場とした。

イベントの内容は、「まち歩きゲーム 日の里探し（日の里地区を舞台としたウォークラリー）」「子ども標語コンテスト」「懐かしの日の里フォトコンテスト」「日の里こども新聞作り」「みんなで作ろう日の里史（年表作りワークショップ）」といったものだった。ウォークラリーには約40組の参加があり、子ども標語コンテストには日の里地区の小中学生から約250件の応募があった。フォトコンテストにも住民から多数の応募があり、優秀作品に選ばれたものは記念誌にも掲載される予定である。年表作りワークショップでは、開発当時を知る世代、80年代に子ども時代を過ごした世代、今の10代、20代の世代と多世代のスピーカーがそれぞれの地域の記憶を語り、用意した年表に多様な生活者視点の出来事が追加されていった。

それは例えば、1969年にスーパーマーケットが開店したこと、1977年にビニールハウスを改造したプールができた多くの子どもたちが通ったこと、2015年にお土産用のまんじゅうが、2018年に地域のマスコットキャラクターの着ぐるみができたことなどであった。同じ地域で生活しながら世代によって印象に残っていることが異なり、それを多世代の住民たちで共有する場になった。また、このワークショップでは、年表とともにかつて地域内にあった店舗を記した地域の記憶の地図も作られた。



写真11 コンテストに集まった昔の写真



写真12 フォトコンテストと標語コンテスト



写真13 こども新聞づくりの様子



写真14 年表作りワークショップの様子



写真15 ビニールハウスプールの写真を見ながら思い出を語り合う

それぞれの企画を通して、実現が難しいと予想された多世代の住民による集会的記憶の実践の可能性が感じられるイベントとなった。

■まちびらき50周年に向けて

以上に紹介したように、日の里地区ではまちびらき50周年となる2021年に向けて、地域の記憶の収集が続いている。プロジェクトの今後について考えると、記憶収集の成果をまとめた50周年記念誌の作成とともに収集した記憶をどのように活用していくかが重要になってくるだろう。

ニュータウンは住宅地が一斉に開発され、同世代の住民たちが同じタイミングで入居する地域だと考えられることが多いが、実際は必ずしもそうではない。日の里地区では、開発当初に日本住宅公団が分譲した土地は約半数であり、それ以外はもともとの地主が所有していた。その後現在にいたるまで、従前地主から段階的に土地の売却がなされたため、住民の入居時期にばらつきがある⁴⁾。そのことは90年代以降の地域全体の人口減少や人口の高齢化を緩和した影響ももたらしたが、住民間で所有する地域の記憶にもばらつきがあることにもつながっている。たとえ同じ世代の住民同士であっても、地域の始まりを記憶している人もいれば、記憶プロジェクトを通して初めて知る人もいる。

ひのさと記憶プロジェクトの成果を世代間で共有していくことはもちろんのこと、新住民と旧住民の間でも共有していくことが、地域の活性化につながっていくだろう。

（こいけ たかし）

参考文献

- 1) M.アルヴァックス（小関藤一郎訳）『集会的記憶』行路社2-3、1989
- 2) 清水雄太・柴田建・橋田竜兵・菊池成朋「郊外ニュータウンにおける居住者の入れ替わりと地域の個性化—福岡県宗像市日の里地区の2エリアの比較を通して」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1199-1200、2017
- 3) 日の里区町内連合会事務局「日の里ニュース」第3号（1976年8月20日）
- 4) 清水雄太『郊外ニュータウンにおける従前地主の土地運用とその地域的影響—福岡県宗像市日の里地区を事例に』2018年度九州大学大学院人間環境学府修士論文2019

第65回 工高生デザインコンクール

設計課題／2025年のお祭り広場

【応募校数】12校 【応募作品数】97点
【締切日】2019年9月30日 【審査会】2019年10月19日 【表彰式】2019年11月9日

審査総評

審査員長 矢田 朝士

65回目となる今回のデザインコンクールは、「2025年のお祭り広場」が課題とされ、全国12校から総数97点の作品応募があった。そして、入選10点、うち最優秀1点、優秀2点が選ばれた。お祭り広場という身近なようで幅広い用途と形態の設定に対して多様な提案があり、いわゆるイベント会場的なものから、境界のないより広く地域に開こうとするものや自然との共生を試みる案、そして海洋ゴミや劣悪なビジネス環境等の社会問題を同時に解決する案まで様々であった。

傾向としては、一過性のイベント建物よりも祭りの在り方の意義に着目し、現代社会を取り巻く諸問題と絡めたお祭りや広場の運営（利用）手法など自分たちの身近な事柄としての改善策を提示する案が多く見られた。

入選3作品については、いずれも極めて完成度が高く、審査員一同が感心させられた。運営手法の設定にも無理がなく、その「器」である空間も周辺環境との繋がりを意識し、楽しく人が集まりそうなような魅力に溢れていた。アイデアコンペといえども、実施の可能性や健全性（＝バランスの良さ）を感じさせる普遍性を備えており、納得できる説得力につながったと思う。3作品とも特別強烈な造形表現に走るわけでも無く、どちらかと言うと、やや抑制された建築要素を組み合わせ、要素間、そしてその周辺環境との空間の対話を創り上げ、広がりを持った空間を意識した提案である。それが必要十分な美しいプレゼンテーションに確信をもって表現されており好感をもった。

また審査経過に関してであるが、この3作品についてのプレゼン手法や建築作品としての評価に対して審査員の間での意見が分かれ、受賞作品の評価軸について議論が白熱し、審査員にとってもアイデアコンペの持つ意義をより深く考える機会となった。

地域活性化をテーマにした幾つかの案のうち最も意欲作と言える「新米

起業家の挑戦」は、周辺との空間の操作がやや偏った印象で、人々が集い楽しむ広場の企画としての疑問は否めないのだがイベントの商業的可能性に対する大胆で魅力的な提案した力作として評価された。

広場の構成空間を建物で計画せず、あるいは最小限にとどめて、地域の環境そのものを広場に見立てて活用する提案や道空間を利用するもの、奉仕活動等からお祭り行為を起こすものなど、複数あるなか、「その日、加古川市は一つの大きなお祭り広場になる！」が選ばれた。この傾向はある意味で建築デザインからの逃げとも取れるのだが、大きな箱を造らずに地域に在るものをどう活用するかという、建築をより広く捉える今日的な視点、言ってみればプロデューサー的視点、そして対象地域の設定や、それに注がれた想いを尊重しての評価である。

その他の作品もそれぞれに、リアリティーの感じられる条件の設定、周辺環境との関係を考慮した空間の提案が説得力を持ち入選に結びついた。

応募作品には毎年のように要項違反が複数あるが、それらは最低限守られるべきことと認識し、欠落が多く見られる建築概要や立断面図等は、設計意図をより深く伝えるためには非常に重要な要素であることを理解して欲しい。また近年で初めてのことではあるが、殴り書きでかつ何も思考・設計していない作品？が複数点あった。このような稚拙な態度での応募は、コンクール及び審査関係者への侮辱と考える。応募者および学校関係者には、このような行為を以後慎むようお願いしたい。

最後に、用途そのものの設定をも問う課題の取り組み難さを乗り越えて、真摯な取り組みと多大な努力をもとにコンクールに多様な作品が寄せられたことに対して、応募者ならびにご指導に当たられた先生方に心より敬意を表します。

【審査員長 プロフィール】

1967年 京都生まれ
1992年 神戸大学工学部環境計画学科卒業
1992年～97年 無有建築工房勤務
1998年 ATELIER-ASH 設立
2007年～ 関西大学非常勤講師
2010年～ 大阪市立大学非常勤講師
2015年～ 京都工芸繊維大学非常勤講師
2018年 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科建築学博士後期課程修了。博士（学術）



【主な作品】

1998年「新芦屋の家」(大阪府)	2001年「藤ノ木台の家」(奈良県)
2005年「ES house-01」(奈良県)	2007年「帷子の家」(京都府)
2009年「ES house-02」(大阪府)	2010年「甲子園の家」(兵庫県)
2014年「Domus Ishigaki」(大分県)	2015年「千本の家」(京都府)
2019年「AAO bldg.」(兵庫県) 他	

【受賞歴】

日本建築家協会近畿支部「建築家新人賞」 建築環境・省エネルギー機構 サステナブル住宅賞「優秀賞」 大阪府建築士会「渡辺節賞」 日本建築家協会「新人賞」 日本建築士会連合会賞「優秀賞」 奈良県景観調和デザイン「奨励賞」 日本建築家協会「関西建築家大賞」 住まいのインテリアコーディネーションコンテスト2012 「経済産業大臣賞」 日本建築学会近畿支部 コンクリートと木のコラボレーションによる 持続可能な住まいと地域環境の設計競技「最優秀賞」 & 「二村賞」 大阪府建築士会「大阪府知事賞」他

【審査会】



●審査員（50音順・敬称略）－職場は2019年10月当時－

矢田 朝士／ATELIER-ASH主宰
一階 聡之／(株)日建設計設計部門ダイレクター
小笠原絵理／間工作舎一級建築士事務所主宰
神谷 浩司／(株)大林組大阪本店建築事業部プロジェクト設計部担当部長
河崎 昌之／和歌山大学システム工学部システム工学科准教授
近藤 良彦／(株)安井建築設計事務所設計部設計主幹
平岡健太郎／(株)竹中工務店大阪本店設計部グループ長
前田 茂樹／ジオグラフィック・デザイン・ラボ代表
松下 典央／(株)昭和設計ソリューション部部長
宮本 雅弘／(株)東畑建築事務所設計室部長

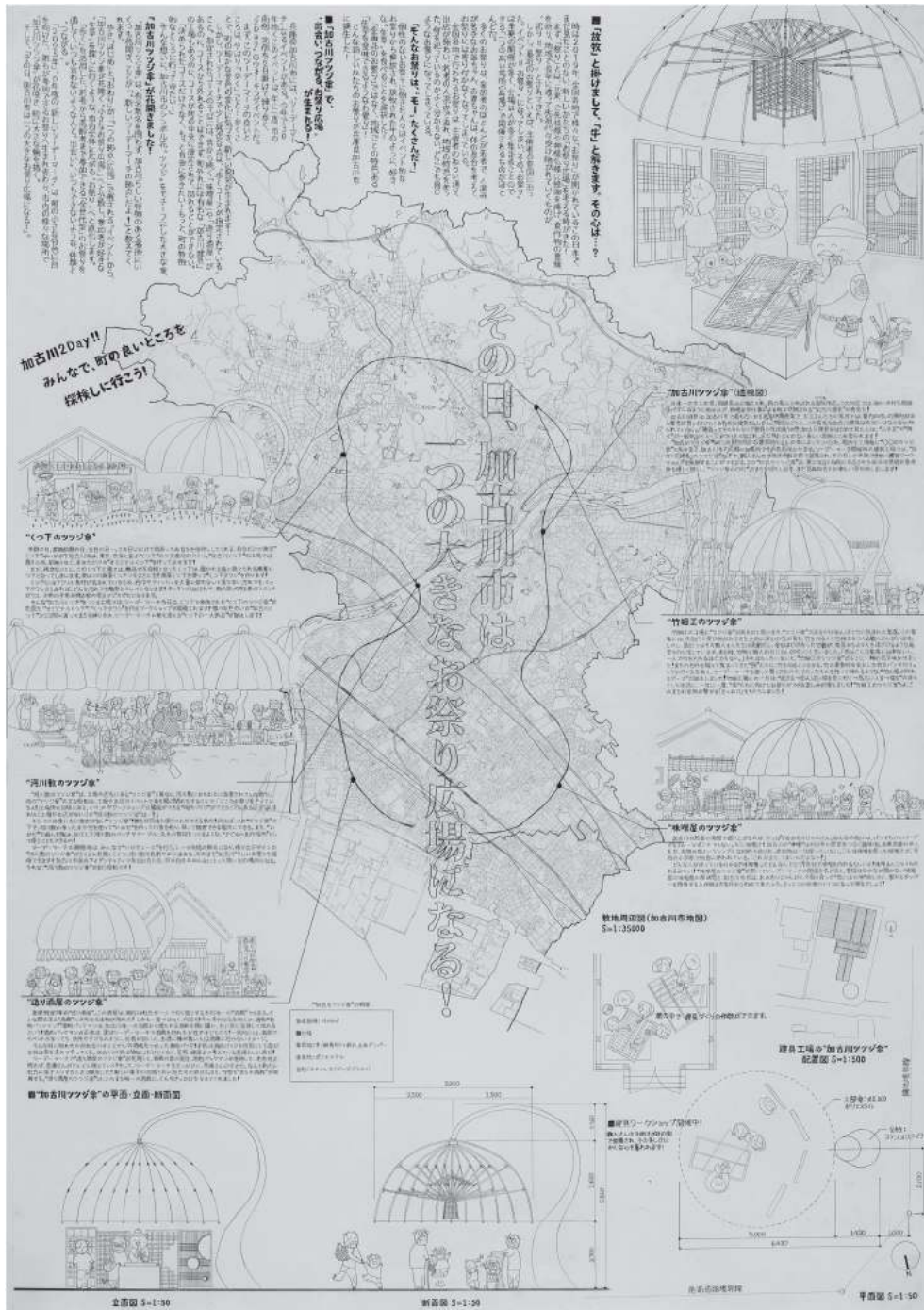
入選・最優秀賞

田中滲梨

兵庫県立兵庫工業高等学校 3年

私が志望する大学では、地域づくりや地域貢献に非常に力を入れていて、私はその活動にとっても憧れがありました。そのため、地域が主として動き、それが披露できる、「祭り」がテーマのこのコンペを選びました。お祭り広場を考えるにあたって、「なんで日本には西洋のような広場がないんやろ?」と思い調べたところ、「かつて日本には広場があった。それは道である。しかし、いつしか道は人のコミュニティが集まる場から車のための道へと変わってしまった。」とありました。そこで私は「道を介して分散された広場」に向かう事が日本の広場の在り方であり、かつての賑いを再現する事が、未来のお祭り広場にふさわしいのではないかと考えました。さらにお祭りとは非日常的な空間を生み出す事ができるという気づきから、「日常でのストレスも、祭りの時には自由になって欲しい。」という思いが生まれ、「放牧された牛のように、思うがままに開拓できる」。そんな広場を設計しようと思いました。

自分が思っていたよりはるかに、広場とは得体の知れないものだとな、身に染みて実感しました。私は妥協する事が嫌いです。人の意見を聞いて、うんうんと素直に受け入れる事ができません。自分が納得するまで粘り続けます。後から先生に言われて気づきましたが、私はかなりの頑固者だと思います。だから何度も何度も先生とアイデアをぶつけ合いました。そして期間がない中粘り続けた結果、やっとの思いで完成しました。9月30日消印締め切り時刻の20分前でした。郵便局まで車を飛ばし印鑑が押されるまで安心などできませんでした。

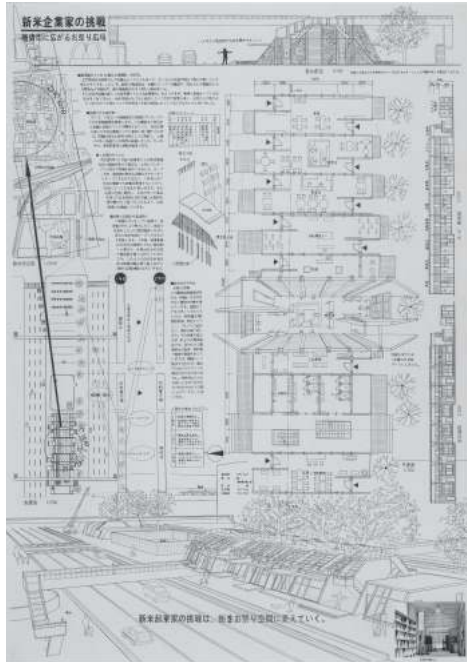


だから私にとって思い入れがあってすごくすごく大切な生まれて初めて牛を約70頭描いた作品でした。認められた時は友達と泣いて喜びました！生み出したアイデアを固める事に悲鳴を上げた事はあったけど、このコンペに取り組んで本当に良かったです。最後に、今回提案した加古川ツツジ傘が現実世界でも年月をかけて熟成する姿は私は見てみたいです。

▲審査コメント／矢田朝士

本作品では広場を建築空間で計画せず、地方都市の町中各所に大きな傘状の工作物を設置し、それらをつなぐ道空間により町全体を広場に見立てて活用する提案である。広場が地域に密着し、広い範囲で魅力的な賑わいをつくりだしており、とても素直で好感の持てる作品である。図面の表現や完成度も非常に高く、丁寧な描き込みや賑わいの様子をイメージしやすい挿絵、そして市地図とのバランスの良い紙面構成は、豊かな表現力を持ち、読み手を物語に引き込むのに十分な魅力がある。人の集まる場所をつくりだす大きな傘は、加古川市の特産である木製建具の職人達によって広場（町）のアイコンとして制作されており、場所

場所の傘の下では、特産品などを購入したり、制作体験したり、ワークショップに参加したりでき様々な楽しみが用意されている。そして道の輪は、普段気に留めることのない場所をも繋ぎ、また地域コミュニティ全体が関わることが出来、訪れた人たちの新たな発見とまちの活性化の相互作用があり、開催地に長期的な波及効果のある仕組みとなっている。あとは、計画の求心力を高める為に建築計画を充実させ、建築空間が持つ魅力を最大限活用した建築物で広場空間や道々での楽しみを膨らませることが出来ればより説得力のある計画となるであろう。



入選・優秀賞 鯖戸暖香 三重県立四日市工業高等学校2年

2025年のお祭り広場というテーマから、今はもちろんのこと未来にも必要な「祭り」とは何か、「広場」とは何かを考えました。祭りの由来や形は様々ですが、いろいろ調べていく中で、自分の住む町の商店街も「祭り」に分類できるのではと思うようになりました。

今、町の商店街はシャッターが閉じている店が多くあります。固定客が付くかなどの不安もあって新規参入もなかなか見込めません。そこで、駅前に新米起業家がチャレンジするための仮設店舗を設け、集客などの様子を感じてもらい、その後、実際に商店街に出店するかを考えられる場所を提案しました。この場所を中心に駅前、商店街と祭り（人）の輪が広がれば嬉しいです。

入選通知を受けた時はとても嬉しかったですが、同時にとても悔しく思いました。しかし、この夏に頑張った事は変わらないので作品には悔いはありません。設計コンクールへの挑戦は初めてで、コンセプトもなかなかまとまらず大変でしたが、支えてくださった先生、家族、先輩方のおかげで作品を作り上げる事ができ、このような賞もいただけたと思っています。今回学んだ事を活かし、今後も建築の勉強を頑張っていきたいと思います。

◀審査コメント／宮本雅弘

鯖戸さんの提案は、おおかたの審査員がその内容の豊かさとプレゼンテーションの緻密さに驚かされたと思う。後に同うと、まだ2年生とのことであるから、さらに研鑽を積んだ来年にも期待したい。案の内容は市民広場に面した敷地で起業家が事業を始めてみて、首尾よくいけば商店街での出店に巣立っていくというものである。起業家のための仮設的な店舗の構想であるが、お祭

り広場に求められた一過性と起業家のインキュベーションという性格の符合が案の魅力を引き立てている。

また、「新米起業家の挑戦は、街をお祭り空間に変えていく。」と作者が題しているように、広場という建築物が介入しにくい課題に対して、挑戦者の成功物語が四日市の街を活性化していくという、面的な広がりへの期待も秀逸であり評価につながっている。建築も若者が自らつくることを前提に構築され、建設のシステムから広場の賑わいが生まれそうだと想像を掻き立てる。強いて言えば、市民広場など周辺敷地との関連や建築の仮設性がさらにデザインとして表現されていれば、案に込めたアイデアをもっと強く訴えられたかもしれない。



入選・優秀賞 長尾柚季 東京都立蔵前工業高等学校2年

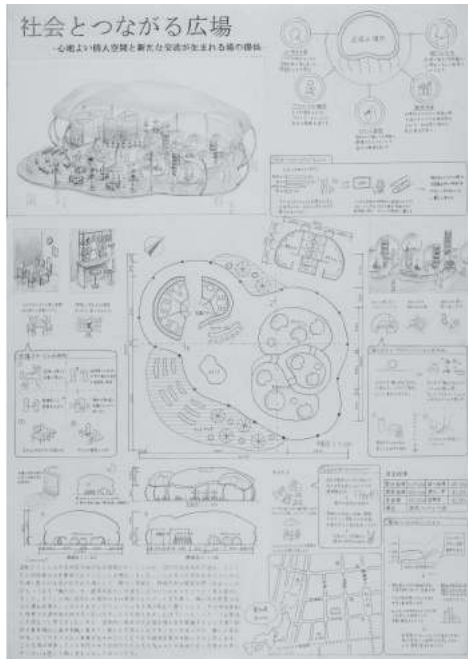
私がこのコンペに応募した動機は製図の授業での課題を先生に褒めてもらったからです。とても嬉しくもっと書いてみたいという気持ちから応募しました。また、この作品を作る事で日本の良さや日本の未来についてたくさんの人に知ってもらいたかったからです。水引細工や着物など、今の私達にはあまり関わりがありません。そのため、昔の良さを今につなげていけるようにしました。またオリンピックが近づいているため異国の人にも良さを知ってもらいたく目と耳で楽しめるようにしました。

(入選通知を受け) とても嬉しく思います。夏休みや土日の休日も休まずに学校に向かい地道に努力し続け、また先生方にもたくさんの協力をいただき、クラスの友人にもアドバイスをもらいました。そのため入賞したいという気持ちが強まりました。その後、結果を聞いて頑張りや努力が報われたなと思いました。この度、優秀賞を獲る事ができたためこれからの学校生活、コンペにも生かしていきます。

▲審査コメント／前田茂樹

本作品は、本テーマの重要な点である、ハレの状況だけでなく、いかにケの日常の状況でも持続的に使われ続けるかについて、場所のポテンシャルを活かした建築空間の提案により、実現可能なレベルに達しているところが評価された。河川法について言及しているところも重要な点である。また川側に席を、奥にキッチン及び縁側を配置しているところ、また水上舞台への楽屋への動線を船で行うなど、機能や平面断面計画もシンプルかつ深く考えられているのも好印象だった。

しかしながら、気になるのは建築設計が少し伝統的な規範に寄りすぎではないかということだ。建築はその時代を映す鏡のようであり、伝統的な江戸の家屋は、江戸時代の材料や技術により、その様式が必然であった。今後は日本の誇るべき江戸時代の文化との継続性を探しながら、現代の、または未来の日本の建築の様式を考えていって欲しい。そこにはおそらくデジタルコンテンツとの融合なども含まれてくるだろう。ギャラリーのペイントなども江戸の絵師が見ても、唸るような新しさも欲しい。浮世絵も江戸時代には新しい版画技術を駆使した世界でも独創的な芸術表現であったのだから。



入選 植木ほの香 大阪市立工芸高等学校 3年

2025年の社会は労働人口が減り、今とは異質の働く量と質が求められる事から、仕事での過剰なストレスがさらに問題視されていると想像しました。そこで社会人が気持ちよく働ける支えとなる広場が必要だと感じ設計しました。例えば休憩中ふらっと立ち寄れるリフレッシュできる空間があれば過労働を防ぎ、その問題解決に貢献できそうです。そのため神秘性を持つ事からストレス軽減効果が期待されるクラゲをモチーフとした心休まる場を設けました。また、社会人はプライベートの時間が取りにくいと知ったので、ミニ音楽フェスや異業種で集まれるお祭りを開催する事で自分の趣味を楽しめ企業同士の新たな交流・事業が生まれると考えました。このことは「働きがいの経済成長も」という持続可能な開発目標の達成にも近付けられ、そうしてこの「社会とつながる広場」が生まれました。

(入選通知を受け) とても驚きましたが、じわじわと嬉しさが込み上げました。今までのどの作品より時間をかけて努力したのでよかったです。

▲審査コメント／松下典央

現代の働く社会（社会人）に対して、非常にやさしい思いを持った提案をしています。2025年に自分が社会で働く姿を創造し、こんな広場があれば良いという思いの現れなのかもしれません。

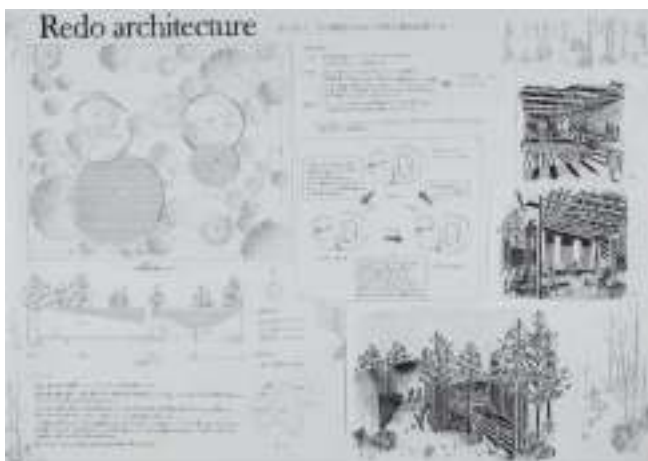
無機質な四角いビルが立ち並ぶ名古屋の丸の内オフィス街に、突如「ホワッ」とした浮遊感のある空間（広場）が現れます。癒しと活力、新たな心機や出会いを起こすこの広場の機能が、クラゲというモチーフで素直に表現されている良い作品です。

しかし、この作品の建物は、その形態から閉ざされた空間で成り立つものではありません。建物を取り囲む敷地の様子を見せて欲しいところです。

建物の屋外や敷地周辺との環境、また広場としての街との繋がりを考えると、開放的な建物が機能的にも形態的にもより生きてくると思います。

公共の場を使って、街に面白い事を仕掛け、社会に元気と活性の風を入れていこうと言う試みが出て来ています。こうした人目線のまちづくりの発想を参考に、建物や空間を創造することを心掛けていただけたら、より良い作品が生まれてくるのではないのでしょうか。

アイデアと創造を大切に、これからの世代を担って活躍していただく事を期待しています。



入選 大澤愛美 大阪市立工芸高等学校 3年

お祭り広場なので、誰もが使える広場をつくり、ずっと受け継がれるものは何かと考えた時にそれは自然でした。なので自然的な建物を建てました。

(通知を受けた時) 入選だったので悔しかったです。

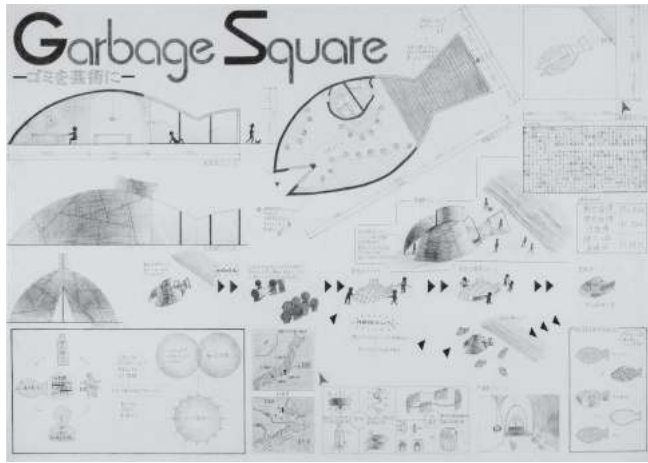
◀審査コメント／河崎昌之

円環的な時の流れの中で、繰り返し現われる空間として広場を構想したところに、まず惹かれました。植物の成長と敷地に配した建築的な部位とが創り出す空間の、その移ろいやすい雰囲気、人間が働きかけることで維持していく。「お祭り」というテーマを前に、こうした自然の営みと人間との関係に立ち返った作者の態度に関心をもちました。

人々が集い、維持にかかる手間を分かち合う祭りのありように、茅葺民家の屋根の葺き替えを連想しましたが、これが端的には機能維持のための部材

交換であるのに対して、提案目的である「自然と建物との共存」のための維持が、「居心地の良さ」という空間体験を手掛かりにしているところがユニークです。

しかしながら、上の個別的な契機の先に、目的に至る道筋を具体的に見出せず、物足りなさを感じました。例えば茅葺屋根の更新が、景観といった感性的な価値の維持にも繋がっているというような多義性や意味の連鎖が、提案の中に欲しかったです。そのために、抽象的な「自然」という語を地形や気候、そしてここでは植生レベルまで解きほぐし、その上でもう一度、自然と人とのかかわり合いに踏み込んでみてはいかがでしょうか。

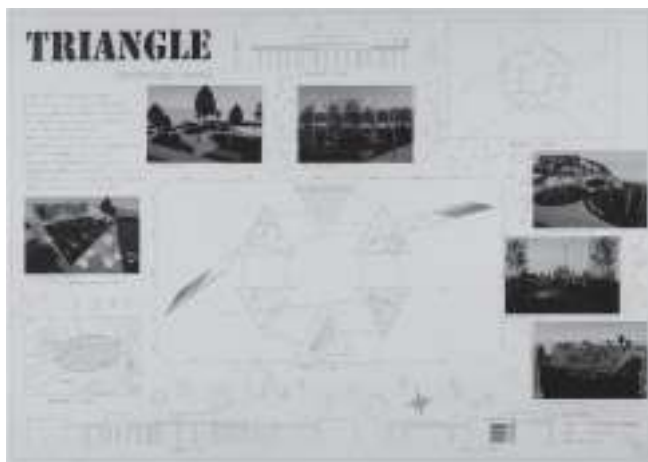


▲審査コメント／小笠原絵理

人間が出したごみは、海へ流され、魚や生き物たちも汚し、漂い、岸へ流れつきます。2025年、状況はもっと深刻になるでしょう。

作者は、直面するごみ問題に向き合おうとしています。ごみを素材につくるという行為が、制作にかかわる人たちの意識を変え、新たなモノゴトがはじまる、唯一無二の「お祭り広場」を提示しているのではないのでしょうか。

ごみを集めて、ペットボトルや木、ガラス、タイルなどで、魚の骨格をつくり、外皮でおおう。作者がいう「ごみによって体を支配される魚」が海辺に姿を現します。その体内は、ごみを活かし独自にデザインされた家具



▲審査コメント／近藤良彦

都会で仕事をするワーカホリック達に、せめて昼休み「都会の中の自然」が享受できる広場を大阪駅前の交差点上につくろうという提案である。タイトルにあるように正三角形の6つの広場をリング状に接続し、美しい幾何学として表現されている。各々の広場は緑の中のランチタイムスペースの他、ライブステージ、子供の遊びスペース、情報プラザ等個性を持たせている。アンリ・ルソーのようなたそがれ時のCGパースは、独特の雰囲気を出し印象に残った。入選にあたり広場の内容ひとつひとつをとってみると既視感があり、新しさが感じられないとの意見もあったが、「お

入選 坂田 葵 大阪市立工芸高等学校 3年

2025年のお祭り広場をテーマとして建物を考えた時、2025年に問題となっている事について調べました。たくさん問題や課題の中で、海のごみ問題に着目して、この問題を改善する事ができる建物を設計しました。

また、建物の形はごみ問題というテーマが伝わり、インパクトがあるようにするために、海のごみによって悪影響を受けた魚の形にしました。

授業内だけでなく、放課後や夏休みに積極的に学校へ行って、建物のデザインやコンセプト、パースなどがより良くなるように考えたり、図面での色鉛筆の塗り方やレイアウトは、ごちゃごちゃにならないように考えて書いたので、自分の最大限の力を出せたと思いました。入選できるかどうかは不安でしたが、入選通知を受けた時は頑張ってたかったと、嬉しく思いました。

や照明がちりばめられ、子どもたちが遊んだり、過ごすための内部空間がつくられます。

つくり手は、小学生や地域の人たち。波に打ち上げられたごみは、つくる、ともにつくる行為を通して、新たな姿に生まれかわります。金属の魚は鈍い光を放ち、木片でつくられた魚は、年輪が時を語るでしょう。さまざまな素材の魚たちが、海辺に新たな景色をつくり、私たちに語りかけます。

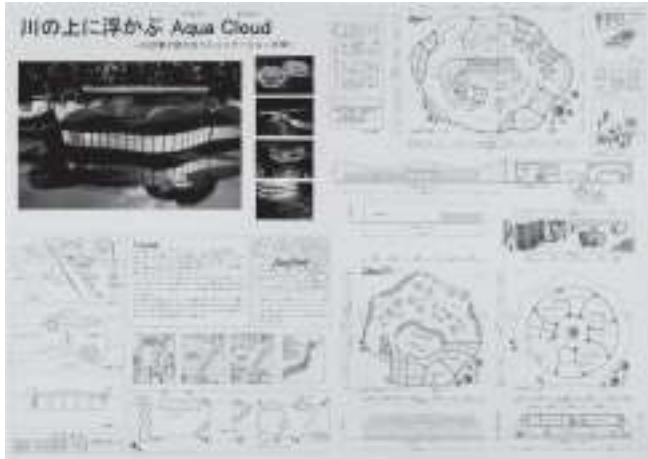
「ごみを芸術に」その活動自体が、問題への糸口を示す可能性を、強く示した力作です。

入選 萩原杏菜 大阪市立工芸高等学校 3年

この広場を設計するにあたって、私は現在の社会人のランチに注目しました。都会の中で仕事をしているとなかなか自然に触れる事ができません。少ない時間の中、職場から近く、仕事の合間に、少しでもこの広場が憩いの場になれば、と思い設計しました。私はこの思いを基に、梅田の交差点に造る事にしました。形は三角形が6つ並んでおり、1つ1つ高さを変え、ビルから見た時にボリューム感が出るように上げました。三角を敷き詰めず、あえて渡り廊下のようにつなげました。隙間を開ける事によって下道が暗くなりすぎず、広場にもボリュームが出ます。そして信号が必要なくなり、交通の便も良くなります。無駄にスペースを取らずにメリットもたくさんある、という事からこの形にたどり着きました。

通知を受けた時、まさか自分でも通るとは思っていませんでした。始めは全く違う広場を制作していました。作っていく際に先生などから指摘があり、私は白紙に戻し、もう一度始めから取り掛かりました。思い切って仕切り直した甲斐があったなと思います。この経験を今後の作品に生かしたいと思います。

祭り広場」を「ハレ」の場として捉えるならば、一日のひとときここが非日常空間となると考え、今回の課題に合致すると評価した。紙面の中でタイトル文字とCGパースが目を引く反面、ドローイングの表現に迫力を欠いたことが残念であった。また周辺施設との関係性やグランドレベルとの関係性など表現が曖昧なため、実現性のなさも感じられる。アーバンスケールでダイナミックな構造提案とあわせて、立体的な賑わいが表現されれば良くなると思う。美的センスに磨きをかけて、これからの設計に期待する。



▲審査コメント／神谷浩司

都市の中であって、スポットの当たらない、または分断されているなどの負の部分に着目し、そこに新たな機能、施設を挿入することで、再生を試みる提案の一つである。

本作品では、都市部の土地不足と絡めて、川を舞台に選んでいる。はしけ状の大きな施設を河岸に設置し、橋として活用するなど、人が行きかい集う新しい風景を作ろうとしている。人々の無数の交わりから命名されたタイトルと、水辺の大輪の花を想起させる模型写真により、印象深い作品となっている。

入選 藤本らな 大阪市立工芸高等学校 3年

最初は川の上や、河川敷でお祭りを催す事ができたら、面白いんじゃないか、とただ柔らかく考えていました。しかし、お祭りを通して新たな問題解決策がないか考えた時、人が集うお祭り会場と若者の来場者が少なくなっている歴史ある建物を繋げられるのではないかと思います、そこから現代社会の問題についても調べ始めました。考えているうちに、川に設置する事で全国各地でも催され、森林を伐採して土地を開発する事なく、そして地域を繋ぐ新たなコミュニケーションの場が作れるアクアクラウドにたどり着きました。

入選したと聞いた時、とても嬉しい気持ちでいっぱいになりました。作品を通して、問題解決のためのデザインを考える難しさと面白さを感じ、とても勉強になりました。これからの自信につなげて頑張ります。

一方で本作に足りなかったのは、“祭り”の意味づけや、提案施設での捉え方に注力されていない、または表現できていないこととと感じた。

他の受賞作品のいくつかでは、“祭り”というものを自分なりに掘り下げ、定義したうえで設計がなされているが、こうしたプロセス、表現によって、提案の説得力が格段にあがることに気づき、出来れば今後の創作に生かされたい。



入選 藤本隆之介 大阪市立都島工業高等学校 3年

お祭り広場のコンペティションを行う中で、最初に思い浮かんだ事が「人であふれかえっている難波の歩行者空間をどうにかしたい!」という事でした。調べているうちに御堂筋全体を歩道化するという記事を見つけて、どうせなら自分もデッカいこうと思い、全面歩道化にプランを変更し、規模の変更に伴って内容も「多種多様な使い方ができる街の人のための共用空間」というものになりました。ただ、「多種多様」というだけでは内容がうすくなってしまうので、自分の中でいろいろとシミュレーションして使い方を書いていったのですが、その過程がけっこう楽しかったです。

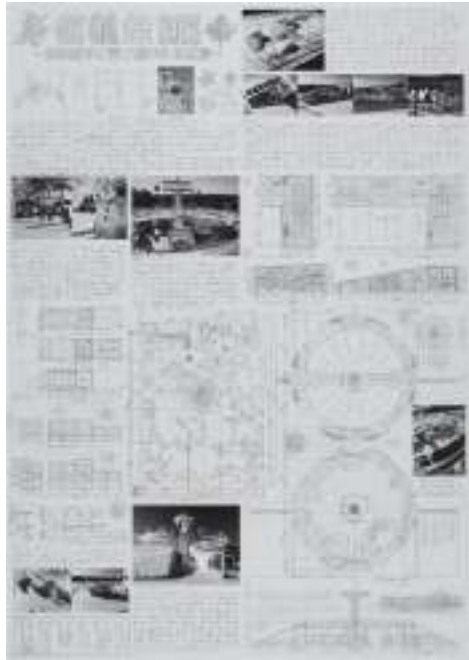
コンペの提出の締め切りの時期は、色々とバタバタしていたため「最後の方が少し雑くなってしまったかも、大丈夫かな」と思っていましたが入選したと聞いて、とりあえず安心しました。なんせこれまでのいくつかのコンペでは入賞した事がなかったし、これだけやってダメだったらどうしようかと考えていたので、本当に良かったです（笑）。大学進学してもなんとかやっていけそうなので、これからも建築を学び続けていきたいと思います。

◀審査コメント／一階聡之

御堂筋は、平成29年（2017年）に完成80周年を迎えた、大阪を、関西を代表する豊かな街路空間です。大阪府は100周年を目標に御堂筋の全面歩道化を「御堂筋 将来ビジョン」（平成30年（2018年））の中でも謳っています。

この提案は、これらの行政側の意図に即しつつも、「お祭り」・「広場」としての機能・空間を、全面歩道化された御堂筋に見出そうとしたものであり、人々が集い・憩い・楽しむ「場」としての未来に望むべき姿を具体的なイメージをもって提案されていると受け止めました。画面全体から受ける印象も、とても「柔らかく」「暖かい」ものであり、作者が想い描く将来像を、好感をもって受け止めることが出来ました。

評価されるべきは、着眼点として、大阪のメインストリートである御堂筋を選定したこと、また、行政側の意図に沿った実現性の高い提案と、豊かな表現をもって、全面歩道化の実現を加速させる可能性を示唆していることであると認識します。が、しかし、この提案においては表裏一体となる、「発想・提案のオリジナリティ」に欠けるという部分は決して否めません。我々設計者は、実現性を加速するイメージを表現することも重要ですが、「見たこともない」ものを発見し、提案することもさらに重要です。今後の益々の発展に期待します。



入選 森田 創・芳野 虎・和田翔樹 北海道名寄産業高等学校 3年

今回、コンペのテーマを聞いた時に、正直完成形の想像が付きませんでした。仲間と色々な事を話し合いどう制作したら良いか考えました。そこで、一番なじみのある地元重点を置く事にしました。地元について調べるとカナダカワーサレイクス市リンゼイと姉妹都市50周年という歴史があるという事がわかりました。またリンゼイと親しみが深い公園もあるという事も知れ、この公園を中心に考える事も決めました。地元や公園の問題を改善しながらリンゼイとの記念の公園にしたいと思いました。また、将来的には、リンゼイの人々が移り住み活気があふれるようにと願い制作しました。

入選したという電話をいただいた際には、実感がなく驚きでいっぱいでした、コンペに挑戦するのは初めてで、わからない事も多く、この公園をどのようにするかというアイデアを出す事が特に大変で、制作がなかなか進まず気付いた時には残りわずかしか時間がありませんでした。ですが、たくさんの方の支えがあったからこそ完成する事が出来、また入賞する事もできました。感謝でいっぱいです。

◀審査コメント／平岡健太郎

地元の自然豊かな公園に、子ども達が気候に影響されずに体を動かして遊ぶことができる運動施設と、若者が気軽に集まることができる娯楽施設を設け、そこで姉妹都市との長年にわたる交流を記念したお祭りを開催して、この場所ならではのにぎわいを生みだそうという計画である。

まず目に入ってきて印象的なのは、お祭り広場の中心にある展望タワーと、その頂部から足元へ

広がる真っ赤な行灯の風景である。象徴的に「お祭り」らしさをわかりやすく素直に表現した点が、非常に好感が持てる。さらに、お祭り広場を取り囲むように配置されたアスレチック施設、カフェ、ステージが、それぞれ個性的に設計され、図面と模型写真によって丁寧に表現されている。

「お祭り広場」というテーマに対し、イベントの設定に頼りすぎることなく、ひとつひとつの建築をしっかりと設計し、群としての建築がおりなす風景と、そこで繰り広げられるアクティビティへの期待感によってお祭りのにぎわいを表現している点を特に評価したい。

あえて一言付け加えるならば、姉妹都市である「リンゼイ」らしさが建築表現の中により具体的に表れてくると、さらに個性的で魅力的な提案になったのではないかなと思う。

※入選者の感想文は誌面の関係上、要約して掲載いたしました。 作品写真撮影：河合止揚（アトリエ リベラ）

●応募学校

- ・北海道名寄産業高等学校
- ・埼玉県立大宮工業高等学校
- ・東京都立蔵前工業高等学校
- ・石川県立羽咋工業高等学校
- ・愛知県立佐織工業高等学校
- ・三重県立四日市工業高等学校
- ・大阪市立工芸高等学校
- ・大阪市立都島工業高等学校
- ・兵庫県立兵庫工業高等学校
- ・明石工業高等専門学校
- ・和歌山県立和歌山工業高等学校
- ・学校法人開新学園 開新高等学校

【表彰式】



●審査記録

10月4日 予備審査：応募作品について応募規定違反の有無を調べ、その検討を行った。検討の結果、一部作品に要求図面の不備や違反事項が見られたので、予備審査結果として審査会に報告することとした。（教育委員会・工高生教育小委員会）

10月17日 事前審査：審査会当日欠席の審査委員1名により審査が行われた

10月19日 審査会：審査委員9名により当日審査が行われた。（審査時間13：30～17：30）

●審査経過

審査を開始するにあたり、本年度の応募校数、応募作品数の報告を行い、一部作品の要求図面に対する不備や違反事項を予備審査報告として審査会に提示された。その

結果、審査では違反事項を考慮するが全作品を本審査の対象とすることとし、続いて審査委員長より審査方針の確認があり、審査に入った。

■1次審査（審査員10名）97作品→29作品

全応募作品について審査委員1名につき10作品を選んで投票し、集計。

得票	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
作品数	1	2	1	1	1	2	2	3	8	8

票を得た29作品を1次審査通過とした。（審査時間13：35～15：00）

■2次審査（審査委員9名）29作品→入選10作品

1次審査通過29作品のうち、得票数1の作品について次のステージに残すべきかどうか審議された。続いて得票数2の作品についても同様に審議され、続けて段階的に審議が重ねられた上で合計13作品に絞り込まれた。これらの作

品を2次審査通過とし、違反事項を確認の上得票の多かった5作品を除いて再度審議が重ねられ、最終的に10作品を選定、入選作品とした。（審査時間15：15～16：45）

■3次審査（審査委員9名）入選作品10作品→最優秀作品1点、優秀作品2点

引き続き、優秀作品3点を選ぶに当たり審議し、入選作品10点より得票数の多かった5作品から3作品を選出、その後最優秀作品を審査員の挙手により絞込み、議論を重ね、最優秀作品1点、優秀作品2点が確定し、審査を終了した。（審査時間16：45～17：15）

会誌「建築と社会」への審査経過報告掲載にあたり、10点の入選作品について審査委員が分担してその評価を誌面にまとめることを約束し、審査会を終了した。（審査会終了時刻17：30）

1 | ゴッホ展

1880年、27歳の頃に画家を志したフィンセント・ファン・ゴッホ (Vincent van Gogh, 1853-1890) は、画業の初期にハーグ派の影響を受けた。特に、中心的な画家のひとり、アントン・マウフェ (Anton Mauve, 1838-1888) と縁戚関係にあったことから彼に直接の指導を仰ぎ、その後、ハーグに移住して他の画家たちとも交流する。ヨゼフ・イスラエルス (Jozef Israëls, 1824-1911) やヤコブ・マリス (Jacob Maris, 1837-1899)、マティス・マリス (Matthijs Maris, 1839-1917) のマリス兄弟らを中心としたこのグループは、街の近辺で出会う身近な風景を描いた。対象を正確に写し取るのではなく、示唆に富んだ筆致で仕上げた彼らの絵には、時としてスケッチのような趣が残されている。このように、細部ではなく印象を重視した手法をファン・ゴッホはまず身に着けたのである。その後彼はパリに出ると、印象派が打ち出した鮮やかな色遣いに出会ってその虜となり、色の表現力を学び、実践するようになる。

同展では、このようにファン・ゴッホの画業の初期から、印象派の洗礼を受けて独自のスタイルを確立するまでを追う。ファン・ゴッホ自身の絵画やドローイングに合わせて、彼の絵の基礎になり、方向性を決定づけたハーグ派と印象派の作家たちの作品も展示することで、ファン・ゴッホがファン・ゴッホとなるまでの過程を観覧することができる。

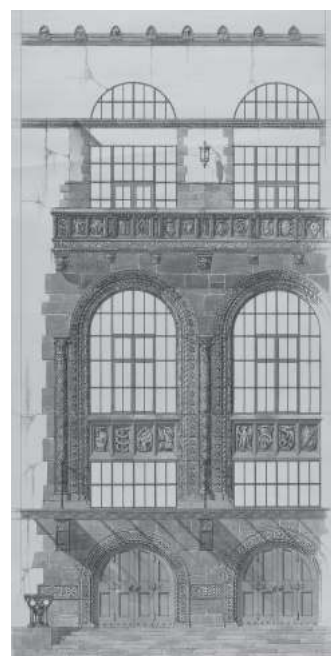


フィンセント・ファン・ゴッホ
《糸杉》1889年6月
油彩・カンヴァス
93.4×74cm
メトロポリタン美術館
Image copyright
©The Metropolitan Museum
of Art.
Image source:
Art Resource, NY

期 間 1月25日(土)～3月29日(日)
10:00～18:00 (金・土曜日は20:00まで)
※入場は閉館の30分前まで
休 館 日 月曜日 (ただし2/24は開館)、2/25
会 場 兵庫県立美術館
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
TEL.078-262-0901
観 覧 料 一般1,700円、大学生1,300円
70歳以上850円 (要証明)
障がい者 一般400円、大学生300円
(要証明、1名につき介助者1名は無料)
*高校生以下無料

2 | 大正・昭和 神戸まぼろしの公会堂
コンペ再現!

神戸は、モダニズム都市として発展してきた。その中で、現在の神戸市中央区の大倉山に公会堂を建設する計画があり、大正期 (1922～23年) と昭和戦前期 (1935年) に設計競技 (コンペ) が2回行われた。しかし、実際にはどちらも建てられずに終り、まぼろしの公会堂と呼ばれてきた。双方の設計競技に参加した人々が描いた設計図が、一部残っている。大正一等 (複写のみ) は大阪・中之島の大阪市中央公会堂を思わせる壮麗なイメージである。昭和戦前期の図面の方が、枚数は多く残っている。作品はいずれも手書きで、線や文字が美しく、見ごたえがある。本展覧会では現存する設計図85枚を一室に展示し、近代神戸の知られざる歴史に焦点をあてる。全貌を見通せる初めての機会である。



須藤員雄 神戸市公会堂設計図
大正三等 詳細図
神戸市文書館蔵

期 間 3月8日(日)まで
10:00～17:00
※入館は16:30まで
休 館 日 月曜日 (祝日の場合は開館)、
年末年始 (12/29～1/3)、1/14、2/25
会 場 神戸ゆかりの美術館
神戸市東灘区向洋町中2-9-1
TEL.078-858-1520
観 覧 料 一般800円、大学生400円、
*高校生以下無料 (要証明)
*神戸市内居住の65歳以上の方は半額

3

「鉅鹿」発見100年ー 磁州窯と宋のやきもの

中国宋代（960～1279）の陶磁器は「宋磁」と称され、中国の工芸文化のひとつのピークを示すものとして世界的に評価されている。2020年は、近代における宋磁蒐集の契機となった北宋の町「鉅鹿」（※）遺跡と磁州窯の陶器の再発見からおおよそ100年にあたる。

磁州窯は河北省南部に位置し、五代（10世紀）以降現代まで日用の器物を大量に生産した民窯である。白化粧や黒

釉の技法を基本に、独特の「搔落し」と呼ばれる彫刻的な文様表現、鉄絵や紅緑彩（赤絵）、三彩や翡翠釉などを用いた多種多彩で装飾性豊かな陶器を生み出した。また同様の製品を焼造する生産地は、河南・山西・山東・安徽・陝西といった華北地域一帯に広がり、またその技術は国境を越えて契丹族の遼（916～1125）やタングート族の西夏（1038～1227）にまで伝わっていった。本展ではまとまって公開されることの少なかった館蔵の磁州窯とその周辺の陶磁器（磁州窯系陶器）を紹介する。あわせて、国宝「曜変天目（稲葉天目）」をはじめとする宋磁の名品を展示する。

※鉅鹿…河北省南部の町。北宋・大観2年（1108）、漳河の氾濫により一挙に泥土に埋没し、1920年前後に遺跡が発見され、大規模な発掘がはじまった。磁州窯陶器をはじめとする大量の陶磁器や建築址などが出土し、「東洋のポンペイ」と呼ばれた。



国宝「曜変天目」建窯
南宋時代（12～13世紀）

期 間 1月18日（土）～3月15日（日）

10：00～16：30

※入館は16：00まで

休 館 日 月曜日（ただし2/24は開館）、2/25

会 場 静嘉堂文庫美術館

東京都世田谷区岡本2-23-1

TEL.03-5777-8600（ハローダイヤル）

観 覧 料 一般1,000円、高大生700円

障がい者手帳等をお持ちの方は700円、

その介助者1名は無料

* 中学生以下無料

4

日本書紀成立1300年 特別展 出雲と大和

出雲大社本殿は、古代には48mの高さを誇ったといわれている。この高さの本殿を支えるには巨大な柱が必要であったことは想像に難くない。鎌倉～室町時代（13～16世紀）に製作された出雲大社本殿の平面図「金輪御造営差図」には、本殿は長さ109mの長い階段を有し、巨木3本を一組とする直径約3mの柱9本で支えられた壮大な偉容を誇った姿で描かれている。しかし、長らく、図面としての信憑性に疑問がもたれてきた。

平成12年（2000）、出雲大社境内の地下1.3mから大型の本殿遺構がみつかり、柱材が出土した。それはまさに、この御造営差図に描かれた巨大本殿の存在を裏付けるような発見である。柱材は、杉の大材3本を束ねて1つの柱としたもので、出雲大社本殿を構成する9か所の柱のうち3か所が発掘で確認されている。本殿の中心に位置するのが「心御柱」、本殿正面中央に位置するのが「宇豆柱」である。

本展で、古代の出雲大社本殿を支えた「心御柱」と「宇豆柱」がそろって出品することが決まった。2件そろっての公開は史上初で、その大きさや保存状態を考えると、今回が“最初で最後”の機会となるかもしれない。



重要文化財《宇豆柱》
島根県出雲市
出雲大社境内遺跡出土
鎌倉時代・宝治2年（1248）
島根・出雲大社蔵

期 間 1月15日（水）～3月8日（日）

前期展示1/15～2/9 後期展示2/11～3/8

9：30～17：00（金・土曜日は21：00まで）

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日（ただし2/24は開館）、2/25

会 場 東京国立博物館 平成館（上野公園）

東京都台東区上野公園13-9

TEL.03-5777-8600（ハローダイヤル）

観 覧 料 一般1,600円、大学生1,200円、高校生900円

* 中学生以下無料

* 障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

本欄掲載の1～4の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手（84円）を日本建築協会事務局までお送りください。

謹賀新年



令和2年元旦

常任理事

勝山 太郎

日建設計
設計部門 グループマネージャー

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4-6-2 TEL(06)6203-2361

近藤 康之

不二熱学工業 株式会社
代表取締役

〒542-0081 大阪市中央区南船場2-1-1 TEL(06)6261-4321

千種 幹雄

株式会社 昭和設計
代表取締役社長

〒531-0072 大阪市北区豊崎4-12-10 TEL(06)7174-8787

亀井 忠夫

日建設計
代表取締役社長

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4-6-2 TEL(06)6203-2361

理事

酒井 祥三

西松建設 株式会社 西日本支社
常務執行役員支社長

〒540-8515 大阪市中央区釣鐘町2-4-7 TEL(06)6942-1173

永嶋 元博

東リ 株式会社
代表取締役社長

〒664-8610 兵庫県伊丹市東有岡5-125 TEL(06)6492-1331

理事

栗原 信英

栗原工業 株式会社
代表取締役会長

〒530-0054 大阪市北区南森町1-4-24 TEL(06)4709-2300

理事

佐野 吉彦

株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役社長

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

原 眞一

コーナン建設株式会社
代表取締役会長

〒531-0075 大阪市北区大淀南1-9-10 TEL(06)6456-4311

小池 一郎

西日本建設業保証 株式会社
取締役社長

〒550-0012 大阪市西区立売堀2-1-2 TEL(06)6543-2553

会長

設楽 貞樹

株式会社 安井建築設計事務所
監査役

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

藤澤 一郎

ダイダグン 株式会社
代表取締役社長

〒550-8520 大阪市西区江戸堀1-9-25 TEL(06)6447-8000

理事

児玉 謙

日建設計
執行役員 設計部門 プリンシパル

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4-6-2 TEL(06)6203-2361

副会長

田中 日出男

株式会社 きんでん
取締役常務執行役員技術本部長

〒531-8550 大阪市北区本庄東2-3-41 TEL(06)6375-6229

副会長

米井 寛

株式会社 東畑建築事務所
代表取締役社長

〒541-0043 大阪市中央区高麗橋2-6-10 TEL(06)6202-0391

謹賀新年



令和2年元旦

設計事務所所有志

株式会社 伊藤建築設計事務所

取締役会長 森 口 雅 文

代表取締役社長 小 田 義 彦

本社・名古屋事務所・エルイー創造研究室

〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-15 (桜通ビル) TEL (052) 222-8611

東京事務所

〒101-0021 東京都千代田区外神田3-5-12 (聖公会神田ビル) TEL (03) 5294-6211

東畑建築事務所

TOHATA ARCHITECTS & ENGINEERS, INC.

代表取締役社長

米 井 寛

大阪府中央区高麗橋2-6-10 TEL (06) 6202-0391

東京 / 大阪 / 名古屋 / 九州

<http://www.tohata.co.jp>

NIKKEN

EXPERIENCE, INTEGRATED

日建設計

代表取締役社長 亀井忠夫

東京都千代田区飯田橋2-18-3

Tel. 03-5226-3030

大阪府中央区高麗橋4-6-2

Tel. 06-6203-2361

<http://www.nikken.jp>

安井建築設計事務所

代表取締役社長 佐 野 吉 彦

本社 〒540-0034 大阪府中央区島町 2-4-7 Tel. 06-6943-1371

支社 大阪・東京・名古屋・広島・九州 www.yasui-archi.co.jp



時をつくる ところで創る

大林組

取締役社長 蓮輪 賢治

本社 東京都港区港南 2-15-2 TEL 03 (5769) 1111

専務執行役員 掛布 勇
大阪本店長

大阪本店 大阪市北区中之島 3-6-32 TEL 06 (6456) 7000

100年をつくる会社

in 鹿島
KAJIMA CORPORATION

本社：東京都港区元赤坂1丁目3番1号

関西支店：大阪市中央区城見2丁目2番22号・マルイトOBPビル
電話06 (6946) 3311

<https://www.kajima.co.jp/>

子どもたちに誇れるしごとを。

清水建設株式会社

取締役社長 井上 和幸 取締役副社長関西支店長 池田 耕二

本社 〒104-8370 東京都中央区京橋二丁目16番1号 Tel. 03 (3561) 1111
関西支店 〒541-8520 大阪市中央区本町三丁目5番7号 御堂筋本町ビル Tel. 06 (6263) 2800

地図に残る仕事。®



大成建設株式会社

For a Lively World

代表取締役社長 村田 誉之
常務執行役員関西支店長 加賀田健司

本社 東京都新宿区西新宿 1-25-1
電話 03-3348-1111
関西支店 大阪市中央区南船場 1-14-10
電話 06-6265-4504
<http://www.taisei.co.jp/>

想いをかたちに 未来へつなぐ

TAKENAKA

竹中工務店 取締役社長 佐々木正人

〒541-0053 大阪市中央区本町 4-1-13 tel: 06-6252-1201
〒136-0075 東京都江東区新砂 1-1-1 tel: 03-6810-5000

戸田建設株式会社

代表取締役社長 今井 雅則 常務執行役員大阪支店長 三宅 正人

本社 〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-8-5 TEL 東京03(3535)1354
大阪支店 〒550-0005 大阪市西区西本町1-13-47 TEL 大阪06(6531)6095



夢のレンガを積みあげよう

都 窯 業 株 式 会 社

〒530-0047 大阪市北区西天満 2-8-1 大江ビル
Tel (06)6367-0389 Fax (06)6367-5567
工房 三重県伊賀市西山 伊州窯 伊州観白樓
<http://www.miyakoyogyo.com> E-mail: info@miyakoyogyo.com



大阪工業技術専門学校

OSAKA COLLEGE OF TECHNOLOGY

建築学科(設計専攻・施工専攻・設備専攻)・インテリアデザイン学科・大工技能学科・建築設計学科(リカレント生対象)
建築学科II部(夜間)・フレックス建築学科(夜間・単位制)・建築士専科(二級建築士受験資格取得者対象)

〒530-0043 大阪市北区天満1丁目8番24号 ☎ 0120-0910-19 🌐 <https://www.oct.ac.jp/> Tel. 06-6352-0093



学校法人 修成学園

修成建設専門学校

一級建築士受験資格認定校 職業実践専門課程認定校

〒555-0032 大阪市西淀川区大和田5-19-30 TEL:06-6474-1644(代)

☎ 0120-446-456 <https://www.syusei.ac.jp/>

- 建築学科
- 建築CGデザイン学科
- 空間デザイン学科
- 住環境リノベーション学科
- 土木工学科
- 建設エンジニア学科
- ガーデンデザイン学科
- 専科 2級建築士科



一般社団法人 日本建築材料協会

会 長 松 本 将

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-4-23 撞木橋ビル4階 TEL(06)6443-0345 FAX(06)6443-0348
<http://www.kenzai.or.jp/>





一般社団法人 日本建築協会

会 長 設 楽 貞 樹

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 TEL(06)6946-6981



一般社団法人 日本建築協会中国支部

支 部 長 高 松 隆 夫

〒732-0805 広島市中区十日市町1-1-9 (相生通り鷹匠ビル4階山陽工業(株)内) TEL(082)232-6471



一般社団法人 日本建築協会東海支部

支 部 長 篠 原 佳 則

〒460-0008 名古屋市中区栄2-10-19 (名古屋商工会議所ビル9階) TEL (052) 201-2201



一般社団法人 日本建築協会京都支部

支 部 長 長 瀬 博 一

〒604-0944 京都市中京区押小路通柳馬場東入橘町641 京都建設会館別館 TEL(075)211-2857



理事会等

第2回通常理事会

11月20日(水) 16:00~16:45

OMM地下1階ギャラリー

出席者 設楽会長ほか26名

議 事 (1) 2019年度上半期の事業執行状況

第1回会長・副会長・常任理事・支部長会議

11月20日(水) 14:30~15:50

OMM地下1階ギャラリー

出席者 設楽会長ほか15名

議 事 (1) 2019年度上半期の事業執行状況
(2) 意見交換

編集委員会

第8回広告企画・編集合同委員会

11月18日(月) 18:10~19:50

日本建築協会会議室

出席者 戸川副委員長ほか2名

議 事 (1) 12月号特集 オープンマインドな空間
(2) 1月号特集 大阪ベイエリアの再生
(3) 2月号特集 第26回私の空間作法
(4) 3月号特集 東海支部特集
(5) 4月号特集 特別編集委員会特集
建築教育の今(仮)
(6) 2020年表紙の選考

第7回設備分科会

11月13日(水) 18:00~19:40

日本建築協会会議室

出席者 橋本幹事ほか7名

議 事 (1) 「設備の頁」の企画
(2) 2020年特集

第7回法令分科会

11月27日(水) 15:05~17:00

日本建築協会会議室

出席者 福岡幹事ほか6名

議 事 (1) 法令コーナーの企画
(2) 2020年特集の企画

第6回作品作風小委員会

11月28日(木) 19:00~20:00

日本建築協会会議室

出席者 池上委員ほか3名

議 事 (1) 作品の選定
(2) 作品の掲載状況、予定
(3) gallery掲載報告、予定
(4) その他

事業委員会

11月12日(火) 18:05~19:20

日本建築協会会議室

出席者 中尾委員長ほか9名

議 事 (1) 本年度事業の検討
(2) イケフェス2019スペシャルツアー
結果報告
(3) 令和2年在阪建築15団体合同新年
交礼会実行委員

出版委員会

第7回出版委員会

11月26日(火) 18:00~19:20

日本建築協会会議室

出席者 西委員長ほか7名

議 事 (1) 既刊書籍経過報告
(2) 制作進行中の書籍
(3) 今後の出版テーマ
(4) 建築セミナー

教育委員会

第5回史料研究会

11月19日(火) 18:00~20:00

日本建築協会会議室

出席者 橋寺委員長ほか8名

議 事 (1) 協会誌での連載
(2) 街歩きイベント

第8回大阪府住まい・まちづくり普及協議会

11月15日(金) 10:30~12:00

大阪建築会館会議室

報告・議題

- (1) 出前講座
- (2) 補助金
- (3) 2020年日本建築学会教育賞(教育
貢献)への応募
- (4) その他

未来創生プロジェクト

第7回建築次世代委員会

11月6日(水) 18:35~19:40

日本建築協会会議室

出席者 菅原委員長ほか6名

議 事 (1) 学生のための現場見学会
(2) 見学会案内ポスター

第12回2040委員会

11月11日(月) 19:30~

大林組会議室

出席者 中村サブリリーダーほか3名

議 事 (1) 企画内容
(2) 今後の委員会活動

第8回U-35委員会

11月6日(水) 19:30~

大成建設会議室

出席者 高畑リーダーほか6名

議 事 (1) 活動/予定
(2) 次回予定/その他

審査会

論考コンクール第1回審査委員会

11月27日(水) 19:00~20:00

日本建築協会会議室

出席者 審査委員 舟橋國男審査委員長ほか4名
協会関係 設楽会長、米井副会長ほか1名議 事 (1) 新委員自己紹介
(2) 審査方針
(3) 応募点数
(4) 今後の日程

見学会

第3回学生のための現場見学会

「堺東駅南地区第一種市街地再開発事業 施設建
築物新築工事」現場見学会

11月19日(火) 14:00~16:30

講 師 ㈱竹中工務店大阪本店統括作業所長

中川英樹氏

課長工事担当 一石貴史氏

委 員 菅原委員長ほか3名

参加者 21名

表彰式

第65回工高生デザインコンクール表彰式

11月9日(土) 13:30~16:30

綿業会館本館2階中集会室

出席者 受賞者20名(引率者10名含む)

審査員 6名

委 員 谷口小委員長ほか3名

協会関係 設楽貞樹会長

実行委員会

論考コンクール第1回実行委員会

11月12日(火) 18:00~20:10

日本建築協会会議室

出席者 吉村実行委員長ほか5名

協会関係 設楽会長ほか2名

議 事 (1) 実行委員任期
(2) 告知方法
(3) テーマ案と審査委員選任
(4) 今後の日程

編集委員会(2019年度)

■副会長

米井 寛

■編集担当理事

木谷 晃之

○勝山 太郎

佐藤 榮一

竹中 統一

西 博康

松崎 公一

船越 淳久

吉村 英祐

■副委員長

○戸川 勝之

■特集小委員会

■計画分科会

★計画系

飯田 匡

鈴木 克彦

△田中 直人

松田奈緒子

守井 辰

吉村 英祐

★建築計画系

奥田 英雄

桑原 悠樹

下坂 浩和

△東 拓郎

樋口 展寛

松岡 英緯

三谷 帯介

米山 剛史

渡部 剛

★インテリア・住宅系

赤川貴世友

東 奈生子

今井 充彦

岩田 圭司

川合 隆之

河西 孝平

△黒柳 亮

塚口 洋之

ペリー史子

■構造分科会

△宇野 綾真

岡田 健

岸本 光平

古島 正博

正野 和司

瀧野 敦夫

竹本 孝輔

萩原 学

宮久保秀樹

向井 洋一

■設備分科会

有尾清二郎

木谷 晃之

北野 勝也

佐々木章二

寺井 千佳

夏井 重行

△橋本 直樹

榊井 貴廣

宮崎ひろ志

森山 正和

山本 雅洋

■施工材料分科会

門野 陽

桜井 和男

高橋 秀一

△藤丸 啓一

山口 紀宏

河合 智寛

吉田 正友

吉居 哲

■法令分科会

岡田 耕介

垣内 明

河野 学

高田 大輔

△福岡 誉顕

■作品作風小委員会

▲東井 嘉信

居内 章夫

池上 明

稲垣 和江

太田 栄治

加嶋 章博

菊池 浩輔

倉渕奈千子

澤田 純一

高木 秀晃

榎野 淳司

西田 佳代

芳谷 晴彦

平野 尉仁

増田 敬彦

■広告企画小委員会

小川 雄介

金築 雄

小山 昭

野山 将男

藤田 昌宏

▲前田 衛

山辻 直樹

(順不同)

◎委員長

○副委員長

▲小委員会委員長

△幹事

印刷 2019年12月24日

発行 2020年1月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪市中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 ㈱中島弘文堂印刷所

定価 1254円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

**お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるように**

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社 日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。

1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：4月号～翌年3月号までの1年間

掲 載 料：48,000円（消費税込み）

サ イ ズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。

※原稿は1年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人 日本建築協会 内山・井筒

TEL : 06-6946-6981 FAX : 06-6946-6984 E-mail : koukoku@aj.or.jp

